TALES OF PHANTASIA
SPECIAL STORY
テイルズ オブ ファンタジア
はるかなる時空（とき） 上
矢島さら
ファミ通文庫

矢島さら
Sara Yajima

1961年、横浜市生まれ。ジュニア小説、恋愛小説、エッセイなどを手がけるほか、麻宮笙の名で、ファンタジー小説でも活躍。また、かえるを心から愛してやまない「かえる友の会」会員として、精力的に活動中。主な著作に『あなたがそばにいるだけで』(福武文庫)他、多数。

藤島康介
Kousuke Hujishima

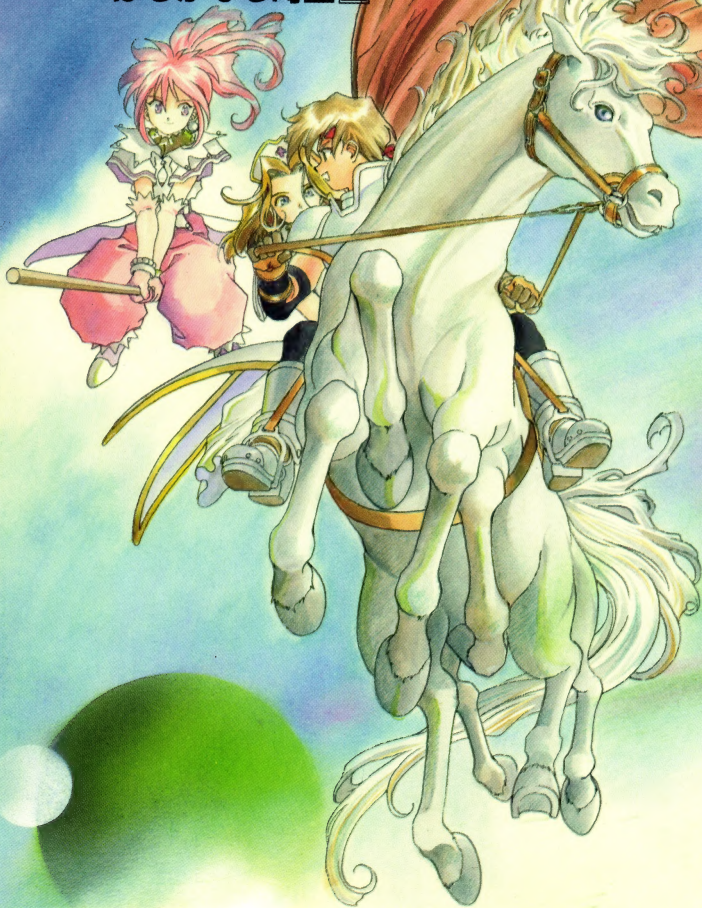
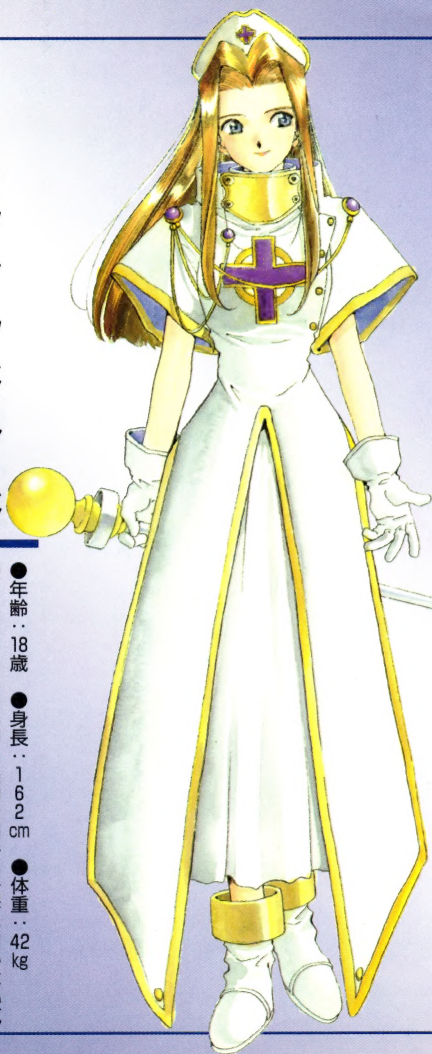
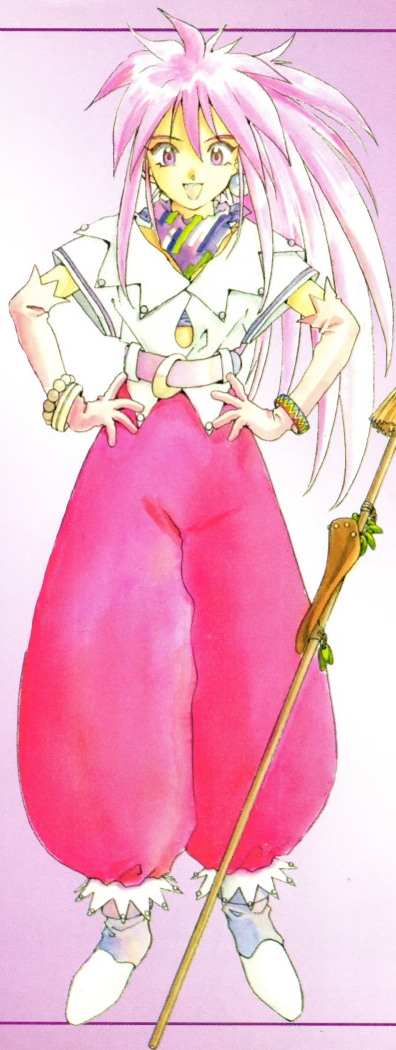
前回のスーパーファミコン版同様、今回のPS版「テイルズ オブ ファンタジア」でもキャラクターデザインを担当。主な作品に「逮捕しちゃうぞ」(パーティーKC刊)、「ああっ女神さま」(アフタヌーンKC刊)などが上げられる。またそれらの作品は、TV、ビデオ、映画等、マルチメディア展開が数多くなされることでも注目を集める。

カバーイラスト　藤島康介

テイルズ オブ ファンタジア

はるかなる時空(とき)上

矢島さら

TALES OF PHANTASIA®
はるかなる時空(とき)上

クレス・アルベイン
●年齢：17歳 ●身長：170cm ●体重：59kg
本編の主人公。優しく非情になりきれないところが剣の甘さに出るが、仲間はそんなところに引かれている。

ミント・アドネード
●年齢：18歳　●身長：162cm　●体重：42kg
控えめでおとなしいが、怪物を相手に一歩も引かない気丈さを持つ。法力と呼ばれる癒しの力を使う法術師。

アーチェ・クライン

●年齢：17歳　●身長：157cm　●体重：39kg
喜怒哀楽を感じたままに表に出す。普段は活発・快活でうるさいくらい。エルフと人間のいわばハーフ少女。

クラース・F・レスター

●年齢：29歳　●身長：176cm　●体重：62kg
冷静沈着で、人見知りが激しい性格。魔術を使えぬ人間であるため、それに匹敵する召喚術を研究、体得する。

チェスター・バークライト

●年齢：17歳 ●身長：175cm ●体重：62kg

クレスの親友。少し皮肉屋のところがある。でもこれは、大人と対等に渡り合うためにつけた癖。決断は早い。

テイルズ オブ ファンタジア

はるかなる時空(とき)㊤

矢島さら

目次

プロローグ

外界から遮断された地下空間に、美しく波うつ金の髪を持った男が現れた。
傷つき、息も絶えだえだったが、その薄い唇には笑みが浮かびかけている。が、次の瞬間、鋭い声が響いた。
「やはり来たか。待っていたぞ！」
彼はハッと顔をあげ、目の前に広がる暗がりの中に声の主を探そうと視線を漂わせた。
そのときだった。まばゆい光があたりを真昼のように照らす。
「おうっ⁉」
彼は思わずよろけたが、光の中に自分を待ち受けていた者たちの姿が浮かび上がるのを認め、やっとのことで体を支え直した。必死に目を凝らすと、男女それぞれふたりずつであることがわかった。
四人のうち、男のひとりが進み出た。法術師のようだった。

「き、きさま、なぜここに……待て……」
だが男は答えず、口の中でなにごとか唱えた。急激に強まる光の中で、金の髪の男は苦しみ悶える。彼は自分の体がひどく窮屈な場所に押し込められるのを感じていた。
「やめろぉっ。ぐわあああぁぁぁぁぁ――――っ！」

金の髪の男が動かなくなったのを見て、法術師が仲間を振り返った。
「……やったぞ！」
「早く棺の蓋を！　封印してしまいましょう」
「これで私の家に代々続いた使命も終わりか」
「そうだな。我々の愛する子供たちのためにも、これからの平和な世界を守り抜かなくては」

金の髪の男は薄れゆく意識の中で懸命に叫んでいた。
(こ、こんなバカな……甦ってやる、必ず……私にも守るものがあるということを、思い知らせてやる――――！)

第一章

「なんだ、クレス。出かけるのか」
昼さがり、台所の床に座りこみ、鼻歌まじりで狩りの準備をしていたクレス・アルベインに、父親のミゲールが声をかけた。
「うん。もうすぐチェスターが迎えに来ることになってるんだ。そっちの稽古はもう終わったの？」
自宅を兼ねている道場からさっきまで響いてきていた威勢のいいかけ声がいつの間にかきこえなくなっていることに気づいて、クレスは訊ねた。
クレスの家は代々続くアルベイン流剣術の師範である。ここ、トーティスの村はユークリッドでも一、二を争うのどかさだが、娯楽らしい娯楽はほとんどない。それも手伝ってか、道場はなかなかの盛況をみせていた。もちろん、ミゲールの天才的腕前の評判を聞きつけ、はるか他国から弟子入りしてくる者もいる。

「今日はお前に話があると言っておいたはずだぞ」
ミゲールは鍛練でかいた汗で光る額を手でぬぐう。そして今年十七歳になった息子の、まだまだ剣士というにはすんなりしすぎている首のあたりに視線を当てた。
「わかってるよ。これのことだろ？　なんの話か知らないけど、夕食のときじゃいけないかな。こんな天気のいい日に……」
クレスは二年前の誕生日に両親から贈られて以来、肌身はなさずつけているペンダントに手をやった。丸い石のついている、かなり大ぶりのものだ。そのとき、開け放たれていた窓の外から彼を呼ぶ親友の声がした。
「クレス！　支度できたか」
「チェスター」
クレスはほっとしたようにミゲールを見た。
「仕方のないやつだな。よし、話はあとにしよう。大切な話だから、ゆっくりとな」
「わかったよ、父さん」
クレスは父親に向かって微笑（ほほえ）むと勝手口のドアから出て行こうとした。だがふと振り返り、野菜を洗っていた母のマリアに声をかける。
「母さん。僕たち、南の森へ行くから。夕飯用に猪を獲ってくるよ」

「まあ、こんな陽気に猪のシチューを作れっていうの？」
マリアはおかしそうに微笑むと戸口までやってきて、ひとり息子を送り出した。そして、庭の樹にもたれかかって待っていたチェスターに、あとで妹と一緒に食事にくるよう誘った。
「ありがとうございます。でもどうせアミィのやつ、もうすぐお邪魔すると思いますよ。おばさんたちに食べてもらうんだって、ナッツケーキとプディングを作ってましたから」
チェスターは答え、クレスの両親に向かって軽く頭を下げた。
やがてクレスたちが庭を横切って出ていってしまうと、ミゲールはため息をつく。
「クレスにも困ったものだな。親の気も知らず、遊んでばかりだ」
「いいじゃないですか、あなた。それだけ今が平和ということですよ」
「ああ、そうだな……二度とあんなことはごめんだ」
「そうですとも」
ミゲールとマリアは、澄み渡った空を仰ぎながら頷（うなず）いた。
五月の風がここちいい。樹々はぐんぐんと芽吹き、村が丸ごと緑色に燃えているよう

だ。森が近づくにつれ、クレスの足取りは自然、軽くなる。
「ごきげんだな」
弓を手にしたチェスター・バークライトが切れ長の瞳で、クレスをちらりと見た。彼は十七歳にして百発百中、名手といわれるほどの弓の使い手だった。
「そりゃそうさ。道場で稽古もいいけど、なんてったって狩りは実戦だもんな。スリルが違うよ」
クレスは楽しくてしかたないというふうに笑う。が、すぐにチェスターの顔色がさえないのに気づいた。
「ん？　どうしたんだ……ははん、わかったぞ。昼飯にタマネギ入ってたんだろ。またアミィちゃんに怒られたな」
「う、うるさいっ」
チェスターは、青みがかったグレイの髪をふるふると揺らして怒鳴った。彼の髪は長く、優に腰まである。それを無造作にうなじのところで結んでいた。
（こいつ、この話題になると本気で怒るんだから）
クレスは笑いを噛み殺す。チェスターは幼いとき、村のはずれに掘ってあった穴にあやまって落ちたことがあるのだ。穴にはどろどろに腐ったタマネギがたっぷり捨ててあ

ったから、たまらない。以来、タマネギだけは見るのもいやという性格になってしまったのだった。
チェスターの両親は妹のアミィが生まれてまもなく病死した。今は十五歳になったアミィがしっかり主婦兼母親がわりをつとめているが、彼女はときどきわざとタマネギたっぷりの料理を作るらしい。
「あいつはオレをいじめて楽しんでるんだ」
「たったひとりの肉親の健康を気遣ってくれてると言えよ。ああ、ここから森に入ろう」
クレスが苦笑まじりに木立ちを指さしたとき、道の反対側からひとりの男が足早にやって来るのが見えた。
「あ、トリスタン師匠」
「おお、クレスじゃないか。これから父上を訪ねるところじゃ」
トリスタン師匠は皺（しわ）だらけの顔をくしゃくしゃにして笑った。剣の達人として名高いこの老人は都に住んでいるが、ミゲールとウマが合うらしく、しょっちゅう道場にやって来るのだ。クレスも何度か稽古をつけてもらったことがあるが、決して熱くなることはない。本当に達人なのかどうか、クレスはちょっぴり疑っていた。
「ちょうど今さっき稽古が終わったところです」

「うん？　おんしらは狩りかね」
「ええ。でっかい猪を獲ってきますよ」
チェスターが愛用の弓をぐいと突き出して見せるようにすると、トリスタン師匠は「若いもんはいいのぉ。気をつけてな」とふたりにむかって軽く手をあげた。
森に入ると、とたんに空気が変わる。クレスたちはしばし、噎せ返るような樹の香りに言葉を失った。
森は不思議だ、とクレスはここに来るたび考える。この神秘に満ちた樹々の連なりの奥の奥にならなら、なにが棲んでいてもおかしくないだろう。神でも、もしかして……悪魔でも。
クレスは矢筒から矢を取り出している親友の真剣な横顔をそっと見た。言葉にこそ出さないけれど、チェスターも同じことを感じていると確信して、クレスは満足だった。
と、ふたりの目の前にちょろちょろっと何かが走り出た。小さな猪だ。
とっさに剣を抜いたクレスを、チェスターが冷静に止める。
「よせ、まだ子供だ。もっと大物を狙おうぜ」
「あっ、あれあれっ。今度は文句ないよなっ？」

五、六頭の猪が木立ちの間を行くのを見つけたクレスは、もう走り出している。
「よしっ、ふた手に分かれよう。はさみうちにするんだ！」
チェスターの声を背中に聞きながら、クレスは土煙をあげて走る猪を夢中で追いかけた。猪は追手に気づくと、茂みの中へ次々飛び込んだ。
どれくらい駆け続けただろう。獣道は狭く、クレスは小枝の先で何度も頰をひっかいていた。
「あれ、ここは……？」
突然目の前が開けた。クレスは無意識に自分の茶色がかった金髪を手で梳きながら、首をかしげた。猪の気配は遠ざかり、静寂があたりを包んでいる。
「ずいぶん奥まで来ちゃったみたいだな」
クレスは正面に巨大な樹が立ち枯れているのに気づいて驚いた。
「でっかい樹だなあ。でも、なんでこれだけ枯れてるんだろ」
草を踏み、近づいてみる。黒ずんだ幹――十人で抱えても余るほどの太さがある――に手を触れただけで、枝に残っていた枯れ葉が、大量にクレスの頭に降りかかった。
「ぶわっ」
あわてて枯れ葉を払いのけていると、聞きなれた足音が近づいてきた。

「おいクレス、探したぞ。こんなところにいたのか」
「チェスター。どうだった」
チェスターは、にっと笑うと胸を張った。
「と一ぜん仕留めたさ。重すぎるんで途中に置いてきたんだ。運ぶの、手伝ってくれ」
「へえ。さすがだな、我らがトーティスが生んだ弓の名手は」
「だろ？　誰かのへなちょこ剣術とはちょっと違うぜ……っておまえ、なんだよ」
チェスターはクレスの肩についていた枯れ葉を払ってやりながら、あきれて言った。
「なにやってたんだ、精霊の樹なんかと」
「精霊の樹？」
クレスはオウム返しに訊ねた。
(こんな汚い枯れ木に……精霊が棲んでるっていうのか？)
「いちおう、そう呼ばれてるらしいぜ。オレはよく知らんが」
「ふーん」
クレスはあらためて大樹のそばへ行き、枯れた幹や枝を振り仰いだ。そのときだった。
幽(かす)かな声が聞こえた。
〝樹を……けがさないで……〟

（え!?）
あわててあたりを見回すが、誰もいない。
（なんだったんだ……）
空耳かな、とクレスが思ったとき、今度は急に霧がかかったように目の前がまっ白に霞むかすむ。
するとと驚いたことに、大樹が緑豊かに生きているではないか。太陽の恵みを一身に受け、天にも届く勢いだ。枝々では小鳥たちがさかんにさえずっている。
（………）
呆然ぼうぜんと突っ立っていたクレスは、背中を叩かれてハッと我に返った。
「あ」
「どうしたんだよ、クレス。ボケっとしやがって」
「いや、今なにか聞こえなかったか？　それに……」
クレスが不思議そうな顔をしている友人に、たった今自分が見聞きしたことを説明しようとしたとき。「しっ」とチェスターが鋭く遮った。
「な、なんだよ」
「聞こえないのか。警鐘だ、村の警鐘が鳴ってる！」

「違うよ、僕が聞いたのは……え、け、警鐘だって⁉」
クレスはびっくりして木立ちの隙間に神経を集中した。
カン、カン、カン……。
微かではあるが、確かにトーティスの方角から聞こえてくる。誰かが村の中央にある櫓にのぼり、鳴らしているのだ。
「どうしたんだろう、ここ何年もあれが鳴ったことなんてなかったのに。火事でも出たかな。それとも子供が川に落ちたとか……」
「とにかく戻ろう」
「猪は？」
「そんなもんほっとけ。急げ、クレス！」
「あ、ああ」
ふいにひどい胸騒ぎが襲ってきた。クレスの頭からは今見たばかりの大樹の幻のことなどとっくに消し飛んでしまっていた――。

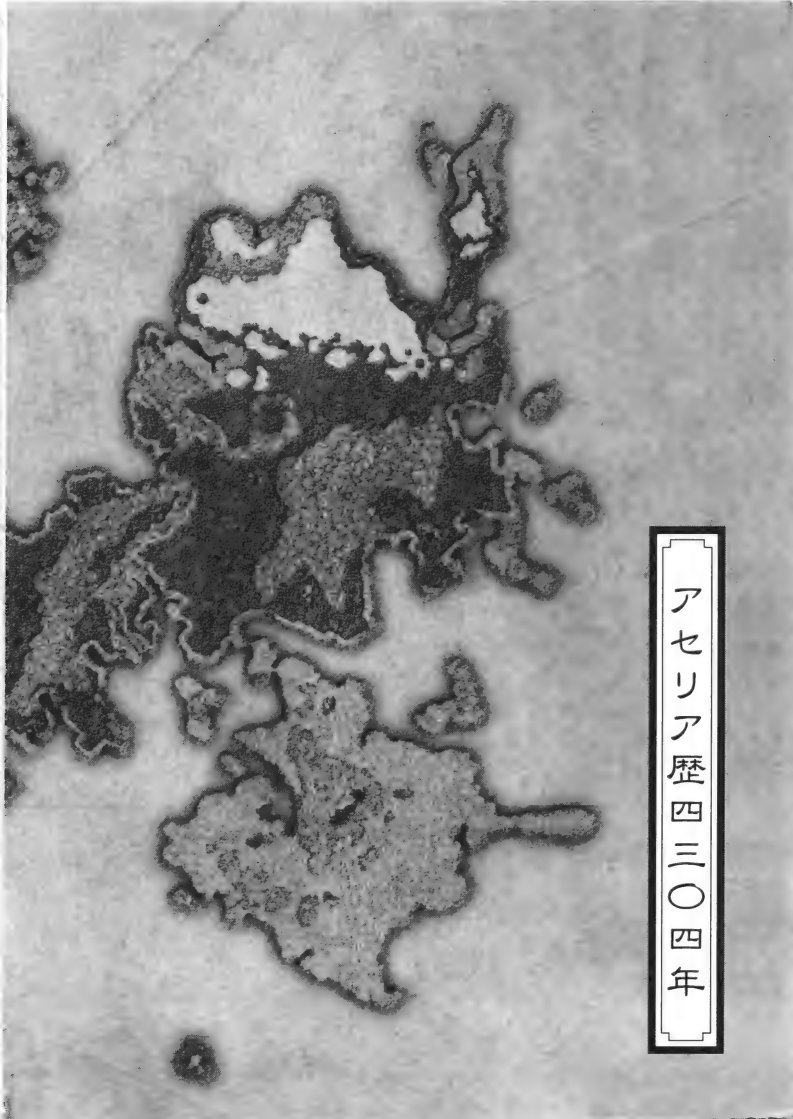
「これは一体……！」

村の入り口まで戻ったふたりは、呆然となった。
「村が、なくなってる……？」
クレスは信じられないといった口調で弱々しく首を振った。
なくなっている、との表現はあながち大げさではなかった。家という家は何者かによって破壊され、ついさっきまで両脇に美しい花が咲きほこっていた道を瓦礫が塞いでいた。ここからは見えないが、どこかで火の手も上がっているのだろう、どす黒い煙が流れてくる。
「おーい、誰かいないか!?」
チェスターが叫び、しばらく待ってみたが、応える者はなかった。
「みんな、どうしちゃったんだ。なぜ……」
「アミィ！」
突然、チェスターがおろおろしだしたクレスを突き飛ばすと、駆け出した。
(そうだ、父さんと母さん！)
クレスも弾かれたように道場への道をとる。顔見知りの村人が何人も変わり果てた姿で倒れていた。そして間もなく、崩れ落ちた道場の石壁の脇に、父ミゲールが倒れているのを発見した。

「父さんっ！」
クレスはあお向けに横たわっている父親の肩に触れてみたが、すでに息はなかった。
「……ク、クレ……ス……」
そのとき、地面に跪(ひざまず)くクレスの背後から、消え入るような声が呼びかけた。
「か、母さんっ」
マリアは必死の気力をふりしぼって、瓦礫の上を這(は)っていた。あわててクレスが駆け寄り、抱き起こす。
「母さん、これは一体どういうことなんだ？　誰がこんなひどいことを」
「クレス……よく聞いてちょうだい。すぐにここから……逃げるのよ」
「え？」
「いいから一刻も早く！　あいつらはおまえのペンダントを狙って村を……」
「なんだって？」
クレスは訝(いぶか)しげにマリアの血に汚れた顔を覗(のぞ)き込んだ。
「オルソンのところへ……都の伯父さん、わかるわね？　追手のかからぬうちに早く発ちなさい」
「ちょっと、僕には何がなんだか……だいたい」

あいつらって誰だよ。クレスの質問が耳にとどかないうちに、マリアはクレスの腕の中で静かに息を引き取った。
「……うそだろ、母さんっ」
クレスはがくがくと母の体を揺すったが、二度とその目が開くことはなかった。
「クレス」
「チェスター！」
いつの間にか、チェスターが目の前に立っていた。
「どうだった。アミィちゃんは？」
チェスターは微かに充血させた切れ長の目を伏せると、かすかに首を振ってみせた。
「そうか……こっちもだ……父さんも母さんもダメだった」
「どうやらトーティスで生き残ったのはオレたちふたりだけらしい」
「そんなっ」
「本当さ。しかし、おかしいと思わないか、クレス。オレたちはたまたま森に入っていて助かったが、そんなに長い時間のことじゃない。だが、オレたちが戻ったときにはもう、誰もいなかった。相当訓練されたやつらが襲ったとしか思えない。しかも大勢でだ」
チェスターはクレスに視線を当てたままで続けた。

「なんでこんな田舎の村に、そんなやつらが現れたんだろうな」
「……」
クレスは鎧の下からペンダントを引っぱり出した。
「母さんが……これのせいだと」
「え？　おとといの誕生日に貰ったってやつだろ、これ」
チェスターはペンダントの銀鎖をつかむと、そこについている乳白色の石を顔に近づけた。
石は丸く、表側だけが緩やかに盛り上がっている。宝石というには無骨な感じだが、よく観察すれば七色の輝きが見てとれるのだった。
「何なんだ、これ」
「わからない。父さんも母さんも何も言わずに僕にくれたんだ」
「ふん」
チェスターは不満そうだった。
「こんなもののために村が丸ごと崩壊したってか？　とても信じられないね」
「僕だってそうさ」
クレスはペンダントをしまい、チェスターに一歩、歩み寄った。

「なあ。一緒にユークリッドの都に行こう。伯父さんがいるんだ。ここにいるのは危険だって母さんが」
「断る」
チェスターは即座に言い放った。
「アミィをこのまま残して行けっていうのか」
「あ……」
「おまえだけ行けよ。おじさんとおばさんはオレが引き受けた。さっぱりわけがわからんが、あのおばさんが言ったからには、そうしたほうがいい」
ぽつりと冷たいものがクレスの頬にあたった。雨が降り出したのだ。
「くそ。さっきまで雲ひとつない天気だったのに」
チェスターは空を見上げて舌打ちし、クレスの腕をつかむと傾きかけた家の軒下まで引っぱって行った。そして息がかかるほど顔を近づけ、
「いいか。オレもあとからきっと行くから。一生の別れっていうわけじゃないぜ」
と言った。
そして服をごそごそまさぐっていたと思うと、クレスの口にふいになにかの固まりを押し込んだ。

アセリア歴四三〇四年

ユークリッド
トーティス
モリスンの家
南の森
地下墓地

「ふぐっ」
(甘……これは、ナッツケーキ⁉)
クレスが目で問うのに、チェスターは頷き、うめくように言った。
「うまいだろ。よく味わって食え。あいつ、オーブンの前で倒れてたよ」
「甘くて、香ばしいよ……チェスター」
クレスの脳裏に、アミィの愛くるしい笑顔が浮かぶ。
「……仇を討とうぜ、いつか、ふたりで」
「ああ」
ふたりはそのまま肩を抱き合い、激しくなった雨の音をいつまでも聞いていた。

チェスターと別れ、ひとりトーティスから北へ向かうクレスの足取りは、ひどく重かった。
(これは、本当に現実なのか……？　悪夢を見てるみたいだ)
これから訪ねるオルソンは、母の兄にあたる。何度かトーティスに訪ねてきたことがあるので、面識がないわけではなかったが、こちらから会いに行くのは初めてのことだ。

ユークリッドの都に入ったのは、村を出て三日目の午後のことだった。いつペンダントを狙う者たちに襲われるかもしれない。そう考えるとおちおち休息もとれないままだった。

行商人たちが思い思いに広げている即席の店。ピエロの格好をした男たちの曲芸を見るために集まっている子供たち。広場は雑多な人や音であふれ返っている。きれいに整備された石畳の道に、クレスはなんだか拒絶されているような気がした。

「あのう、すみません。ちょっと教えてほしいんですけど」

クレスは、ちょうど通りがかったふたり連れの中年男に声をかけてみた。

「オルソン・ドローという人の家を探しているんですが」

ドローはマリアの旧姓だった。

まだ陽が高いというのに、どこかで一杯ひっかけてきたらしい男たちのひとりは、

「あ？　オルソンさんだって？」

と、クレスの顔を覗き込んだ。

「オルソンさんちならよーく知ってるよ、近所だからな。あっちの方角だ。なっ」

そうそう、と赤ら顔の連れが頷く。

「そういや何日か前、あの家に見かけない客が出入りしてなかったか？」

「へええ、俺は見なかったがな。この兄ちゃんも見かけない顔だぜ。どっから来たんだ、んんん？」

「いや、僕は……」

「おおかたオルソンに口をきいてもらって、我がユークリッドが誇る独立騎士団にでも入ろうってんだろ。けど、今は募集してないよ。もう何か月も前から隊長が行方知れずで、それどころじゃないんだと」

酒臭い息を吹きかけられ、クレスはあわてて男たちに礼を言うと、その場を離れた。

オルソンの家はすぐに見つかった。門で呼び鈴を鳴らすと、玄関から女性が出てきた。年齢からして、オルソンの妻に違いない。

「あのう……」

「どなた？　あ、もしかして……クレスじゃあ」

「え……」

「そうなのね？　ああ、会うのは初めてだったわね。私、ジョアンよ。あなた！　マリアさんのところのクレスが！」

ジョアンは驚きに目を見張ったまま、家の中に向かって叫んだ。そしてクレスに向き

直ると手を取った。
「心配していたのよ。けさ、この都の独立騎士団の人が早馬で知らせに来てくれたの。たまたま任務でトーティスを通りかかったら、村が……崩壊していたって。よく無事で来てくれたわ」
　また騎士団か、とクレスは密(ひそ)かに思った。
(伯父さんは騎士団と親しいのかもしれないな)
「クレス！」
　そのとき、玄関からオルソンが飛び出して来た。
「伯父さん」
「聞いたぞ。本当なのか」
「……ええ」
「それで、父さんと母さんは？」
　クレスが無言で首を振ると、オルソンは唇を噛みしめた。
「いったい誰が……」
　わかりません。そうつぶやいた直後、クレスはオルソンの腕の中に倒れこんだ。

どれくらいたったたろう。極度の緊張と疲労のために気を失っていたクレスが目を開けると、あたりは真っ暗だった。どうやらベッドに寝かされているようだ。

(ここは……)

クレスはハッとなって体を起こした。首すじに触れ、ペンダントの鎖の感触を確かめる。

「よかった、ちゃんとある！ ……そうか、僕は伯父さんの家に来たんだっけ」

クレスは、ほっとして自分が寝かされていた小部屋を見回した。テーブルの上に簡単な食事の用意がしてあるのが、ランプの明かりで見てとれた。ジョアンの心遣いだろう。

窓から見える夜空には、大小ふたつの丸い月がかかっている。

物音ひとつしないのは、すでに深夜だからだと思われた。

クレスは急に空腹を覚え、パンとスープの皿に手を伸ばした。スープはすっかり冷えていたが、あっという間に飲み干してしまう。胃袋が満たされると、ようやく思考能力が戻ってきた。

(まいったな。伯父さんにろくな挨拶もしないうちにダウンするなんて、情けない)

と、部屋のドアがコトリと音を立てた。

「伯母さん？」

てっきりジョアンが様子を見に来たのかと思い、クレスはベッドに立てかけてあった剣をホルダーにおさめると、自分でドアを開けに行った。しかし、そこに立ちはだかっていたのは見慣れない五、六人の男たちだった。クレスは、思わず後ずさる。彼らは兵士らしく、全員頑丈そうな鎧に身を包んでいた。
「だ、誰だ、お前たちは……！」
すると、年嵩（としかさ）の男がひきつった笑みを浮かべながら答えた。
「ふふふ。独立騎士団を知らぬとは、さすがは田舎者だな」
「！」
「おっと。剣はこっちに寄こすんだ、クレス・アルベイン。一緒に来てもらおうか」
たちまち剣を奪われ、クレスは両脇からがっちりと取り押さえられてしまった。
「は、放せっ！　伯父さんたちはどこだ!?」
「オルソン？　あやつなら女房と一緒にとっくに都を出たわ。二度と戻らん」
「ど、どういうことだよ」
クレスは動揺した。
「なあに。あやつらは都の安全と自分たちの命とを引き換えに、おまえをこっちに売ったまでのこと。どうだ、優しい伯父さんに裏切られた気分は」

男たちはいっせいにせせら笑った。

「さっさとしろっ！」

昼間の喧燥が嘘のように静まり返った夜道を引きずられ、クレスは一軒の家の中に連れ込まれた。距離からして、都のはずれのほうだと思われた。

「入れ。マルス隊長がお待ちかねだ」

(隊長だって?)

クレスの頭の中で何かが反応したが、とっさには思い出せない。

その部屋は、古びた調度品で埋めつくされていた。燭台で揺れる蠟燭と、微かな黴のにおい……。

「おい、小僧」

ふいに呼ばれ、クレスはびくっとした。黒い鎧をつけた男が、こちらを睨みつけている。こいつがマルスか、とクレスは思った。

「手間をかけさせやがって。それをこっちへ寄こすんだ」

マルスは大股に近寄ると、クレスのペンダントの鎖をひきちぎった。

「あっ！　何をするんだっ」

兵士に押さえつけられているので、クレスは抵抗できない。ペンダントの石は、蠟燭の明かりに一瞬輝きながら、マルスの手中におさまってしまう。
(くそう……)
クレスが唇を嚙んだ、そのときだった。不敵な笑いを浮かべたマルスが数歩、クレスから離れる。壁に埋め込まれている大鏡に、黒い鎧の後ろ姿が写った。
「!?」
クレスの目が驚きに見開かれる。鏡の中には、黒は黒でも、とても人間とは思えないおぞましいものが蠢いていたからだ。尖った二本の角、煙のように不確かなシルエット……。
(モ、モンスターだ。こいつは一体……)
クレスの脳裏に、さっき思い出しかけたことがようやく閃いた。
「そうだ、マルス……たしか、独立騎士団のマルス隊長は何か月も前から行方不明になってるって……」
「なにをぶつぶつ言ってる。おい、この小僧を地下牢へぶちこんでおけ」
「はっ」
年嵩の兵士に小突かれ、クレスは出口へ向かってよろめく。

「やめろ！　僕のペンダントを返せっ！」
振り返り、大声で叫ぶクレスの鼻先で、重たげなドアが音を立てて閉まった。

「まいったな」
冷たい地下牢の一室で、クレスはウロウロと歩き回りながら、頭を抱えていた。こうして動いていても、足元からは湿った冷気がのぼってくる。石造りの壁面には申し訳程度のランプが燃えていたが、とても暖をとるほどの火力ではなかった。
「こんなところで凍え死ぬのか、僕は……」
生まれ育った懐かしい村を破壊され、両親を失い、伯父を頼れば裏切られ、ついにはペンダントまで奪われてしまった。
クレスは牢の隅に置いてあったぼろ毛布を体に巻きつけながら、トーティスで別れたチェスターのことを考えた。
「どうしてるかな、あいつ」
親友の切れ長の瞳が、闇の中で笑いかけた気がした。クレスは、ふるふると頭を振ると巻きつけたばかりの毛布をかなぐり捨て、牢の壁を手探りで調べ出した。
「弱気になっちゃいけない。逃げ出せるかどうかわからないけど、やるだけはやってみ

よう。ここ数日の間に僕のまわりに起こったのがどういうことなのか、せめてそれだけでも知りたいもんな」
冷たい石壁を探っていくと、小さな穴にぶつかった。胸の高さ、ちょうど手が入る程度の大きさである。どうやら隣の牢とつながっているらしい。クレスは穴の中を覗いてみた。
「ダメだ。あっち側の壁しか見えないや」
と、そのとき、穴の向こうでふわりと空気が動いた気がした。
「こちらに、手を――」
微かな、優しげな女性の声だった。
「えっ、そこに誰かいるんですか」
「手を差しのべてください。さあ、早く」
クレスがせかされるままに穴に右手を入れると、すぐに誰かの暖かい手に包み込まれる感触があった。続いて何かが手のひらに落としこまれる。
「それを穴にかざすのです。あなたならきっと外に出られるでしょう」
「え……これは？」
「イヤリングですわ」

方のようだ。

「さあ。わたくしを信じて」

「はあ」

クレスはなにがなんだかわからないまま、言われた通りにイヤリングをかざしてみた。

ピシ、ピシピシ……！

「うわあっ、穴が広がってく……？」

イヤリングから白い光が放たれたと思うと、頑丈な石壁が音をたてて崩れ落ちた。クレスはおそるおそる穴をくぐり、隣の牢へ入った。

「あのう、どうもご親切に。どうなっちゃってるのかよくわからないけど、こんなすごいものがあるなら、一緒にここから逃げませんか……と。あれ？」

クレスはきょろきょろと牢内を見回した。誰もいないのだ。

「おかしいな」

すみの暗がりに何気なく目をやったクレスは、ぎょっとなった。

「う……」

髪の長い女の屍骸（しがい）が、お座りさせられた人形のような姿勢で壁にもたれかかっていた。

肋骨の間には、たぶんそれが死因だったのだろう、長剣が突き立てられたままだ。
「ひどいことを……。これもあの男の仕業なのか」
クレスは亡骸からそっと抜いてやったロングソードの柄を、ぐっと握りしめた。
「どうもありがとうございました。これ、使わせてもらいます」
女性に軽く一礼し、クレスは牢の扉を剣でこじ開けると通路に出た。そして、さっき自分の手を包み込んだぬくもりはなんだったのだろう、と思った。
しばらく進むと、前方にランプの灯った牢が見えた。
(真っ暗な空の牢ばっかりだけど、あそこにはきっと誰か捕らえられているに違いないぞ)
扉からそっと中を覗き込んだクレスは驚いた。意外にも、そこにいたのは自分と同い年くらいの少女だった。
「あ……、きみ、大丈夫?」
クレスが声をかけると、少女は一瞬驚きに目を見張ったが、すぐに弱々しく微笑んだ。
「ええ……」
白を基調にした細身の服を着て、手には美しい玉のついた杖を持っている。鳶色の瞳と、腰まで届く長い金髪は、クレスになにか神々しい印象すら抱かせた。

「待って。いま助けてあげるから」
「ありがとう。私はミントです、ミント・アドネード。あなたは？」
「クレス・アルベイン。いちおう剣士のはしくれだよ」
ミントは剣で扉の鍵を壊しているクレスをじっと見つめた。
「さあ、開いた。どうして捕まってるのか知らないけど、こんなところ、さっさと逃げだそう」
「待って、クレスさん」
ミントは通路の暗がりに視線を泳がせた。
「母がいるんです。この先の牢に」
「え」
(面立ちが似ている……)
クレスは、まじまじとミントの小さな顔を見た。それからなにか言わなくてはと焦り、とっさに、
「ミント、ここにはもう誰もいないよ。この先の牢には僕しかいなかったんだ」
と、不自然なくらい何度も大きく頷いてみせた。
「そんなっ。ついさっきまで声が聞こえていたんです。私を励ます母の声が……」

「どこかへ移されたのかもしれないよ」
クレスはミントから視線を逸らすと、彼女の手を取った。
「とにかく今は、ここを出るんだ。ここにいたらきっと殺される」
「……お母さん……」
ミントはなおもくちびるを震わせていたが、やがてあきらめたように歩き始めた。兵士たちが見張りをしているはずなので、地上へ続く階段は使えない。
「きみもあの黒い鎧の男たちに？」
ミントはこっくりと頷いた。数日前、母親と一緒に家にいるところを突然襲われ、つれてこられたのだと彼女は説明した。
通路の突き当たりまで行くと、あたりにたまっていた水がふたりのブーツを濡らした。
「地下水路か……。ここをたどれば上に抜けられるかもな」
「行ってみましょう」
ふたりは水路へ続く重たいドアを開けた。
「ひえっ、冷てーっ！」
クレスの情けない悲鳴に、ミントが思わずくすりと笑う。悲鳴は鈍く反響し、水路の奥に飲み込まれて消えた。

ふたりはしばらく水路脇の通路を黙々と進みつづけた。
「ねえ、ミント。きみのその服、変わってるね」
「そうですか。これ法衣なんですよ。ほら、これ」
沈黙に耐えられなくったクレスの問いに、ミントは杖を差し出してみせた。
「私、まだ見習いなんですけど、法じゅ……！」
「危ないっ、よけて！」
突然、前から後ろへ、ふたりの体をかすめてなにかが飛んだ。
「コ、コウモリ⁉」
「いや、それにしちゃ大きすぎる。モンスターだっ。下がって」
近ごろ都にモンスターが頻繁（ひんぱん）に出現するという噂（うわさ）は知っていたが、実際に目にするのは初めてだった。
クレスはロングソードをかまえ、ミントをかばった。そのままの姿勢から、再び近づいてきたモンスターに斬りつける。
「えいっ！」
ギャギャーッ！
まっぷたつになったモンスターは、暗い水の中に墜落していった。

「すごいわ、クレスさん」

「いやいや、これでも剣士のはしくれなんだ……おわっ」

クレスが照れる間もなく、今度は数匹まとめて背後から襲ってきた。目が慣れてきたのか、犬ほどある体長、その背に生えている不気味な翼まではっきりと捕らえることができる。

「ミント、出口に向かって走るんだ。早くっ」

クレスは無意識のうちに、父から教わった必殺技のかまえで、モンスターに挑んでいった。

「ええい、飛燕連脚！　えいっ！」

ごうごうと空気が唸ったが、それが風なのか地下水の流れの音なのか、わからない。

（猪狩りのスリルなんてお遊びだったな。チェスター、僕はいまやっとわかったよ）

クレスは、ただ必死でモンスターを斬り捨てながら、曲がりくねった水路を走り続けた。

やがて、とうとうまばゆい光がクレスを包んだ。外へ出たのだ。

見たところ、雑木林らしい。陽の感じはまだ朝の名残りをとどめている。

「クレスさん！」

ミントが駆け寄ってくる。
「よかった、無事で……。私ったら何のお役にも立てなくて」
「いいんだ。誰だって怖いさ」
うつむくミントに微笑みかけたクレスの頬が、わずかに引きつる。
「どこか痛いんですか。ああっ、ケガ」
ミントはクレスの右腕の肘あたりに、血がにじんでいるのを見つけ、眉をひそめた。
「たいしたことないよ」
「ありますよ。待っててください……ファーストエイドっ」
「えっ」
驚いたことに、ミントが杖をひと振りすると、ケガはきれいに消えてしまった。
「これは……」
「法術です。まだたいしたことはできなくて……」
ミントは、恥ずかしそうに長い睫毛を伏せた。
(明るいところで見ても、ほんとに綺麗な子だなぁ)
クレスはどぎまぎしながら口を開いた。
「あ……、治してくれてありがとう。すごいよ、こんなことができるなんて」

そのとき、地下水路の出口からモンスターの残党が飛び出してきた。そのままクレスの後頭部に激突する。
「うっ！」
「きゃあああーっ、クレスさんっ！」
クレスはあお向けに倒れた。
「どっ、どうしましょう」
ミントは、遠くから近づいてくるひづめの音に気づき、あわててクレスを抱き起こそうとした。と、彼のウエストの革ベルトのあたりから、銀色に光るものが転がり落ちた。
「あら、なにかしら……？」
何気なくそれを拾い上げたミントの瞳が、大きく見開かれる。
(これは……、まさか!?)
ひづめの音はもうすぐ側まで来ていたが、ミントの体は固まってしまったかのように動かない。
やがて、ザザッと樹の枝を分け、ひとりの男が姿を現した。
「ミント・アドネード。そうだね？」
ミントは思わず、ぎゅっと握りしめた手をうしろに隠した。

「おい、大丈夫か？」
　クレスは聞き慣れない男の声に、意識を取り戻した。あわててガバッと起き上がる。
　赤々と燃える暖炉がまず目に入った。男はクレスのベッドの横に立っていた。
「あ、あなたが助けてくださったんですか。ここは？」
　男は中年で、眼光こそ鋭いが、やや頬骨の目立つひょうきんな顔つきをしていた。
「君をここまで運んだのは私じゃないよ。もっと若くて元気な友人さ」
　と、男は肩をすくめて続けた。
「ここは私の家だ。私の名はトリニクス・D・モリスン。クレス君、君のことはお嬢さん——ミントからひととおり聞いた」
　バタンとドアが開き、果物を盛った籠（かご）を抱えてたミントがうれしそうに入ってきた。
「よかった！　気がついたのね」
「ああ、もうなんともないよ。あの、モリスンさん、僕を助けてくれた若い人というのは」
　クレスがミントとモリスンを見上げたとき、ビュッと風を切る音がした。次の瞬間、ミントがテーブルに置いた籠のリンゴに、矢が一本刺さっていた。

トリニクス・D・モリスン

「ひっ!?」
クレスはびっくりして、ベッドから転げ落ち、したたか腰を打った。
「いってえ！」
「ははは。相変わらずだな、クレス」
「その声は、チェスター!?」
クレスは叫んだ。
「じゃあ、おまえが僕をここへ運んでくれたのか。ウソだろ。おい、顔を見せろよ」
弓を手にドアの影から姿を現したのは、たしかにトーティスで別れた親友だった。ふたりはニッと笑い、かたく抱き合った。
「おまえが発ったすぐあと、このモリスンさんが村に来たんだ、おまえの家を訪ねてな……いろいろ手配してもらって、思ったより早く片がついたんで一緒に来たってわけさ。おじさんとおばさんのことはちゃんとしてきたから、安心してくれ」
すまなかった、とクレスは言い、それからモリスンに疑問の目を向けた。
「僕の家を訪ねて来たというのは……父に用事でも？」
「まあな。さっそくですまないんだが、君に聞きたい。私は黒い鎧の男を追っている。トーティスを襲ったのもそいつらだ。間違いないね」

「なんですって!?　そいつの名はマルスでは」
その通り、とモリスンは深く頷いた。
「チェスターに聞いたのだが、君はミゲールから貰ったペンダントを持って村を出たそうだね」
「ええ。ですが、あの男に奪われてしまって……」
「やはり、か。あいつの隠れ家の外で君を発見したときから予想はしていたんだが」
モリスンは眉を寄せるとため息をついた。
「あのう、いったいあのペンダントは、なんなんですか。確かに綺麗な石だけど、そんなに価値のあるものには見えなかったけどな」
さっぱりわけがわからなかった。クレスがそっとチェスターを見ると、彼もまた首を傾げた。
「……なんてことだ。すべてが後手にまわってしまう。急がねば」
大股に部屋を出て行こうとするモリスンを、ミントがあわてて呼び止める。
「どこへいらっしゃるんですか」
「地下墓地だ。ペンダントがふたつ揃ってしまった以上、一刻も早くあいつを阻止せねば」

「待ってください。その地下墓地にマルスがいるんですね？　だったら僕も一緒に行きます」

モリスンはじろりとクレスを睨みつけ、

「断る。足手まといになるだけだからな。三人ともおとなしくここで待ってな」

と、出て行った。すると、チェスターがクレスにつめ寄る。

「おい、いいのか。マルスってやつがオレたちの仇なんだろ？　約束したじゃないか、一緒に仇をとるって」

「ペンダントがふたつって、なんのことだよ」

「さあ、僕は知らない。あれと同じものがもうひとつあるなんて、聞いたこともないよ」

クレスは首を振った。

「マルス……私とお母さんをあんな目に遭わせた男……」

ミントがくちびるを噛む。それを見たチェスターが、パンパンと手を叩いた。

「ほい、決まり決まりっ。三人でモリスンさんを追いかけようぜ」

部屋を出たクレスは、初めて自分が二階に寝かされていたことを知った。階下へ降りたとき、玄関に人影が見えた。老人のようだ。

「おーい、トリニクスぅ」

「あれ、お客さんかな。すみません、モリスンさんはいま……ああっ、ト、トリスタン師匠!?」
クレスは驚いてトリスタンに駆け寄った。トリスタンとはあの日森に向かう途中で出会ったが、てっきり死んだものと思っていたのだった。
「よくぞご無事で。師匠、父のところに行ったんじゃあ」
トリスタンは皺だらけの顔に、いっそう深い皺を寄せた。
「ああ。だが、あの日は用があってすぐに帰ったんじゃ。あんなことになるとはもちろん知らんかったがのぉ。それにしてもおんしらだけでも無事で、わしもうれしい」
トリスタンはクレスとチェスターに笑いかけ、それからミントに気づくと、ぺしっと自分の禿げあがった額を叩いた。
「こりゃまたおまえさん、メリルの娘じゃな。よく似ておるわ、美人じゃのー」
「母を知ってらっしゃるんですか」
ミントが驚くと、老人は得意そうに胸をはった。
「ほっほっほ。わしはのぉ、メリルもミゲールもマリアも、みーんなよっく知っとるよ。トリニクスを入れて、四人はそりゃあ深い縁で結ばれとるんじゃ。して、メリルは達者にしておるかな?」

「え、ええ……まあ」
ミントはちらりとクレスを見、言葉を濁した。
(僕の両親とミントのお母さんが知り合いだったっていうのか?)
クレスは不思議な思いに囚われながら、トリスタンにモリスンがひとりで行ってしまったことを説明した。すると老人はおかしそうに笑い、
「あいつめ、ちょっと法術が使えると思ってテングになっとるな。クレスだとて、すでに天下のアルベイン流の第三教練を終えたというに」と言う。
第四まで終わってます、とクレスは訂正した。
「そうじゃったかな? まあいい、まあいい。三人とも行っておいで。わしはここで茶ぁでも飲んどるし」
トリスタン師匠はあくまでも明るく若者たちの背中を押す。
(ひょっとしたらトーティスで殺されていたかもしれないっていうのに……この人が深刻そうにしているところは見たことがないな)
と、クレスは密かにあきれた。
地下墓地は数百年も前に都の南東にある洞窟の奥につくられた、かなりの規模のもの

だという。ミントとチェルシーとともにトリスタンに教えられた近道——歩きづらい山道だった——を進むうち、クレスはふとベルトの内側に隠しておいたイヤリングを手で探ってみた。
(な、ない!?)
どこかに落としてしまったのだろうか。焦っていると、
「どうかしたんですか」
と、ミントが訊ねた。
「いっ、いや、なんでもないよ」
クレスはあわてて作り笑いを浮かべる。
「なんだ、腹が痒いのかよ」
チェスターが横目で笑った。
「おまえ、昔から虫に刺されやすかったよな。そんでもってぷくっと赤く腫れる」
「うるさい、違うったら」
(ごめんよ、ミント。あれ、お母さんの形見ってやつになるものだったんだよな……)
クレスは金髪をなびかせて歩いているミントに、心の中で謝った。
「おい、あそこじゃないか」

チェスターが繁みの間にぽっかりと開いている洞窟の入り口らしきものを見つけて、指さした。
「ああ、間違いないよ。モリスンさんはこの中だ。僕たちも行こう」
クレスは先頭に立って、洞窟に飛び込んだ。しばらくはうねうねとした岩の道が続いていたが、気のせいかだんだん気温が上昇してくるようだった。
「なんか、暑くないか」
「ああ。誰がこんなとこに墓地なんかつくりやがったんだろう」
チェスターが汗を拭う。と、それまで黙っていたミントが顔をあげてつぶやいた。
「明るい……なにか燃えているわ」
「うわっ、なんだあれは⁉」
洞窟のゆっくりしたカーブを曲がりきったところで、クレスは思わず叫んだ。すぐ目の前に真っ赤な海が見えたのだ。それは暗い洞窟中で、まるで生きているようだった。
「くっ。溶岩……か⁉」
チェスターがうめく。どうやら墓地は海の向こうらしかった。何百年もの間に、地形が変わってしまったのかもしれない。
「チェスター、見ろよ。道が残ってる。ここを渡るしかないな」

海にかかる一本橋のような通路を、クレスは睨みつけた。なにしろ人がひとり通るのがやっとという幅だ。落ちたら溶けるな、と彼は身震いした。
「どうする?」
「どうするって、ここまで来たら行くっきゃないだろうよ」
チェスターは怒ったような口調で言うと、用心深く通路を渡り出した。ミント、クレスの順で続く。
三人があと少しで向こう岸へたどり着くというときだった。突然、上方から数匹のモンスターが襲いかかってきた。クレスとミントが地下水路で遭遇したのとよく似ている。
ケ――ッ!　ギャギャギャッ!!
「早く渡りきるんだっ」
クレスが叫んだがチェスターは弓をかまえ、次つぎ矢を放つ。
ビシュ!
矢はどれも一発命中、モンスターは溶岩の海に墜落した。
「へへっ。さあ、先を急ごうぜ」
向こう岸に着いたチェスターは、あたり一面に転がっている破壊された墓石の群れをすばやく見回し、クレスたちを促した。

「あ、あそこに扉が……中から光が漏れていますっ」
ミントが墓地のいちばん奥を杖で示した。

「お前の悪だくみもこれまでだな。マルス・ウルドール！」
モリスンは、ようやく追いつめたマルスとその数人の部下たちに対峙していた。
「私から盗んだペンダントを返してもらおう。あの少年、クレスから取り上げた分もだ」
「ふん。今ごろのこのこやって来ても、もう遅いわ」
黒い鎧の男は、くくくっと低い笑いを漏らした。
「見ろ、石はふたつ揃った。いにしえの王は間もなく復活する」
「くそう」
扉の隙間から中の様子を窺ったクレスたちは、まずマルスとモリスンの姿を認めた。
部屋の中央には魔法陣が描かれ、四方に一体ずつの石像がある。像に囲まれるように古めかしい棺が安置されており、その蓋の上にふたつのペンダントが並べられていた。
(同じペンダント……もうひとつはモリスンさんのだったのか……)
「誰だっ!?」
マルスの部下が叫んだ。振り向いたモリスンの顔がひきつる。

「なっ、なんで来たんだ、お前たち。あれほど待ってろと言ったのに」
「ははは、アホウが揃って来たか。我が隠れ家よりあのまま逃げおおせれば見逃してやったものを」
マルスがクレスたちを見て笑ったとき、四体の石像が弾け飛び、棺が赤い光に染まった。
「さあ、封印はとけた。いにしえの王の復活だ！」
「いにしえの王……封印？　なにを言ってるんだ」
クレスが肩をすくめる。するとマルスはあきれたように言った。
「馬鹿め。お前らはヴァルハラ戦役を知らんのか」
「ヴァルハラ戦役？　ああ、名前だけは知ってるよ。百年も前にあった戦争だろ」
チェスターが、それがどうしたという顔で答えるとマルスは頷き、
「当時、圧倒的勢力を誇っていた王がいた——その名はダオス。だがダオスはある人間たちによって倒され、眠りについた」と言った。
モリスンはゆっくりとクレスたちに視線を巡らせた。
「そうだ。何をかくそう、私の祖先はダオスを倒したひとりだった。そしてクレス君、お嬢さんも……」

「へっ、僕？」
クレスは突然自分が話に出てきたので驚いてしまう。
「ああ。君らはその昔、ダオスと勇敢に戦った者たちの子孫なのだ」
ミントとクレスは無言で顔を見合わせた。
「ピンとこないのも無理はないが、それが証拠にクレス君はダオスの力を二分したペンダントの片われを受け継いだ。お嬢さんはメリルとともに日々ダオス封印の祈禱をささげてきたのではないかな」
「えっ。お母さんに習った祈りには、そんな意味があったんですか。私、よく知らなくて……」
ミントは頭を抱えてしまった。と、そばで焦れていたチェスターが怒鳴った。
「あーもう、訳のわからない話はやめてくれよ。オレとクレスにとっちゃ、そんなことはどうでもいい。マルス、お前はオレの妹や村の人たちの仇なんだよっ！」
ゴゴゴゴ……。
そのとき、棺が揺れ出した。蓋の上に置かれていたふたつのペンダントが宙に浮きあがる。
「うわっ、まぶしい」

クレスたちはペンダントの石が発するとてつもない光に、たまらず目を覆った。光は棺を包み、細かい振動を繰り返して主の眠りを破ろうとしているようだった。やがて激しい爆発音があたりに響き渡った。
「しまった」
モリスンが悲痛な声をあげる。魔法陣の中央に、波打つ金の髪を持った見知らぬ男が立っていた。
「おお、ダオスよ！」
マルスが歓喜の声をあげ、男に走り寄ろうとした。が、その足は一歩も動かなかった。まるで全身が固まってしまったようだ。
「寄るな、汚らわしい。私を封印した者の命を奪い、封印をとく石を奪わせたのはこの私自身だ。もはやお前は用済みなのだ」
ダオスは強い憎しみを宿した目でマルスとその部下たちを睨めつけると、すっと手をあげた。
バチッと音がしたと思うと、マルスたちは床に倒れた。すでに事切れている。
(なんて恐ろしい奴なんだ)
クレスが身動きもできないでいると、かたわらで、

「ちっ。こいつ、オレたちの仇を殺っちまったぜ」
と、チェスターが吐き捨てた。それが耳に届いたのだろうか。ダオスはぎろりと四人を見渡し、野太い声をびりびり響かせた。
「私が背負った重大な運命を知りもせず、私を封印した憎っくき人間どもの生き残りめ……とても許せるものではないぞ！　みんなまとめて殺してやる。永遠の闇をさまようがいい」
ミントがコクっと喉を鳴らした。
「ど、どうしましょう、モリスンさん」
クレスは反射的に剣を抜いたが、モリスンは首を振る。そして低く言った。
「奴は剣では倒せない。三人ともよく聞くんだ。今から君たちを法術で、ある場所へ送る。そこでこやつ、ダオスを倒す方法を学んできてほしい」
「どういうことです？」
クレスが訊ねたが、モリスンは答えなかった。
「説明している時間も、これよりほかの方法もない。クレス君、この本を持って行ってくれ」
「は、はい」

モリスンが、一冊の本をクレスに渡したとき、ダオスの手が動いた。
「ふふふ、死ねっ！」
モリスンのくちびるから呪文の呟きが漏れる。と、チェスターのブーツが地を蹴った。
「ダメだモリスンさん、間に合わないっ！」
「あっ、チェス」
クレスとミントが叫んだが、聞こえたのは前半分だけだった。残りはほんの一瞬、そこにスパークした青い光に飲み込まれたように見えた。
バチッ！
チェスターの体がダオスの足元に叩きつけられる。一方で、クレスとミントの姿はその場からかき消すようになくなっていた。
「おいっ、しっかりしろっ」
モリスンがチェスターを抱き起こそうとしたとき、ダオスの怒りは頂点に達したようだった。
「やつらをどこへやった」
「答えるものか」
モリスンはぐっと歯を食いしばった。

「ふふ……知っているぞ。あの光は時空転移の光。どうした、自分自身は送りそこねたか、未熟者め。ここで朽ち果てるがいい！」

チェスターを抱いたモリスンの目が、大きく見開かれる。

ドォ――――――ン！

地下墓地全体を揺るがすほどの衝撃波が、ダオスの体全体からあふれ出た。あとには何も残らなかった。

第二章

風が鳴っていた。気が遠くなりそうな遙かかなたから――それは　ビュッという音とともに耳元に吹きつけた。
「あ……？　ここは……」
ふっと我に返ったクレスは、あたりを見回して驚いた。草原だった。見渡す限りの草原に風が吹きぬけてゆく。目を上げれば、地平線に巨大な陽が沈もうとしていた。
「すごい夕焼け、ですね」
「ミントっ！」
クレスは、かたわらに足を投げ出して、呆然と座っているミントに気づき、複雑な表情で笑ってみせた。
「私たち、ふたりだけです……チェスターさんとモリスンさんはどうしたんでしょう」
「さあ……ぼくたちだけどこか別の場所に来てしまったようだな。ここはどこなんだろ

う」

クレスはまだはっきりしない頭を振り振り、ため息をつく。と、自分が一冊の本をしっかり持っているのに気づいた。

「クレスさん、それ」

「うん」

ダオスと対峙したとき、モリスンがクレスに託したものだっだ。見たところ、タイトルらしきものは記されていない。手製の本なのだろう、とクレスは思った。おそるおそるページを繰ってみる。

「歴史の本、かなあ。僕、本って苦手なんだよなー。待てよ、いま〝ダオス〟っていう言葉が出てきたぞ」

「私が少し読みましょうか」

ミントはクレスから本を受け取ると、真剣な表情で読み始めた。夕陽がミントの横顔と本のページをオレンジ色に染めている。

やがて、彼女は本をパタンと閉じ、ほうっと深い息をついた。

「どうだった?」

「とりあえず、今の私たちに関係あることだけかいつまんで言いますね」

ミントは知的な瞳でクレスをじっと見つめて言った。
「まだほんの少ししか読んでいませんが……この本には、いにしえの時代のダオスのことが記してありました。遠い昔、ある若者たちがダオスと戦ったそうです。その決戦の最後の瞬間、ダオスは時空転移して別の時代へ逃れた、と」
「時空転移？」
「ええ。そして、やはり書いてありました、モリスンさんが言っていたこと……逃れた先の時代で、ダオスはクレスさんのご両親、私の母、それからモリスンさんの四人によって封印されているんです」
「うーん。別の時代へ逃れる、か。よくわからないな」
クレスは思わず眉を寄せた。
「しかし、その封印はマルスによって解かれてしまったんだよな。チェスターたちはどうなったんだろう」
ミントが立ち上がった。
「とにかく、人のいるところをさがしましょう」
「ああ。早く戻らなくちゃならないもんな」
服についた草を払い、歩き出したクレスのブーツの先が、カツンと音をたてた。

「ん？　なんだこれ」
かがみこんだクレスの顔がこわばった。
「こ、これはチェスターの！」
そこに落ちていたのは、チェスターの弓だった。ちょうど真ん中あたりからポキリと折れてしまっている。
「まさか、チェスターはもう……」
「クレスさん！　きっとだいじょうぶです。悪い想像は災いを招くわ」
「ああ」
(きっと、本当は僕たちと一緒にチェスターもここへ送られるはずだったんだ。でも……)
急速に忍び寄る闇の中で、クレスはへたへたとまた草の上にうずくまってしまった。
クレスがなんとか気力を取り戻したのは、明け方になってからのことだった。
「ごめんよ、ミント。野宿なんてさせてしまって」
「いいえ、いいんです」
クレスは手にした弓を見てちょっと考えていたが、すぐに背の高い草の中にそれを隠

した。ここなら誰かに見つかる心配もないだろう。
「さあ、行こう」
しばらく歩くと、小さな集落があった。入って行くと、村人たちはみな珍しそうにクレスたちを眺めた。クレスは村人たちに微かな違和感をおぼえたが、なんなのかわからなかった。やがて、誰かが知らせたのだろう、白髭の老人がやって来てふたりを呼びとめた。
「やあ、お若いの。客人とは珍しいのぉ。どこから来なすった」
「ええと、僕はトーティスから来ました。クレスといいます。こちらはミント」
クレスは緊張の面持ちで言った。
こんにちは、とミントがにっこりする。
「はああ？　とおてす？　知らんの」
老人が首を傾げる。耳が遠いのかな、とクレスはボリュームを上げた。同時に、老人の耳が尖っていることに気づいた。
「とある人の法術の力で、気がついたら近くの草原にいたんですっ！」
「ほーじつ？　なんだね、そりゃ。魔術なら知っとるが」
「ま、じゅ、つ？」

「うむ」
クレスとミントは顔を見合わせた。魔術など、聞いたことがない。
老人はふたりの様子が気になったのか、自分の家に来ないかと誘ってくれた。
「あらためて自己紹介しよう。わしはこのベルアダムの村長、レニオスじゃ。おまえさんら、なんか訳ありのようじゃの。だいたい魔術を知らんとは、おかしいにもほどがあるわいっ」
すみません、と思わずクレスは頭を下げた。村長の家の居間はじゅうぶんな広さがあり、暖炉もよく燃えて居心地がよかった。
レニオスの妻が暖かい食事を運んできてくれた。空腹だったふたりは礼を言うとすぐにスプーンをとったが、ミントがおずおずと訊ねた。
「あのう、村長。本当に法術をご存知ないんでしょうか。癒しの力、なのですが」
「知らんの。癒しってなんじゃい。卑しいわけじゃなかろ？」
ミントは小さく咳払いすると、「ファーストエイドっ！」と叫んだ。とたんにレニオスの痩せた体が突っ張った。
「うおっ。お、おおおおぇっ！　あらあらあらっ？」
「あ、あなたっ⁉」

夫のおかしな叫び声に、台所から妻が駆け戻ってきた。
「はぁぁ……き、気持ちええのぉ、ほーじつは」
クレスはぷっと吹きだしてしまい、老妻にぎろりと睨まれた。ミントも赤くなって下を向く。
「気持ちいいが、でもやっぱ知らん。ほいではお嬢さん、魔術とはこんな力じゃ――出でよ、炎っ！」
レニオスが空気をぐっと抱き集めるようなしぐさをした。と、次の瞬間、両手の間からゴオッと炎が噴き出た。
「あちっ、あちちちちっ！」
自分の髭に引火したのだった。レニオスはぱんぱんと髭を叩いて火を消した。
「すごい」
ミントは自分でも気づかないうちに席を立っていた。
「もしかしてこれがダオスを倒すための力なのかしら」
「なにぃ!?　ダオスだと」
レニオスも焦げ臭いにおいを撒き散らしながら立ち上がった。
「知ってるんですか、村長」

「当たり前じゃ。奴は世界の敵じゃないかの！　奴が現れてからめちゃくちゃじゃよ。ふん、今もちゃくちゃくちゃくと勢力を広げていることだろうて」
「村長……でも、あのう、ダオスは封印から目覚めたばかりですよ。まだそんなには」
クレスが遠慮がちに言うと、老人は腕を振り回して怒った。
「なにを言っとるか！　ダオスの奴はずっと前からおるわ。ずーっとずーっとずーっと前からじゃ！」
「……」
そんなに時間がたっているのか、とクレスは目の前のスープにじっと視線を注いだ。
すとんとミントが腰を下ろす。
「ミント、どう思う？　ひょっとしてここ、未来の世界だったりして」
「あ、でももしかしたら、ダオスが封印される前の世界かも……」
なにを言っとる、とレニオスはあきれた。
「今はアセリア暦四二〇二年じゃろが」
「四二〇二……⁉」
クレスは飛び上がった。
「うそだろっ。だって今年は四三〇四年……ということは」

「一〇二年前、ということですね」
「……ほんとかの!?」
　しばらくの間、居間に沈黙が流れた。クレスもミントも、この老人がわざわざ嘘をついているとは考えにくかった。
　法術を知らないのはそういうわけだったのね、とミントは納得した。百年前には法術はまだ認知されていなかったということだろう。とにかく先へ進まなくてはならない。
「村長さん、ダオスと魔術について話していただけませんか」
「いいとも、娘さん。ダオスはだな、魔術でしか傷つかんと言われとる。魔術は絶対必要じゃが……残念なことに純血の人間には使うことができん。エルフの血を引く者だけにしか使えんのじゃ」
「エルフ、ですか」
　首を傾げたミントのために、レニオスはさらに詳しく説明して聞かせた。
「この世にはエルフという種族、人間との混血のハーフエルフ、純血の人間の三種類がおる。人間だけが魔術を使えん」
「そんなあ」
　クレスはがっくりと肩を落とした。

（せっかく百年前の過去に送られたっていうのに、なんにもできないっていうのか？）
「まあまあ、お若いの。そう気を落とすな。誰か強力な魔術の使い手に助けを求めればいいではないか。たとえばこのわし」
「あ、そうか。村長さんもエルフの血を……」
（だからきっと耳が尖ってるんだな。そういえばこの村の人たちを見たとき、なんかヘンだと思ったんだっけ）
クレスが老人の耳から髭の焦げに視線を移すと、レニオスはわざとらしい咳払いをした。
「お願いします！　ぼくたち、どうしてもダオスを倒さなくちゃいけないんです。力を貸してください！」
モリスンさんやチェスターのためにも、とクレスは考えながら頭を下げた。
「いやいや、本当いうと最近、わしの魔法の力はめっきり落ちてしまってのぉ。といっても、年のせいではないぞ。まだほんの三百歳とちょっとだからな」
「三百歳!?」
クレスは仰天した。
「知らんのか、エルフの血を引く者は皆長生きするんじゃゃ。とにかく魔法の力の低下に

ついては、この村のみんなもそう言っとる。原因がどうにもわからんのじゃが……」
「そう、なんですか」
ミントが不安げにつぶやく。
「ははは、心配せんでよろしい。あとでちゃんとした最適な男を紹介しよう。しかしまあ、そんな遠い旅をしてきたのではさぞ疲れたろ。今夜はうちへ泊まるといい。夕食にはもっとうまいもんを用意させよう」
「あ、ありがとうございますっ」
「仲がいいのぉ。よくハモっとる」
レニオスは頭を下げるふたりに、慈愛のこもった笑みを漏らした。

その夜。村長の家の真っ暗な一室で、クレスはぶつぶつ言っていた。部屋を用意してくれたのはいいのだが、ミントと同室のうえ、なんとベッドはひとつきり。当然そちらはミントに譲り、彼は床の上で寝るはめになっていた。
「くそう。気をきかせすぎなんだよ、あのじーさん。仲がいいって、そういう意味じゃないっての」
天井を見上げながら耳を澄ますと、規則正しいミントの寝息が聞こえた。

（百年前の世界か……。僕たちがこの時代のダオスを倒したら歴史が変わって、モリスンさんやチェスターは死なずにすむんだろうか。そしたら、僕たちはもとの世界に帰れるのかなあ……）

「……」

いつしかクレスが眠りに落ちてゆくと、ミントが起き上がる。自分のシーツを抱えて、床に転がっているクレスに近づいた。そっとシーツをかけてやる。

「一緒に頑張りましょうね、クレスさん、……この世界で、私にはあなたしかいないんですから」

「ユークリッド村……このあたりかな」

クレスとミントは、けさ出がけにベルアダムの村長が渡してくれた地図を見ながら、頷きあった。ユークリッド村はベルアダムの真北に位置していた。

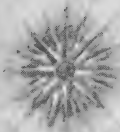
クラース・F・レスター。それがレニオスが紹介してくれた〝最適な男〟の名前だった。アルヴァニスタ王立学院で魔科学を専攻し、主席で卒業したのち、魔法修練所を開いているという話だ。

「あったあった、この家だよ、ミント。ごめんくださーい」

クレスは一軒のかなり大きな家の敷地にずんずんと入り、玄関先で声を張り上げた。
しばらくするとドアが細く開き、銀色の髪を長く伸ばした若い男が顔を覗かせた。
「誰だ。魔法の受講者なら向こうへ回ってくれ」
「は……！」
クレスは驚いた。そのぶっきらぼうな応対はもちろんだが、男の顔中に奇怪な紋様――刺青かもしれない――が描かれていたからだ。紋様が目立つせいでひどく薄く見える瞳の灰色が、男の表情をいっそうわかりにくいものにしている。
「あのう、クラースさんですよね」
「ひとり十万ガルド。一括前金でな」
「い、いいえ、違うんです。私たちは……失礼します」
ミントはドアを肩でこじあけるようにして、無理やり家の中へ入ってしまった。あわててクレスも続く。
「こらっ、なんだ、勝手にひとの家に……。頭がおかしいのか？」
クラースは怒ったが、頭がおかしいのはどっちだろうね、と彼の全身を見たクレスは密かに思う。
家の中だというのにつば広の三角帽をかぶり、前後が帯状に垂れる不思議な形の外套

アセリア歴四二〇二年

ダオス城
白樺の森
ヴァルハラ平原
ミッドガルズ
12星座の塔
モーリア坑道
熱砂の洞窟
オリーブヴィレッジ

浸食洞
ベネツィア
西の孤島
ハーメル
ローンヴァレイ
ユークリッド
アルヴァニスタ
精霊の洞窟
エドワード邸
ベルアダム
精霊の森
水鏡ユミルの森

を着ている。極めつけは首、腰、手首、足首などにこれでもかというくらいつけられている鳴子（なるこ）だった。動くたびにシャラシャラ音がする。
これで森に入ったら鳥が逃げるぞ、とクレスがあきれたとき、ミントがぺこりと頭を下げた。
「失礼はお許しください。手短かにお話しします。私たち、ダオスを倒すのに魔術が必要なんです。どうか助けてください」
「な……!? ダオスだって。ふざけてるのか」
違います、とクレスが反論しかけたとき、奥からひとりの女性が出てきた。豊かな髪を無造作に結った、いかにも聡明そうな美人だ。
「どうしたの？ いったいなんの騒ぎ？」
「ああ、ミラルド」
ミラルドと呼ばれた女性は、笑いを含んだ瞳でクレスたちを見、
「ごめんなさいね。この人、いかにも思いやりのない話し方をしたでしょう。初対面の人にはものすごく冷たいの。精神的に子供なのよ」
と、ソファをすすめてくれた。クラースはミラルドをじろりと睨んだが、ぷいとそっぽを向いてしまった。

「なに、未来から来た⁉」
テーブルをはさんでクレスたちの話を聞いていたクラースは、あやうくお茶のカップを取り落としそうになった。四人がいる居間の壁という壁にはすべて棚がしつらえてあり、書物に覆い尽くされている。
「とても信じられないね」
「すぐに信じてもらえなくても仕方ないです。僕たちだって驚いてるんですから。とにかくクラースさんは魔法が使えるんでしょう?」
クレスはミラルドにおかわりを注いでもらいながら、身を乗り出した。が、クラースの返事はそっけないものだった。
「いや、俺は人間なんだ。だから魔法は使えない。ほら、ベルアダム村の人たちと違って尖ってないだろ」
と、三角帽を浮かせ、耳を引っぱってみせた。
「ほんとだ……」
「まあまあ、そうがっかりするなよ」
クラースは初めてクレスたちの前で笑顔を見せた。

「俺は、いつか自分でも魔術を使えるようになってやろうと思ってる。その第一歩として、召喚術を研究しているんだ」

「召喚術」

ミントが首を傾げる。

「精霊と契約をして魔法のような力を使う技術さ。ただ、召喚はとても危険なうえ、契約のときには目の玉が飛び出るほど高価で貴重な指輪が必要なんだ。それで、魔法を教えて金を貯めてる」

「ああ。ひとり十万ガルド、ですね」

クレスが言うと、クラースは肩をすくめ、

「法外な値段とは思うがね。おかげで少し貯えもできた。そろそろ精霊と会ってみたいと思っているところなんだ」

と、言った。

「だからタイミングはばっちりだったたっていうわけ。今からさっそく三人で行ってらっしゃいな」

ミラルドがクレスたちの味方をするように促した。

「別に俺は、力を貸すとは言ってないぞ」

「あらそう。じゃあ私が行くわ。めちゃくちゃな召喚をやって、クラースに教わったって言っちゃおうかなー」
ミラルドが歌うような口調でからかうと、クラースはやがて「……わかったよ」と、ため息をついた。
「クレス君にミントさん、だっけ？　それじゃさっそくつきあってくれ。ローンヴァレイに行く」
「ありがとうございます」
ミントが胸の前で手を組んで礼を言う。ミラルドはクレスにウィンクしてみせ、なにか思いついた様子で台所に入っていった。
手際よくカップを片づけながら、ミントが訊ねる。
「綺麗なかたですね。奥様ですか」
「バカ言え。ただの幼なじみさ」
クレスも口を開いた。
「でも、おふたりはここで一緒に住んでるんでしょう？」
「なんの因果か、な。あいつ、ここで子供たちに読み書きを教えたりしてるんだ」
クラースが、これ以上質問はなしだ、というようにふたりを手で制したとき、ミラル

ドが戻ってきた。
「ミントさん。これ、私がけさ焼いたチェリーパイなんだけど、途中で食べてちょうだい。母の直伝でね、この人の大好物なのよ」
ミントが受け取った紙包みからは、ほのかに甘い香りが漂っている。クラースは仏頂面だ。
「よけいなことを言うなよ、ミラルド」
「あら、照れることはないでしょう。あなたは他の人の焼いたパイは甘すぎるからって、食べないじゃないの」
「健康のために、うす味にしてるんだ」
クラースは鳴子をシャラシャラ鳴らしながら、玄関のドアを開け放つ。ミントとクレスは顔を見合わせ、くすりと笑った。

「ローンヴァレイのシルフの谷には、風の精霊シルフが棲んでいるんだ」
村を出たクラースは、北東の道をとりながら、クレスたちに説明した。
「四大元素は知ってるな、風、火、水、土。それぞれの精霊がいる。さらにそれを統括するマクスウェルという精霊もいるはずなんだが……」

「全部召喚できたらすごいですね」
「うーん、それはまさに俺の夢だねえ」
クラースがまんざらでもなさそうに言う。クレスは、
「僕、ずっと気になってることがあるんですけど。クラースさんのそのかっこう、やっぱり召喚と関係が？」
と、訊ねてみた。
「これか。もちろんだ」
クラースはクレスにとっては不可解な紋様がペイントされた腕をちょっと持ち上げてみせた。
「魔力を高めるためさ。ま、鳴子も同じようなものだな」
「そうですか」
クレスは半信半疑の気分で頷いた。
（精霊を召喚できたとして、どれほどの力を得られるんだろう。魔力じゃないのにほんとにダオスを倒せるのか？）
ちらりとミントの様子に目を走らせると、彼女はただ黙々と歩いている。母親のことを考えているのかもしれない。いつかは真実を打ち明けなければならないのだと考える

と、クレスの胸は痛んだ。
ローンヴァレイは、ユークリッドとベネツィアの両大陸の間に位置する、大きな島だということだった。橋がかかっているので一応は地続きということになるらしい。
半日ほど歩いたあとの休憩のときに、クラースは甘さひかえめのチェリーパイをほおばりながら苦笑した。
「正直言うと、召喚術を試すのは初めてでね。ちょっと躊躇（ちゅうちょ）してたんだ。俺だって失敗は怖いからなあ。そしたらきみたちが背中を押してくれたってわけさ」
橋を渡ったのはそれから二日後のことだった。ひどい風が吹いていた。クレスたちはさっそくバートの家を探し当てたが、ドアには鍵がかけられていた。
「留守⁉」
「それはないよなぁ、せっかくここまで来たのに。バートさーん、いませんかーっ」
ミントとクレスがあきらめきれずに木製のドアを叩き続けていると、クラースが言った。
「ふたりとも、ここでバートを待っていては時間の無駄だ。出発しよう」
「どこへ？　ほかにも精霊のいる場所があるとか」
「違うよ、ミント。ハーメルの町まで行って買い物さ」

なにを、と訊ねようとしたクレスの口の中に砂が舞い込んだ。ぺっぺっ、と吐き出しているとクラースが笑う。
「まったくすごい風だな。ハーメルに着いたらうがい薬を買ってやろうか」
「優しいんですね、クラースさん」
思わずクレスが感激すると、クラースの表情はスッと険しくなる。
「誤解するなよ。風邪でもひかれて召喚に失敗したら困ると思っただけだ。ほら、ちゃんとついて来いよ」
クラースはクレスたちに背を向けると、さっさと歩き出した。
「はいはい」
思わず苦笑してしまったクレスの耳元で、風がビューッとすごい音をたてて通り過ぎた。

ハーメルはさらに先の橋をベネツィア方面に渡った、最初の町だった。
「きれいな町ですね」
でもやけに人が少ないな、とクレスがつぶやくと、クラースは頷いた。
「この町の人々は信心深くてね。みんな暇さえあれば教会に行ってるらしい。そのせい

だろうな」
　クラースは、買い物をしてくるから適当にこの辺をぶらついているようにと言って、ひとりで道具屋に入っていってしまった。残されたふたりは、仕方なく、たった今話に出た教会のほうへ行ってみることにした。
「いったいなにを買いに行ったんだろうな、クラースさんは」
　クレスが首を傾げる。教会のとんがり屋根は、すぐに見つかった。
「さあ……魔術に関係あるものじゃないかしら」
「魔術用品？　そんなの売ってるのか」
　クレスは驚いた。
「じゃあ、きっとこの辺に本物の魔術師がいるんだよ。なんだ、それならそっちに頼んだほうが話が早かったかも……」
「クレスさんたら」
　ふたりが喋っていると、足早に戻って来るクラースの姿が目に入った。
「待たせたな。ほい、うがい薬」
　クラースは一リットルはありそうな茶色い液体の入ったビンをクレスに投げてよこした。

「あ、ありがとう……」
ミントはクラースの買ってきた他のものをしげしげと見つめ、訊ねた。
「クラースさん、それは？　バートさんへのおみやげ、ってことはないですよね」
「ほう。百年後の未来じゃ、つるはしとロープをみやげにするのか」
肩に担いだロープと腰に下げているつるはしのせいで、いっそうキテレツな容姿になっているクラースは、そう言って片頬を歪めた。

ローンヴァレイの風は相変わらずだったが、幸いなことにバートが家に戻っていた。
クラースは玄関に出てきたバートに自己紹介をすると、
「風の精霊との契約に挑戦したいんだが」
と、単刀直入に切り出した。バートは三人を家に招き入れてくれた。中に入ると風の音がいくぶん遠ざかったので、クレスとミントはほっとした。バートは――四十代半ばくらいだろうか――誠実そうな顔を曇らせ、クラースに告げた。
「召喚は少し待ったほうがいい。あんたがたは知らないだろうが、この間ちょっとした地震があってね。それ以来、なぜか風の精たちが暴れてるんだ。すごい風だろ」
クラースは「なるほどね」と言ったが、きっぱりと首を振った。

「ご忠告はありがたいが、俺たち少々急ぎでね。指輪はあんたが持ってると聞いてる。金はこれだけだ。譲ってほしい。足りなければあとで届けさせる」
バートはクラースをじっと見つめていたが、ほうっと息をついた。
「そのいでたちは本気らしいな。ああ、金はしまってくれ。ただでいい」
「なんだって」
クラースは信じられないといった様子でバートを見返した。
「ただし、谷に入るなら頼みがあるんだ。私の娘、アーチェというんだが……少し前から帰ってきていないのだ。さっきもこの近くを探してみたが見つからなかった。心配して精霊の様子を見に行ったかもしれないんだよ。探してもらえないだろうか」
アーチェは活発で、とにかく目立つ子なので会えば絶対にわかる、とバートは力説した。ポニーテールに結った髪を目印にしてほしいという。
「わかった。探してみよう」
バートは喜び、奥の部屋から小さな箱を持ってきた。箱の中には美しいオパールの指輪がきらめいていた。
「さあ、これをお持ちなさい。もし風が止めばあんたが成功したってすぐにわかるな。私はここで待っているよ」

クラースはオパールの指輪をおしいただくように受け取った。
家を出るとき、ふとミントがバートを振り返って訊ねた。
「失礼ですけど、こんな谷に娘さんとふたり……さみしくないですか？　この先のハーメルはとても美しい町でしたよ」
するとバートは、ふっと笑みを漏らした。
「人にはみな、分というものがあるんですよ、お嬢さん。心配してくれてありがとう」
どういう意味だろうとクレスは思ったが、そのままクラースについて風の中に身を躍らせた。

バートの話によれば、風の精霊シルフには、谷のいちばん奥の吊り橋の先で会えるだろうとのことだった。
「この洞窟を抜けていけばいいんだな」
クラースがクレスたちを促して暗い穴に入った。そのとたん、予期せぬつむじ風が三人を襲った。
「うわっ。なんでこんなところまで風が……!?」
クレスは、思わず目元を押さえた指の隙間から、なにか白いものが宙をくるくる飛び

まわるのを見てぎょっとなった。鳥かと思ったが、よく見ると小さな人間のようである。五、六体はいるだろうか。

「な、なんだおまえたち……」

「暴れているのは私たちの仲間です。魔界の空気に触れて、正気を失ってしまったのです……あぁぁぁーっ」

甲高い声を揃えてそう言うと、彼らはちょうど襲ってきたつむじ風に巻き上げられて行ってしまった。

「風の精だよ。そうか……瘴気(しょうき)におかされてしまったんだな。精霊の体ってやつは精妙にできてるからなあ」

クラースが眉をひそめる。

「瘴気って?」

クレスが訊ねると、ミントが口を開いた。

「たぶん……魔界の空気のことですよ。こちらの世界と魔界の間に歪みができて、こちらに漏れ出しているんじゃないかしら」

「さすがは未来のホージュツ師、詳しいじゃないか。地震があったと言っていたから、原因はそれだろうな」

クラースはミントに頷き返した。
「じゃあ、その穴……歪みだっけ、それをふさげばいいんだろ。さがそうよ」
クレスは張りきって歩き出したが、足元が急激な下り坂になっていたため、派手に転んでしまった。
「いて……っ！」
「おいおい、この谷は深いぞ。今ランプを出してやるから、そうあわてるなよ。それから一気にこいつで降りようぜ」
クラースは肩に担いでいたロープをどさりと降ろして笑った。クレスは、
「あ、じゃあ、はじめから知ってたんですか。ロープがあったほうがいいって」
と驚いた。
「当たり前だ。これでもいろいろ研究してるんだ。だからわざわざハーメルまで行ったんじゃないか」
(奇抜なかっこうはだてじゃないってわけか、なーんて口が裂けても言わないほうがよさそうだな)
クレスは、明かりの入ったランプをクラースから受け取りながら、咳払いする。その間に、ミントは手際よくまわりの岩を調べ、ロープを巻けそうなものを選び出していた。

「よし。とにかく下へ降りよう。瘴気が濃いから人間にも影響があるかもしれない。気をつけろよ」
ロープを伝って三人が下の岩場へ降りると、そこはもうもうたる黄土色の煙に包まれていた。きついにおいに胸が悪くなる。
「見て！　あそこの岩の割れ目から瘴気が出ているわ！　クレスさん、ちょっとランプをかして」
ミントが割れ目に近づこうとしたとき、
「危ないっ。何か来る！」
クラースが叫んだ。
「瘴気と一緒に魔界のモンスターたちがこっちに出てきたんだ。やめろ、クレス！」
「いいえ、僕がやりますっ」
とっくに剣を抜いていたクレスは、いちばん近くにいた黒い影に斬りかかっていた。
「えいっ、襲爪雷斬！」
洞窟内に雷鳴が轟（とどろ）いた。
手応えはあったが、ひどく軽い。それでもモンスターはしゅーっと不気味な音をたて

ながら消滅した。
（あと二体、か⁉）
「飛燕連脚！　えええいっ‼」
返す刃で残ったモンスターを突くと、クレスは叫んだ。
「クラースさん！　次が出てこないうちに早く塞いでくださいっ」
「お、おう」
（この小僧、強い！）
クラースは呆気に取られていたが、ハッとしてつるはしを振り上げる。足元の岩を砕くと、ミントと一緒に手当たり次第、割れ目にほうり込んだ。
「ふう……なんとかおさまったな」
割れ目が完全にふさがってしまうと、瘴気は嘘のように消えた。クラースは剣をおさめたクレスの腕をとり、さっきまでは見えなかった出口の明るみへと引っぱって行く。
洞窟を出ると、吊り橋に結ばれた峰々の連なりが見渡せた。
「クレス、やるじゃないか。ほんとに剣が使えるとはな」
「どういう意味ですかっ。ちゃんと説明したでしょ、アルベイン流だって」
クレスが怒ると、クラースはニッと笑う。

(ま、いいか。僕のこと、ちゃんと認めてくれたみたいだし)
クレスがミントを見ると、彼女もにこっと微笑んだ。

いちばん奥の吊り橋の先には、大木が一本そびえているだけだった。落葉樹なのか枯れてしまったのか、葉のない枝を風になぶらせている。が、三人が木の下に立ったとたん、不思議な光が降り注いだ。
〝ありがとう、瘴気を取り除いてくださって――〟
「あっ!」
ミントは思わず声をあげてしまい、あわてて手で口を塞いだ。三人の上方に、儚げな女性の姿が、ふわふわと浮かんでいたのだ。
クラースはぐいと一歩前へ出ると、よく通る声で言った。
「いにしえの指輪の命に従い、風を司るそなたとの契約を結びたい」
(これが風の精霊シルフか……)
クレスが固唾を飲んで見守っていると、シルフはスーっと降りてきた。精霊は想像していた以上に美しく、神秘的だった。
「よろしい、力になりましょう。でもひとつお願いが」

ほう、とクラースは目を見張る。
「精霊も人間に願い事などするのか」
「はい。それというのもこのままでは、私たちと契約しても近いうちにまったくのムダになってしまうからなのです」
「どういうことだ」
シルフは長い髪を風に遊ばせながら、
「魔力が、この世界から失われようとしています。そうなれば、精霊も魔術師も……すべて消滅してしまうでしょう」
と告げた。
「な、なんだって⁉　魔力がなくなる？　なぜだ」
クラースは動揺した。ミントとクレスも驚いて顔を見合わせる。魔力がなくてはダオスを倒すことができなくなってしまう。シルフは続けた。
「精霊の森の大樹、ユグドラシルに会ってください。樹に宿る精霊に話を聞けばあるいは……未然に防ぐことができるかもしれませんから」
「ああ、きっとそうしよう。ところで、この谷に少女が迷い込まなかったかな」
クラースの問いに、シルフは首を振った。

「いいえ。ここ数か月、ここへ来たのはあなたたちだけですが——。なにか」
「いや、それならいいんだ」
シルフはクラースをじっと見つめ、優しげに微笑んだ。
「では契約を結びましょう。これからは必要なときに、私を呼び出してください。オパールの指輪をこちらへ」
クラースはバートに貰ったオパールの指輪を、ゆっくりした動作でシルフの示す木の根元に置いた。
(クラースさん、さすがに緊張してるな……。初めて精霊と契約するんだから無理もないけど)
クレスは密かにそう思う。クラースがさっとひとさし指と中指を立て、印を結んだ。
「我、いま、風の精霊に願い奉る。指輪の盟約のもと、我に精霊を従わせたまえ！　我が名はクラース・F・レスター……」
その言葉が終わらないうちに、はるかな天空から一条の光が伸びてきて、クラースを捉えた。シルフは光の中に身を寄せると、そのままクラースの体に同化した。
「……！」
ほんの一瞬クラースの体は硬直したように見えたが、光を全部受け入れたとき、精霊

が見えなくなったことを除けば、すべてが元通りになっていた。
「……や、やった、な」
クラースがほっとしたように肩の力を抜く。
「おめでとうございます。召喚師の誕生ですね」
「すごいですよ。クラースさん。ミラルドさんにも見せたかったですね」
ミントとクレスのお祝いの言葉に、だが彼は緩んでいた表情を引き締めた。
「魔力が失われる……シルフはそう言ったよな。行かなくては、精霊の森とやらに」
「そうでした」
クレスもぶるっと身震いをした。

洞窟を戻ると、出口でバートが待っていた。
「成功したようだな。風が穏やかになったから、きっとそうだと思っていたよ」
晴れやかな口ぶりとは裏腹に、彼の目は物問いたげに三人に迫った。ひとり娘を気遣って気が気ではなかったのだろう。
「ああ。あんたの指輪のおかげだ。しかし娘が谷に入った形跡はなかった。精霊にも聞いてみたんだが……」

「そうか……いったいどこへ行ってしまったんだ、アーチェは」
バートはその場にうずくまると、頭を抱えてしまった。
「あの、バートさん。そんなに気を落とさないでください。アーチェさんはきっと元気で戻ってきますよ。私たちも行く先々で聞いてみますから。ね？」
ミントがバートの震える肩に優しく手を置くと、男は子供のようにこっくりと頷いた。
（こんなに若くてかわいいのに、ミントってお母さんみたいなところがあるよな）
クレスは不思議なものにでも出会ったように、ミントと大の男の様子を見つめていた。

「精霊の森、精霊の……あった、ここだよ」
バートに別れを告げた三人は、クレスがベルアダムの村長に貰った地図で、大樹ユグドラシルのある森の場所を確認した。
「ベルアダムの南か……クラースさん、ユークリッド村経由になるけど、なんだったらいったん家に」
帰らん帰らん、とクラースは即座に首を振った。
「一刻を争うんだぞ。即刻出発！」
クレスは、鳴子をシャラシャラいわせながらとっとと歩き出したクラースの背中を窺

い、囁いた。
「なんで精霊の召喚に成功したことを、ミラルドさんに報せてあげないんだろうな」
「私たちの前でそんなことしたらかっこ悪いと思ってるんですよ、きっと。なんでしたっけ、男の、コケン？」
ミントは肩をすくめた。

クラースは強行軍でユークリッド大陸を南下し続けた。山道ばかりを歩くのでクレスとミントは閉口したが、それが近道だと言われれば仕方ない。野宿のときにはクレスが鳥や魚を捕り、ミントが簡単な料理を作った。
ベルアダムの村の脇を通過し、ようやく精霊の森に入る。森の空気を吸ったとたんクレスは妙な気分になったが、それがなぜなのかはわからない。
「ユグドラシルは……と。これか？」
森の奥で、クラースが足を止めた。確かに大樹と呼ぶにふさわしい巨木がどっしりと生えていた。さやさやという葉擦(はず)れが無数の重なりとなって、三人の耳を心地よく刺激した。
「これは……！」

「どうした、クレス」
「いや、この光景……たしかどこかで見たような、なんか違うような」
混乱しているクレスの横で、ミントが向こうの木立ちを指さして小さな悲鳴をあげた。
「きゃ、猪が……あっちへ走って行ったわ。ああ、びっくりした」
(猪……そうか、そういうことか！)
クレスの胸がドキンと鳴ったとき、頭上で気配がした。
「ああ、あなたが精霊か。私たちは風の精霊シルフに聞いてやって来たのだ。魔力が失わせつつあるというのは本当か」
クラースが、そこに浮かんでいるシルフによく似た女性に声をかけた。心なしかシルフより透明度が高く、半分透けているように見える。
本当です、と弱々しい返事が返ってきた。
「私はこの大樹に宿る精霊、マーテルです。聞いてください……滅びのときが近づいています。大樹の死期が……」
「そうなのか……こんなに緑豊かなのに……だが、それと魔力とは関係ないだろう」
「いいえ……精霊たちと魔力の源であるマナは、目には見えませんが、この大樹から生まれているのです」

「なんだって!?　こんな樹一本で、世界中に満ち足りるほどのマナが？」
クラースは信じられないといった表情で、あらためてユグドラシルを見上げた。
「本当に、見れば見るほど元気そうな樹じゃないか。いったいなんの根拠があって枯れるなんて」
マーテルは悲しそうに目を伏せる。クレスが言った。
「クラースさん。この精霊が言ってることはたぶん……残念だけど、本当だよ。僕とミントが住む百年後の世界には魔法なんかなかった。ということは、今よりあとになくなったってことだよね」
クレスはミントが頷くのを待ち、続けた。
「それに、さっきわかったんだけど、この樹、知ってるんだ。僕はこの森で、チェスターという親友とよく猪狩りをした」
ミントがハッと息を呑む。
「そして僕は見たんだ。この樹の枯れ果てた姿を！」
クレスがマーテルを振り仰ぐと、精霊は再び話し始めた。
「マナは大樹ユグドラシルが永遠に生き続けるために必要なもの。魔術に消費されたくらいでは、本来失われるはずがないのです。何かが、何らかの強い力が、マナを大量消

費しているとしか思えないのですが……私にはどうすることもできません」
「なんとか樹を助ける方法はないのでしょうか」
ミントが訊ねたとき、精霊マーテルは大気に溶け込むようにスーっとその姿を消してしまった。
「あっ、待ってくれ！　まだ聞きたいことがあるんだ」
クラースが叫んだが、あたりには葉擦れの音が漂っているばかりだった。彼は足を踏み鳴らして怒りを表した。
「くそっ。魔術がなくなったら俺のこれまでの研究がすべてムダになってしまう」
「僕たちもダオスを倒すことができなくなる……」
「で、でも、歴史を変えることはきっとできますよねっ。なにかいい方法を考えて、ダオスが未来に時空転移する前にやっつければ」
ミントが必死に訴えると、クラースが「ふむ」と顎をなでた。
「それに、マナを大量消費する原因をとりのぞく手もあるな。目には目を。こちらも対等に勝負するためにはシルフだけでなく……やはりルナ、か」
「え？」
クレスが聞き返すと、

「ルナはもっとも強い力を持っているといわれている月の精霊だ。そいつを召喚して味方につけておいたほうがよさそうだ」
とクラースは説明した。
「しかし、指輪がない。ルナを召喚する指輪はアルヴァニスタ王国のモーリア坑道に眠っているといわれているが……」
クレスはガサガサと地図を広げた。クラースが的確に要所要所を指し示す。
「いいか、ここが現在位置。アルヴァニスタはこっち。ルートは北の……そこ、ベネツィアから船になる」
「って、うへー。北へ戻るのか」
クレスはまた野宿かとうんざりしたが、ベルアダムの村で食料を分けてもらうことを思いついた。肉が少し苦手だというミントは、それを聞いてうれしそうな顔をした。
「俺が行ってこよう。指輪代が浮いてるんでね」
クラースは、ふたりに待っているように言うと、ベルアダムへ出かけて行った。
数時間で戻ってきた彼は、なんと食料――ミントのための野菜や果物も豊富にあった――を背中にくくりつけた馬を引いていた。
「クラースさん、それ……」

クレスがぽかんとして訊ねると、
「村長におまえと一緒だと話したら持ってけってうるさいんでな、借りてきた。農耕馬だが脚は速いらしいぜ」
あっちにもう二頭つないであるんだ、とクラースはおかしそうに笑い、「村長の爺さん、よろしくと言ってたぞ」とつけ加えた。
(ベルアダム……ユグドラシルの位置からして、あそこはたぶん百年前のトーティス村じゃないかな)
クレスはひとりしみじみしながら、時というものの不思議を感じていた。
馬のおかげで、ユークリッドまでかなり時間を短縮することができた。ローンヴァレイとの間にかかっている橋のたもとに馬をつなぎ、徒歩で渡った三人は、ハーメルの町に入ったところで思いがけない光景に遭遇することになった。
「あっ！」
「こ、これは……」
ミントは思わずクレスの腕を摑んでいた。
建物は無残にも壊され、火を放たれて跡かたもない。つい先日訪れたばかりだという

のに、あの美しい風景はこれっぽっちも残ってはいなかった。
「そんなバカな……」
クラースはそうつぶやくと、憑かれたようにあたりを歩きまわり始めた。
「おーい！　生きている者はいないか？　誰かいたら返事をするんだっ」
だが、なんの応答もない。
(同じだ……あのときと……)
クレスの脳裏に、トーティス村が襲われたときの悪夢のような光景が蘇る。
まさかダオスの仕業では、と彼が思いを巡らせたとき、クラースが大声で呼ぶのが聞こえた。呆然としていたクレスはハッと我に返る。
「行ってみましょう、クレスさん。たしかあちらには教会がありましたよね」
「うん」
クレスたちが駆けつけてみると、クラースがひとりの少女を抱き起こしているところだった。すぐ近くに、めちゃめちゃに破壊された教会の残骸——祭壇のようだった——がうち捨てられていた。
「おい、しっかりしろ！」
少女は乱れた長い髪を揺らすようにいやいやをすると、ぽっかりと目を開けた。

「あっ、気がついた」
「大丈夫か!?」
クレスたちが口ぐちに気遣うと、少女は意外にもすっくと立ちあがる。どこにもケガはないらしい。
「あ……私ならなんともありません」
「いったいこの町になにがあった？」
「デミテルが、ああ、デミテルというのはこの町を襲った魔術師の名前ですが……」
クラースの問いに、少女は淀みなく答え始めた。が、その声は震えを帯びている。
「魔術師が襲っただと？」
クラースは眉をひそめた。
「ええ。大勢手下を引き連れて……私の両親も殺されました。両親も魔術師だったんです。デミテルはかつてお父さまの弟子でした」
少女の瞳から大粒の涙がこぼれ落ちた。それを見たクレスは、頭にカッと血が上るのを抑えることができなかった。
「師匠まで殺すなんてなんてことだ！　で？　そのデミテルって奴はどこへ行った!?」
「はっきりとはわかりませんが……北へ去って行くのを見ました。それから私、気を失

ってしまって……」
「よし。北へ行こう。仇討ちだっ」
「おいおい」
クラースはあわててクレスの肩を摑んだ。
「なに熱くなってるんだ。俺たちには時間がないんだぞ！」
「わかってるよ。けど……ほっとけないよ。この子、僕と同じ目に遭ったんだよ⁉」
「いいかクレス、それとこれとは違う」
「違わない！　なんだよ、クラースさんのわからずやっ！」
睨み合うふたりの間に割って入ったのはミントだった。
「ねえ、どちらにしろ、私たちも北に向かっているんですよ。それに、私にもわかる気がします……仇を討ちたい気持ちが」
「は」
クラースは急に脱力したようにクレスから視線をはずすと、
「わかったよ、ふたりとも。俺だって鬼じゃない。ただし、そう時間はとれんぞ」
と、苦笑した。するとそれまで心配そうに事の成り行きを見守っていた少女が、はじめて薄く微笑んだ。

「ありがとうございます。私、リア・スカーレットと申します」
「私はミントよ。よろしくね、リア」
ミントは少女の泥だらけの服をはたいてやりながら、心の中で「お母さん……」とつぶやいていた。

ベネツィア市はよく栄えた港町だった。外洋へ出て行く帆船が数多く港に停泊している。
市民も日常的に水に親しんでいるようで、町中に張り巡らされた水路を小船で往き来しているのがあちこちで見られた。
こんなときでなかったら、活気ある町を見物するのもいいな、とクレスは思う。
すでに夕方だったが、四人は迷わず船着き場へ行ってみることにした。道みちリアが語った話によれば、デミテルはベネツィアに住んでいたハーフエルフであり、一年ほど前に突然はるか西の孤島に移り住んでしまったらしい。
海に近づくと、かもめの声がうるさいほどだった。
「よう、お兄さんたち。船の用はないかな」
船着き場の端に退屈そうに座っていた水夫が、クレスたちに声をかけてきた。西陽に

目を細めながら、しきりに目の前の船を指さしている。
「これ、ほんとはミッドガルズ行きの定期船なんだよ。仕事がなくて、おいらたちも船長も困ってるんだ」
「仕事がないって、こんなに町がにぎやかなのにどうしてですか」
クレスが訊ねると、水夫はあきれた。
「なんだよ、そんなことも知らないのか。ミッドガルズが戦争をおっぱじめるから航路が閉鎖されたのさ。仲がいいはずのアルヴァニスタは今回なぜかあんまり協力的じゃないらしいぜ」
「戦争……相手はどこだ」
クラースが鋭く聞く。
「決まってるだろ、ダオス率いる魔物軍団！」
「！」
クレスたちは無言で視線を合わせた。一瞬のち、クラースは早口で「ミッドガルズ王国とアルヴァニスタ王国は昔から手を組んでダオスと戦ってきたんだ」と説明した。そしてしばらく額に手を当てて考えていたが、水夫に向かって訊ねた。
「西の孤島に行けるか？」

「えっ。あのデミテルって魔術師が住んでるって噂の？　う－ん、あそこは霧が深いからなあ」

水夫は船長に聞いてみないと、と気が進まなそうに答えて船に戻っていったが、やがて甲板から顔を出し、ＯＫのサインを送ってきた。

四人が乗りこむと、船はすぐに出帆した。クレスは甲板に地図を広げてさっき聞いたばかりの王国の位置を確認した。

「ミッドガルズに、アルヴァニスタか。まったく、地図を貰っておいてよかったよ」

「ほんとうに。クレスさん、両方ともそうとうな大国ですね。ダオスは二国を堂々と相手にするほど強いということになりますけど」

ミントも地図を眺めながら、ため息をついた。

いっぽう船の舳先（へさき）では、今まさに沈みつつある巨大な太陽と向かい合いながら、クラースがリアに訊ねていた。

「なあ、なぜデミテルはハーメルを襲ったんだ？　きみの御両親にしろ誰にしろ、個人的な恨みを抱いていたためなら町ごと破壊する必要はあるまい」

「さあ……たぶん、自分の力を見せつけたかった、とか。私にはわかりません」

リアは長い髪を風にはためかせながら、夕陽にきらめく波頭をじっと見つめた。

船はいったん北上し、それから西回りの航路をとった。一夜の船中泊ののち目ざす孤島に近づいたのは、翌朝のことだった。

「すごい霧だなー。マントがびしょびしょだよ」

島に上陸するなり、クレスは情けない声をあげた。水夫に聞いていたとはいうものの、これほどの霧は初めてだった。船から見たときも、島全体が霧の固まりに見えたくらいだ。

「おい、あれを見ろよ」

一行が歩き出して間もなく、先頭にいたクラースが足を止めた。

霧の切れ間に、古びた館が不気味な姿を浮かび上がらせている。ひどく陰惨な印象を与える石造りだった。

「なんだ、バカでっかい屋敷だなあ。デミテルはあんなとこに住んでるのか」

クレスは気味悪そうに館を見上げる。

「早く行こう。俺は悪党を長生きさせておく趣味は持ちあわせていないんでね」

と、クラースが顎をしゃくった。

館の扉のかんぬきははずされたままになっていた。

「開いてるぞ……」
クレスが扉の内側に身を滑らせると、薄闇の中、黴臭い空気が鼻腔に流れ込んできた。
クラース、ミント、リアの三人も続く。
「気をつけろ。相手は魔術師だからな……わっ！」
突然、クラースが何かを手で払いのけるしぐさをしながら後ろに飛びすさった。
キキキキ――――！
クレスはとっさに剣を抜くと、その不気味な鳴き声に向かって振り下ろした。バラバラと軽いものが撒かれるような嫌な音が床に響いた。
「きゃっ、ガイコツですっ」
目を凝らしたミントが悲鳴をあげる。だが、それが合図になったかのように、骸骨のモンスターが奥から何匹も出てきた。
「ミント、リアを守ってくれ！　――ええい、魔神剣っ！」
クレスはモンスターを斬り倒しながら奥へと進んだ。やがて両脇の壁にたいまつが灯されている廊下へ出る。不思議なことにそのとたん、まだ数体残っていたモンスターがかき消すようにいなくなった。と、かわりにひとりの男が一行の前に立ちはだかっていた。

「物騒な客人だな。なんの騒ぎかね」
男はターバンを巻いた頭をゆっくりと巡らせ、四人を睨めつける。クレスは剣の柄を握り直した。
「お前がデミテルか!?　リアの両親の仇をとりに来たぞっ」
「ほう、スカーレット夫妻をご存知か。まあ、そういきりたたず、入りたまえ」
デミテルは少しもあわてず、鋭い視線を投げながら一行を部屋の中へと促した。
そこはデミテルの自室らしかった。動物の剥製や干からびた草らしきもの、粉薬を入れた壜などがところ狭しと並んでいる。テーブルの上には占い師が使うような水晶球が重たげに置かれていた。
「で?　夫妻を師と仰ぐ私を仇呼ばわりとはいったいどういうことかな。誰にそんなデタラメを吹き込まれたかね」
「ウソをつくな。ちゃんとここにいるリアに聞いたんだからな」
「ハーメルの悲劇は知っている。だが、見るがいい。スカーレット夫妻は事故死だ」
デミテルはリアにちらりと視線を走らせ、クレスたちに水晶球を覗くように言った。
「あっ、これは!?」
クラースが驚きの声をあげる。そこには崩壊してゆくハーメルの町の様子が映ってい

たからだった。デミテルは勝ち誇ったように叫んだ。
「スカーレット夫妻は建物の下敷きになって死んだんだ——ひとり娘のリアとともにな！」
「えっ」
「この娘、誰かは知らんが偽者だ。リアとは似ても似つかんわ！」
クレスたちは呆然とした。リアは顔をこわばらせている。いったい、どちらの言い分が正しいのだろう。
そのとき、何気なくデミテルの足元を見たミントの瞳が、大きく見開かれた。
「クレスさん、影が……」
「ああっ」
クレスは、床に伸びる恐ろしげな黒い影を認めた。そしてその瞬間、デミテルの正体について思い当たった。
(同じだ、あの……マルス・ウルドールのときと)
「クラースさん！　ミント！　デミテルはダオスの手先だっ」
クラースたちは、クレスの抜き身の剣が空を走る音を聞いた。デミテルがすばやくそれをかわし、懐から出した黒い固まりをクレスに投げつける。とたんにものすごい爆発

音が響き渡った。
「きゃあっ、クレスさん？」
ミントが叫んだが、クレスの動きのほうがわずかに速かった。
「襲爪雷斬っ！」
「ぎゃあああああーっ！」
デミテルは黒焦げになって床に転がり、もうぴくりとも動かなくなった。
くたり、とリアが倒れる。
「あっ。しっかり」
ミントが抱き起こすと、リアは目を閉じたままにっこりした。
「ありがとうございました。これで私も両親のもとへ行けます……」
「え？」
「最後のお願いです……私の、心優しい友人をどうか……よろしく……」
リアの体が一瞬白く輝いたかと思うと、白い光がスーッと上昇する。それが静かに消えたとき、ピンク色をした帯状のなにかがひらひらとリアの胸に舞い落ちた。
「なにかしら、これ。リボン？」
「あっ、リアが気がついた」

目を開けたリアは立ち上がり、不思議そうにクレスたちを見回した。
「ここはどこ？　リアはどこよ。どうなったの？」
「なに言ってるんだ、リア」
リアはクレスに向かって首を振った。
「違うの。あたしはアーチェ」
「アーチェ？　あれ、どこかで聞いたような名前だな」
少女はミントが持っていたリボンを受け取ると、慣れた手つきで長い髪を高く結んだ。
「あっ、ポ、ポニーテール！　そうか、わかったぞ。アーチェだなっ」
クレスが叫ぶと、クラースが苦笑いする。
「すぐにわかれよ。ほんと、おまえって鈍いのな」
クレスが思わずくちびるを尖らすと、アーチェは、にこっと笑ってみせた。

第三章

「アーチェ！」
アーチェがローンヴァレイの家に戻るなり、バートが飛び出してきた。
「ごめん、お父さん。実はさあ」
「いやいや、無事ならそれでいいんだ……あれ、あんたたち」
バートは初めて気づいたように、娘と一緒にいるクレスたちの顔を見た。
「娘が世話になったらしいな」
「力になってもらっちゃったんだ。みんな、入ってよ。ほらほら、お父さんはお茶の用意して」
アーチェは早口で言い、さっさと居間に入ると、椅子にどさっと腰を降ろした。バートはいそいそと湯を沸かしに台所へ行く。甘いパパなんだな、とクレスは微笑ましく思った。

「だから、あたしはシルフのところじゃなくて、リアとおしゃべりでもしようと思ってハーメルに行ったんだってば。そしたら誰もいない町の入り口でリアが話しかけてきたの。すでに肉体をなくしたリアだったけどね……」
カップの中のりんごの香りのお茶をじっと見つめ、アーチェはこれまでのことを話しだした。腕組みをしながら聞いていたクラースは、
「仇への憎しみが強すぎて嘆きさまよう友の魂に自分の体を貸し与える、か。きみは魔術師として、相当の腕利きなんだな」
と、ため息をついた。アーチェはぱっと顔をあげて笑顔を作ると、
「ううん。みんなのおかげでうまくいったんだよ。リア、天国でおじさんとおばさんに会えてるよね」
「もちろんですよ」
ミントが頷いてみせた。
「ところで、クレスたちはなんでハーメルなんかにいたの？」
アーチェが訊ねる。
「ああ、僕たちはアルヴァニスタに行く途中だったんだ。ここにいるクラースさんが月の精霊ルナと契約するためにね」

「クラースは先日、シルフをものにしたんだ。風がおさまってたろ」
バートがつけ加えたとたん、俄然アーチェの瞳が輝き出した。
「おもしろそうじゃん！　決めたっ、一緒に行くよ。こんどはあたしがみんなの力に……」
「ダメだっ。これ以上心配させないでくれ」
バートがすかさず遮ったが、アーチェも負けてはいなかった。
「お父さんは黙ってて。なによ、あたしの留守中にヘンなの連れ込んだくせに」
「なっ!?」
「生涯、愛してるのは亡くなったお母さんだけだとか言ってたくせに。さっきから裏でヒンヒン言ってるのはなによ!?」
バートの顔が真っ赤に染まった。
「ばっ、馬鹿！　あれは馬だっ。どっかの不届き者が、この谷に馬を三頭も捨てて行ったんだ。しょうがないから世話してるんだよ。犯人が舞い戻ってきたら、ただじゃおかない！」
クレスたちはぎょっとして、耳を澄ませた。確かに馬の気配がある。
（げ。やばい……あれはきっと僕たちの）

ベルアダムの村長に借りた農耕馬をここにつないでいったのを、すっかり忘れていたのだった。
「あの……！」
なにか言いかけたミントの口を塞いだのはクラースだった。
「それじゃ俺たちはこれで。先を急ぐので失礼する」
クレスもあわてて立ち上がると、挨拶もそこそこに家の外へ出た。
「いいんですか、馬のこと黙っていて。なんだかバートさん、かわいそうでしたよ」
ミントが非難がましい目でクラースを見たが、彼は取り合わなかった。
「話がややこしくなるだろ。それに、俺たちが急いでいるのは本当なんだから」
「それはそうですけど……」
行くぞ、とクラースが歩き出したとき、背後でドアがバタンと音をたてた。
「待って！　あたしも行くったら！」
アーチェが走り寄る。手には古びたほうきを摑んでいた。
「でも、お父さんは？」
ミントが聞くと、へーきへーき、とあいている手をひらひらさせ、
「馬と一緒に畑でもやって待ってなよって言ったら、泣いてたけど。あの人、動物が苦

手だから」
　と笑う。それからクラースの手に何かを握らせた。
「これ、お父さんから。アクアマリンとルビーだよ」
　精霊との契約の際に必要な指輪だった。
「えっ。またこんな高価なものをふたつも……」
「気にしない気にしない。役に立つといいね」
　クレスたちは、ほうきを手にきゃらきゃらと笑っているアーチェを、あらためてしげしげと見た。
　くるくるよく動く、真紅の——それがエルフの血を引くものの特徴なのだと、あとでクラースがクレスたちに説明した——丸い目。ポニーテールに結ったピンクの髪。肩と襟(えり)が大きく張り出した服には袖がなかったが、二の腕近くまである長い手袋のおかげで、肌はほとんど晒(さら)されていない。足首にかけて膨らんだズボンは、裾(すそ)できゅっと絞ってあり、動きやすそうな仕立てになっていた。
「なに見てんのよ。さっさと行こうよ」
　アーチェはひょいとほうきにまたがると、ふわりと浮かんだ。
「うわっ。すごいっ、ねえクラースさん……」

クレスは興奮してクラースを見、そして息を呑んだ。彼がなんともいえない表情で、アーチェのほうきを食い入るように見つめていたからだ。
(どうしたんだろう、クラースさん)
クレスはだが、それ以上声をかけることができなかった。

ベネツィア港では、運よくアルヴァニスタ行きの船に乗ることができた。出帆間際だったせいか、甲板にはすでにかなりの数の客の姿がある。
クレスたちは自然とふた組に分かれ、離岸を見ることになった。
「潮風が気持ちいいねー」
アーチェはごきげんで、傍らのミントに笑いかけた。
「それにしても、みんながダオス討伐を考えてるとは意外だったけどさあ」
「ええ……あのう、ちょっと聞いてもいいですか」
「なに」
「アーチェさんはずっとお父さんとふたりで?」
「ん?」
アーチェはちょこんと首をかしげ、

「ああ、お母さんのこと聞きたいの？　エルフだよ。あたしが小さいとき死んじゃったんだって」

と事もなげに言ってのけた。

「つまり、アーチェさんはハーフエルフなんですね」

「そういうこと。うーん、海は広いなあ！　この開放感っ！」

(早くに肉親をなくすと、こんなにさばさばしていられるものなのかしら)

胸一杯に広がってくる潮の香りが、ミントのせつなさをいっそう強いものにしていた。

少し離れた帆柱の近くでは、クラースがむっつりと海を見ていた。

「ねえ、クラースさん？　ローンヴァレイを出たときからなんか変だよ」

「……」

クラースは、ちらりとクレスに尖った視線を走らせた。

「あ、あの、ハーメルを襲ったのはやっぱ、ダオスだよね？」

「……」

「なにか言ってよ。怒ってるのかい？」

クラースは、ふうと息を吐き、「ただの自己嫌悪さ」と吐き捨てた。

「なんですか、それ」

「ハーメル崩壊はダオスの仕業だ、間違いない。そして俺は……嫉妬している」
「え」
クラースはくるりとクレスに向き直ると、すごい形相で食ってかかった。
「おい、なんで俺は人間なんだ？　あんなピヨピヨの小娘が腕利きの魔術師で、研究熱心な俺はまだやっと駆け出しの召喚師。不公平だと思わないか⁉」
「クラースさん……で、でもそれは」
「わかってる。こんなこと考える自分が情けないんだ」
クラースががっくりと肩を落としたとき、背後からクレスの背中をバシッと叩くものがいた。
「いようっ！」
びっくりして振り返ると、いかにも旅慣れた感じの男が、陽気に鼻歌を歌いながら立っていた。いでたちから見て、流れの剣士らしい。
「あそこにいるかわいこちゃんたち、連れなんだろ？　どうせ今夜はこの船で寝るんだし、夕めしを一緒に食べないか。一杯飲んで、憂さ晴らししようや」
「あ、でも……」
クレスが困っていると男は笑った。

「別に怪しいもんじゃねえよ。おいら、メイアーっていうんだ」
「憂さ晴らしね。いいかもしれない」
クラースがくちびるの端を持ち上げる。と、甲板を踏み鳴らし、アーチェがものすごい勢いで走ってきた。目がキラキラしている。
「ごはん？　いま誰かごはんって言ったよね？　ごはんごはんっ」
「……酒だ」
クラースがつぶやいた。

「んもうっ！　ミントちゃんたら、ちゃんとお肉もたべなきゃ大きくなれませんよぉっ」
混み合った船内の食堂で、アーチェはさっきからミントにからんでいる。クラースも同じテーブルについているのだが、メイアーとすっかり意気投合してしまい、クレスたちのことなどおかまいなしだった。
「いいんです。私、太りやすいので……」
「ふんだ。どうせあたしはグラマーじゃないですよぅぅぅ～」
もう何杯目になるのか、アーチェは杯になみなみと注いだ強い酒をあおる。もともと

瞳の色が真紅なので、酔っているかどうか見極めるのはむずかしかったが、口調はあきらかに酔っ払いのそれだった。

「飲みすぎだぞ、アーチェ。ミントが困ってる」

クレスはアーチェの酒癖の悪さにとうとう頭に来て、席を立った。

「先に引き上げよう、ミント。クラースさん、あとは頼みました」

クラースは「ああ」と、上の空でちょっと手をあげてみせた。

クレスとミントが食堂から出ていってしまうと、アーチェはしばらくぶつぶつ言っていたが、やがてテーブルに突っ伏して眠ってしまった。

すでに夜は更け、客はまばらだった。が、クラースとメイアーのピッチは落ちない。

「おいらはさっき、モーリア坑道にお宝探索に行くと言ったが、実はウソなんだなあ」

メイアーは、ろれつの回らない口調でクラースの耳に口を近づけた。実はぁ、と言いかけたとき、突然アーチェが叫んだ。

「いや～ん、さわっちゃダメ！」

「な、なんだ。このねーちゃん」

「寝言だよ。で？」

とろんとした目のクラースが、メイアーに耳を近づける。

「ああ。おいらの真の目的は、だ。冒険者ギルドにいる知り合いを通じて、秘密の情報を売りにいくことさね。ギルドは知ってるな。モーリア坑道へ入る許可証も扱ってる、あのギルドだ。要はさ、一見平和に見えるアルヴァニスタだが、実はもうほとんどダオスの支配下に入ってるってことさ」

「なに!?」

ダオスと聞いて、クラースの酔いはいっぺんに醒めたが、メイアーは続けた。

「あそこの国の唯一の跡取りであるレアード王子な。王子もダオスの側近の操り人形にされちまったって話だぜ」

「じゃあ、アルヴァニスタがミッドガルズに協力しないのは……」

「そういうこった。ダオスと戦ったりしたら、王子は殺される。だから手出しできないのさ」

「お父さんのごはんは今夜も、馬のスープ！　いやぁん、クレスったらあ」

うふん、とアーチェが身を捩る。

クラースはガタンと音をたてて席を立ち、「そろそろお開きにしよう」と、アーチェを軽々と抱き上げた。

「ああ、今の話は内密にな。おやすみ」

メイアーは気持ちよさそうに手を振っていたが、クラースの姿が見えなくなると、急に体をビクンとさせた。
「……あ、誰だ？　……」
人影のまばらな食堂で、充血したメイアーの目に邪悪な光が宿ったことに気づいた者はなかった。

明け方。クレスはノックの音に気づいて目を覚ました。奥のベッドではミントとアーチェが寝息をたてている。クレスは起き上がり、隣のベッドにクラースがちゃんといることを確認してから、
「誰ですか」
と固い声で訊ねた。
「……おいらさ。メイアーだ」
「ああ」
クレスは安心してドアを開けに立った。
「おはようございますメイアーさん、ゆうべはどうも。ずいぶん早いで……のわっ！」
ビュンッ！

ドアの隙間から突然斬りつけられ、丸腰のクレスは飛びすさった拍子にしりもちをついた。

「死ね」

「クレス、ほらっ！」

メイアーがクレスに飛びかかろうとしたとき、

いつの間に起きたのか、クラースがクレスの剣を投げてよこした。

「サンキュ、クラースさん。助かった！　おい、外へ出ろ！」

クレスは素早く剣を構え、じりじりと流れの剣士をドアへと追いつめていった。

早朝の甲板は霧に濡れ、視界がひどく悪い。クレスは白いミルクのような霧の狭間にメイアーを捉えて驚いた。輪郭が二重に見える。

（これは……なにかがとり憑いてる……!?）

「うおぉぉぉぉーっ！」

「くっ！　虎牙破斬っ！」

刃がぶつかり合うガッキという音が霧に飲み込まれる。そのとき、メイアーの足が濡れた甲板で滑った。すかさずクレスが攻め込む。

「秋沙雨！」

「うわあーっ!!」
メイアーはまともに斬られ、よろけながら甲板の手すりを越えた。その瞬間、黒い影が霧の中に吸い込まれるのをクレスは見た。
「おい、大丈夫かっ」
派手な水しぶきの音と同時に、クラースが上がってきた。
「いま、片付いたところだよ。魔物が憑いていた……」
「たぶんダオスの側近だ。部屋へ戻ろう」
「えっ。なんでダオスが僕を襲うんだ」
「いいから！　……いてて」
クラースは、頭を押さえる。何時まで飲んでたんだ、とクレスは密かにあきれていた。

「そうだったのか。ということは……メイアーはクラースさんに情報を漏らしたあと、とり憑かれたんですね」
「ああ。アルヴァニスタの内情を知ってしまった俺たちを殺そうとしたに違いない。とにかくもう、うかうかしていられんぞ。俺たちはダオスに存在を知られてしまったんだからな」

船室のちっぽけなテーブルを囲んで、クレスとクラースがぼそぼそ話し込んでいると、ミントが起きてきた。
「おはようございます。なにかあったんですか？」
ミントはクレスたちの話を聞くと、顔色を変えた。
「そんなことが……。でもこれで、私たちが船を下りてすぐにやるべきことが、はっきりしましたね」
「え、やるべきことって？」
クレスが訊ねると、ミントは微苦笑（びくしょう）して答える。
「しっかりしてください、クレスさん。レアード王子を救出するんじゃないですか」
「あ、そっか。起きたばっかりでよく頭が回るなー、ミントは」
クラースはふたりのやりとりをにやにやしながら聞いていたが、
「よし。だがその前に、あそこでいびきをかいている魔術師の大先生を叩き起こしてくれ」
と、奥のベッドを指さす。下船の時刻が近づいていた。
アルヴァニスタは別名、魔法大国といわれているんだ、とクラースは港から都への道

みち、クレスたちに説明した。
アーチェはほうきでほよほよと飛んでいる。ゆうべ飲み過ぎて気持ちが悪いらしい。
「魔法を自国文化に取り入れようというのがここの王の方針なのさ。だからこの国じゃ多くのエルフたちが要職についているんだ」
「へえ」
ずいぶん積極的なんだな、とクレスは思う。
「ねえ、今夜は月がないはずだよ」
そのとき、アーチェが澄みきった真昼の空を見上げてぽつりと漏らした。
「城へ侵入するんでしょ？　だったらチャーンス、って感じ？」
「なんだ、ちゃんと話は聞いてたんじゃないか」
クレスが笑った。
一行は下見をするために、とにかく城へ行ってみることにした。都の中央広場まで来ると、前方に巨大な城を望むことができた。だが遠目にも城壁の高さが尋常でないことがわかる。
「あちゃー。闇に乗じて行くのはいいとして、あれをどうやって越えるのよ。下には衛兵がびっちりだよ、きっと」

アーチェは大げさに肩をすくめてみせたが、仲間の視線が自分にじっと注がれているのに気づくと、たじろいだ。
「え、なに……まさか、あたしのほうきで？？？」
「他に方法があるか？」
クラースに睨まれ、アーチェはくちびるを尖らせた。
「まあ、ひとりずつならなんとかなるかな。そのかわり……」
「なんだ」
「うん。この先の店でういろう買ってくれる？　あたし、甘いものに目がないんだ～。飲んだ翌日は、ういろう一本食いでシャッキリ！」
「……気持ち悪いやつだな」
クラースはしぶしぶアーチェの手に百ガルド乗せてやった。
アーチェの言う通り、空に月はなかった。夜が更けるのを待ち、クレス、ミント、クラースはアーチェのほうきで順番に城のバルコニーまで運ばれた。アーチェにつかまって飛ぶとはいえ、またがるほうきの柄は細く、ひどく不安定だった。
「闇夜でよかったです。なにも見えなかったから……」

ミントは誰にともなく感想を漏らした。
「さあ、王子の寝室を探そう」
クラースは仲間を促し、バルコニーの大窓から城の中へと忍び込んだ。薄明かりの廊下には、幸い見回りの兵の姿も見えない。
「このドア……紋章みたいのが彫ってあるけど。アルヴァニスタの印かな」
クレスがふと気づいて突き当たりの立派なドアをみんなに示した。
入ろう、とクラースが身振りで伝える。取っ手を慎重に回したのは、ミントだった。
「なんだ、真っ暗じゃん」
アーチェが先頭に立ち、全員が部屋に入ったとき、
「うわっ!?」
突然、まばゆい明かりが灯された。部屋の中央には、ひとりの若者が仁王立ちになっている。彼はクレスたちをぐっと睨みつけた。
「何者だ！　この国の継承者の寝室に忍び込むとはいい度胸だな」
「ふん。あんたがレアード王子か」
クラースはいかにも育ちのよさそうな王子の顔を一瞥(いちべつ)しただけで素早くあたりを見回し、低く言った。

「近くにダオスの側近がいるはずだ。探して先手を打つ」
「わかった」
クレスがミントと頷きあい、王子の近辺に視線を移そうとしたとき、
「いや～ん！　インコがいるぅ♪」
アーチェがぴょんと跳ねて、暖炉の上にとまっていた黄色いインコに駆け寄った。
「あたし、インコってだーい好き……は!?」
「アーチェ、危ないっ。そいつだっ」
クラースが叫んだが遅かった。インコは膨張したと思うと、たちまちどす黒い顔を持つ女に変わった。アーチェは床に尻もちをつく。
「げっ、かわいいインコがこんなのに！」
「ふはははは、こんなので悪かったね。私の名はジャミル。邪魔する奴は許さないよ。覚悟おしっ」
「来いっ、魔物め！」
クレスが剣を構えると、ジャミルは歯を剝いて襲い掛かってきた。クラースは半眼になり、印を結ぶ。
「出でよ、シルフ！」

ヒュウっと空気が鳴った。と、風は刃物の鋭さでジャミルの右腕を斬り、天井近くで渦を巻く。ギャアアっという魔物の悲鳴。

(すごい……これが召喚術か!)

魔術ではないとクラースは不満そうだったが、どこが違うのだろう、と思う。風の精霊シルフの力強い存在を確かに感じながら、クレスは剣を振るった。

「秋沙雨っ!」

魔物が床にくずれ折れる。アーチェはようやく立ち上がると、ぷりぷりしながら毒づいた。

「もう、インコなんか信じらんないっ。えいっ、トラクタービーム!」

ジャミルは見えない手でグイと持ち上げられ、床に叩きつけられた。そしてかき消すように消えてしまった。

「……あっ、王子さま!」

倒れていたレアードが体を起こそうとしているのに気づき、ミントが助け起こそうと近づいたとき、

「何者だっ!?」

王子の顔には警戒の色がありありと浮かんでいた。

「え？」
レアードはクレスたちの姿を認めるやいなや、大声で兵を呼んだ。
「侵入者だ！　ひっ捕らえろ！」
「ちっ。なんにも覚えてないってか」
クラースが舌打ちしたが、たちまち数十人の兵がどやどやと入ってくる。一行はなすすべもなく捕らえられてしまった。

湿ったレンガが氷のように冷たい。城の地下牢に放り込まれたアーチェは、床の上で思わず足踏みをしていた。
「あー、こんなとこにいたらお肌が荒れちゃうー。クラースったら、おかしいんじゃないの？」
鉄格子を摑んだアーチェは、冷たい床に平然と寝転がって休んでいるクラースを振り返り、非難がましい視線を浴びせた。
「なあに。王子が正気に戻ったとわかれば、すぐに出られるさ」
クラースはのんきに笑う。牢の奥ではクレスとミントが壁にもたれかかっていた。
「ここを出られたとしても……この先、僕たちはどうなるんだろう。こんなことをして

いる間に、あの美しいユグドラシルはもう枯れてしまったかもしれない。だとしたらダオスは……」

クレスのつぶやきを耳にして、ミントは彼に向き直った。

「知りたいですすか」

「え」

「先のこと。私たちの運命。それならモリスンさんに貰った本で調べたらどうですか。なにか書いてあるかもしれませんよ」

ミントのまっすぐな視線を受けて、クレスは「ああ」と曖昧(あいまい)な返事をした。

「この時代に来たときにちょっと読んだだけでしょう?」

たしかにそうだ、とクレスはモリスンが書いたという歴史の本を取り出した。

「なぜだろうな。僕はこれをいま読みたいと思わないんだ。いや、読めないっていったほうが正しいのかな……この中にはきっと、僕たちが知りたい未来が詰まってるっていうのに」

「クレスさん……それはきっと」

ミントが言いかけたときだった。カツカツという足音が響いてきた。クレスは急いで本をしまった。

足音の主が、見張りの兵に声をかける。
「この方たちを謁見の間に。丁重にな」
「はっ」
兵が牢の鍵を開けると、男は頭を下げ、
「諸君、大変失礼した。国王がお呼びだ。私はアルヴァニスタの宮廷魔術師を務めるルーングロムという」
と名乗った。クレスは男が真紅の瞳を持っており、耳の先が尖っているのに気づいた。
(エルフが要職についているっていうのは本当だったんだな)
「よかったぁ。さすが、クラースの言ったとおりだねっ」
アーチェにうれしそうな顔を向けられ、クラースはまんざらでもなさそうに体を起こした。

アルヴァニスタ王は、玉座について待っていた。脇に居並ぶ重臣たちの上座には、レアード王子が複雑な表情で椅子にかけている。
クレスたちが入っていくと、王は待ちかねたように口を開いた。
「その方ら、夜分城内に侵入した理由を申してみよ」

威厳に満ちてはいても、決して威圧的ではない話し方だった。
「王子を助けるためです」
クレスが答えると、レアードは「でたらめだ！」とこぶしを振り上げた。操られていた間の記憶はまったくないらしい。
「そちはなにも知らんのだ。黙っていよ」
王がぴしゃりと言う。と、クラースが一歩進み出た。
「申し上げます。私たちにはいま魔術が必要なのです。私はクラース・F・レスターという召喚師ですが、より強い呪文を得るために旅をしております――ダオス討伐のために」
「ダオス!?　おお、それはまことか！」
王は感激のあまり立ち上がった。
「許してくれ。実はその方ら、もしやただの盗賊ではと疑う気持ちも持っていたのだ。だがあらためてレアード王子のこと、礼を言うぞ」
うふっ、とアーチェが肩をすくめた。
「レアードが解放された今、我が国もやっと同盟国ミッドガルズに合流し、ダオスと戦うことができる。その方らの力もぜひ借りたいところだが……おお、そうだ」

ダオス

王は重臣のひとりを呼びつけると、耳元でなにごとか囁いた。重臣――やはり目の色と耳の形でエルフとわかった――は出て行き、すぐに戻ってきた。
「クラースとやら。呪文探索の旅を早く終え、ぜひ戻ってきて欲しい。そのために王家に伝わる契約の指輪を授けよう」
「……あ、ありがとうございます。なによりの品です」
クラースは重臣からガーネットの指輪を受け取った。
「まだあるぞ。レアードの部屋に転がっていた槍だ。おそらく魔物が持っていたのだろうが、これはグーングニルといって、神々の終末の戦いの際に作られたといわれているものだ。これは、剣の使い手であるそちに」
「えっ、僕？」
クレスはびっくりしたが、ミントにそっと背中を押され、由緒ある槍を王の手から受け取った。
「他になにかわしにできることがあれば申してみよ」
「それではさっそくですが、モーリア坑道の探索許可証をお願いしたい。私たちは月の精霊ルナとの契約を望んでいますので」
クラースが遠慮なく願い出ると、王は快諾してくれた。が、先ほどの重臣が口をはさ

んだ。
「クラース、モーリア坑道は知っての通りドワーフ族の鉱山跡だが、現在、中が崩れて途中で通行止めになっている。こちらでも可能な限り復旧の作業を急がせよう。ところで四大精霊との契約はすませたのか」
「まだ、シルフだけです」
「それでは炎の精霊イフリート、水の精霊ウンディーネ、地の精霊ノームが残っているのだな」
「ええ」
するとと、今まで黙っていたルーングロムが言った。
「クラース。もしその精霊たちとの契約も考えているなら、あとで私たちの魔法研究所へ寄ってくれ。情報を提供できると思う」
「ありがとうございます。必ず伺います」
クレスたちが謁見の間を辞すことになったとき、レアード王子が近づいてきた。
「ありがとう。そして、すまなかった。ふがいない私のためにこの国が滅びるところだったと思うと、今ごろになって震えがきたよ」
「あなたのせいではありませんよ、レアード王子」

クラースは王子にがっちりと手を握られながら、そう慰めた。
城をあとにした一行は、とりあえず宿をとり、疲れた体を休めることにした。が、クラースだけは部屋で軽い食事をとってすぐに城に戻るという。
「ルーングロムのいる魔法研究所は城の中にあるそうなんだ。おまえたちはここでゆっくりしているといい。ついでに許可証も貰ってくるよ。ギルドへ回さず、直接くれるらしいから」
「行ってらっしゃい」
ミントに送られて、クラースは出て行った。
「なんだかうれしそうでしたね、クラースさん」
「研究所っていうくらいだから、きっと魔法の宝庫なんじゃないか？　めったなことで入れる場所じゃないだろうし、彼にとってはヨダレものだよ」
ミントとクレスが話していると、背後で咳払いが聞こえた。アーチェだった。
「んーと。お邪魔だったらあたしも出かけるけど？」
「……なんで邪魔なんだ？　なに言ってるんだ」
クレスがぽかんとする。

「だって、ふたりはつきあってるんでしょ。バレバレじゃん」

「……」

アーチェは、ぽっと頬を染めたクレスとミントを見くらべながら、続けた。

「でなきゃどうしてこんな危ない旅を一緒にしてるのよ」

「いや、それは」

言いかけて、クレスは、アーチェに自分たちが未来から来たことをまだ話していなかったことに気づいた。

「クレスさん」

「うん」

クレスは、アーチェに座ってくれるよう言い、今までのできごとを順を追って説明した。

「げっ……ショック」

話が終わると、アーチェは四つ並んだベッドのひとつに、バフッと突っ伏してしまった。ミントがおろおろする。

「あ、あの、ごめんなさいね。突拍子もないこと聞かせて……」

「……あたしのほうが若いと思ってたのに。実はミントより百歳もばばあだったなんて、

ショーック！」

「って……そういう感想しかないのかよ。ひとがせっかく話したのに」

クレスとミントは顔を見合わせて肩をすくめた。そのとき、ドアが勢いよく開いて、クラースが飛び込んできた。

「おい、大収穫だぞ」

彼はまずモーリア坑道の許可証をテーブルの脇に置くと、その横に研究所でとってきたらしいメモを広げた。

「見てくれ。精霊たちと効率よく契約して歩くためのルートをルーングロムがアドバイスしてくれたんだ」

どれどれ、とアーチェがやってきて覗き込み、メモを読んだ。

「最初が炎の精霊イフリート。必要なのが、ガーネットの指輪。次が地のノームでルビーの指輪、水のウンディーネがアクアマリン、か。これなら全部持ってるじゃん、クラース」

「ああ。そのうえ、だ。モーリア坑道にはルナと契約するのに必要な指輪があるだけではなく、精霊マクスウェルが棲んでいるらしいんだ。マクスウェルのことは前に話しただろ？」

クラースは明らかに興奮していた。
「明日の朝早く出発しよう。強行軍になるが、先のことを考えるとすべての精霊を味方につけておきたいからな」
「こればかりは手分けするわけにはいきませんものね」
ミントがメモをじっと見つめて言う。
クレスは自分のベッドに腰かけ、壁に立てかけてあったグーングニルを手に取った。ずっしりと重いそれは、柄に荘厳な印象の装飾が施されていた。
(剣と槍、両方うまく使いこなせるかな)
今のうちに手入れをしておこうと思ったとき、鋭い痛みが頭に走った。一瞬顔をしかめたが、幸い痛みはすぐに消える。
「さ、そうと決まれば、ごはんごはん♪　今夜はステーキにしようねっ」
アーチェが舌なめずりするのに、ミントは困った顔になる。
「アーチェさん、私、お肉は……」
「だめだめ。年寄りの言うことは聞くもんだよ」
どうせ、このじじいのオゴリだしね、とアーチェはクラースをちらっと見ながら、いたずらっぽく囁いた。

炎の精霊イフリートは、フレイランドの洞窟に棲んでいるということだった。宿で一夜を過ごしたクレスたちは、アルヴァニスタの南東にある小さな港で船を雇い、フレイランド港まで追い風に乗って南下した。
「やけに暑いな」
港に降り立つなり、クレスがまぶしそうに目を細める。太陽はじりじりと照りつけ、じっとしていても汗が噴き出した。
「一気に夏って感じ？」
アーチェは足元に転がっていた干からびた魚を蹴飛ばして、前髪をかきあげる。
「あそこで少し休もう」
クラースは前方に見える集落を指さして言った。『オリーブヴィレッジ』と記された木彫りの標識が立っている。クレスたちは水と緑豊かなリゾート地のような村に入り、手ごろな木陰に腰を下ろした。
「ここはアルヴァニスタとミッドガルズの中継地点なんだ。いつもは商人たちでもっとにぎわっているんだが……」
「戦争のせいなんだね」

人影がまばらなのは暑さのためだけではないんだな、とクレスは思った。
「イフリートの洞窟は、ここからだとあっち、東の方向だな」
クラースがメモを見て説明していると、飲み物を買いに行っていたミントが戻ってきた。椰子(やし)の実に似た容器に入ったジュースはよく冷えており、一行の喉を心地よく潤(うるお)してくれた。
「お店の人にそれとなく聞いたんですけど。イフリートと契約しようと洞窟に出かけたまま帰ってこない人がけっこういるんですって」
ミントが眉をひそめると、クラースは指輪が入った革袋をみんなに示した。
「俺たちは大丈夫。さあ、行こう!」
洞窟の入り口は砂漠地帯にあった。が、足を踏み入れようとしたとき背後に何かの気配を感じ、クレスたちはハッと振り向いた。
「なんだあれは!?」
かなり距離はあるのだが、巨大なトカゲに似たモンスターがこちらをじっと睨んでいるのが見える。クレスは思わず剣の柄に手を伸ばしかけたが、クラースが止めた。
「放っとけ。あれはバシリスクというんだが、今はそれどころじゃないだろ」

わかりました、とクレスはあっさり洞窟内に飛び込んだ。
「さすがは熱砂の洞窟と言われているだけのことはあるな」
地中へ降りて行きながら、クラースが唸る。ものすごい熱さなのだ。
「それにしても暗いね」
アーチェが口の中でぶつぶつとなにか唱えると、ポッと音がして指先に明かりが灯った。それを頼りに地下へ降りつづけると、やがて目の前が紅に染まる。
「ひゃー、地の底が真っ赤に燃えてる！」
「海みたいですね」
アーチェとミントが頷きあった。
「関心している場合じゃないぞ。これからこの炎の海を渡るんだ」
クラースは炎の中に一か所だけ歩けそうな道を発見していた。どうやら倒れた柱のようである。三分の一ほどが顔を出していた。昔はここになにか建っていたのだろうか、とクラースは思った。
「落ちたらドロドロに溶けちゃう〜。女の子優先ってことで」
アーチェは身震いすると、ひょいとほうきにまたがり、後ろにミントを乗せてやった。
クレスとクラースは、炎に包まれぐらつく石の円柱の上を用心深く歩き、なんとかア

ーチェたちの待つ向こう岸に辿り着く。
と、ほっとする間もなく、奥の暗がりから燃えさかる炎の固まりがいくつも飛んできたと思うと、見る間にひとつに集まった。
「わしになにか用か!?」
炎の中から現れたのは、体格のいい男だった。クレスたちを威嚇（いかく）するように自らの体をボーッと燃やしてみせる。
「イフリートだな」
「いかにも」
クレスは精霊が今までのように女でないことに違和感を抱いたが、いろいろなタイプがいるらしい、と悟った。
「契約を結びたいのだ」
クラースの率直な言葉に、イフリートはふっと笑い、
「貴様ら、そろっていい目をしているな。今までここを訪れた金目当てのクズどもとは違うようだ。だが、このわしに勝つことができるかな」
ボウッ！　と、火を噴きかけた。
「負けるわけにはいかないいんだ！」

クレスは剣を抜き、いきなりイフリートに斬りつけた。
「魔神飛燕脚っ！」
刃を受けたイフリートは捩じれた炎となり、地を走る。
「くそっ、逃がすかっ」
左手でグーングニルを投げるクレスの横で、クラースが風の精霊の名を叫ぶ。
「シルフ！」
イフリートはあおられ、宙に舞いあがった。すかさずアーチェが両腕を横に払うしぐさをした。
「アイストーネード！」
氷の嵐がまき起こり、イフリートは激しく地面に叩きつけられた。
「むうう、貴様ら、やるではないか……」
「もういいだろう。契約を頼む」
「ああ、いいだろう」
イフリートは身を正すと、クラースからガーネットの指輪を受け取り、静かに目を閉じた。
「我、いま、炎の精に願い奉る。指輪の盟約のもと、我に精霊を従わせたまえ……我が

名はクラース……」
クラースはシルフのときと同じように人さし指と中指を立て、結んだ印で空を切る。オレンジ色の光となったイフリートを受け入れて、契約は完了した。
「ふう……。次はどの精霊だっけ？」
クレスがほっとしながら訊ねると、
「ノームです。ベルアダムの近くでしたよね」
ミントがすらすらと答えた。

一行はアルヴァニスタ港でベルアダム行きの船に乗り換えた。地の精霊ノームが棲むという洞窟は、村から比較的近い森の中にあった。
「熱砂の洞窟にくらべたら天国ですね」
ミントは湿った土の匂いを嗅ぎながら笑っていたが、涼しい洞窟の中を半分ほど進んだとき、突然ぴたりと足を止めた。
「どうした」
クラースが訊ねると、ミントは明かりを灯した指先を自分の足元に向けた。
「何かに抱きつかれてるんですけど……」

「あら、かわいい」

ミントが思わず声をあげる。彼女の足にしっかりとつかまっているのは小人の男の子だった。半ズボンに三角帽子といういでたちの男の子は、不自然なくらいにっこりと大きく微笑みながらミントの法衣の裾をしきりに引っぱる。

「うふ、こっちに来てって言ってるみたいですよ」

「ミントってシュミ悪いわね。こんな土気色の顔をしたお子様がかわいいって？　これは罠よ、絶対」

アーチェが眉を寄せると、男の子はたたたっと洞窟の奥に走り去った。

「そんな、アーチェさん、考えすぎ……ひっ」

ズボッ！

今度は足元で異変が起きた。白い棒状の生き物が土の中から顔を出したのだった。ほらね、とアーチェがミントを横目で見る。

モグラのようでもあるが、発育の悪いアスパラガスといったほうが近い。目がぎょろぎょろ大きくて、こぼれ落ちそうだ。

「だれだー、ぼくのなわばりを荒らすやつはー」

平べったい一本調子の声に、一行は思わず絶句した。

「ぼくをノームと知ってのことかー」
(こ、こんなのが精霊なのか!?)
クレスが呆然としているとさっきの男の子がたたたっとまたやってきて、「あっかんべ」と舌を出した。
「な、なんか調子狂うわね」
そう言いながらも、アーチェはきっちり「あっかんべぇ」と仕返しをする。
「ノームよ。契約をしたいのだが」
クラースの言葉に、ノームは全身をよじった。
「やだー」
「それじゃ勝負だ」
だが、クレスが剣で威嚇すると、ノームはぺろんと頭を垂れた。
「まいったよ～ん」
「なんだよ、ふざけたヤツだなあ」
クレスがあきれるのを、クラースが「しっ」と制する。
「精霊の外見と持てる力とは、必ずしも一致しない。ノーム、さあ、ルビーの指輪を納めてくれ。おまえの力を借りたいのだ」

クラースは指輪を地面に置くと、契約の儀式を始めた。

四大精霊の最後は、北海の孤島の浸食洞にいる水のウンディーネだった。ベネツィアよりさらに北に上ると、さすがに寒さが身にしみた。できれば焚き火でもして暖をとりたかったのだが、全員ここまで休みなしできて、疲労がひどい。気が緩まないうちに区切りをつけたほうがよさそうだった。

浸食洞の内部はまるで天然の冷蔵庫だ。手の切れるような冷たい水があちこちに湛えられ、岩壁の高みからは滝が落ちている。

潮の香りを胸に入れ、クレスたちはなんとか歩けそうな岩を選びながら慎重に足を運びつづけた。

「はくしゅんっ！」

アーチェのくしゃみが、あたりに響き渡った。そのときだった。

ザバッという音とともに、水の中から銀色の髪の女が顔を出した。

「わらわの眠りを妨げるものは誰じゃ」

「ふぁ、ごめん。起こしちゃった？」

口を押さえたまま、アーチェが振り向く。

「え、誰っ」
「貴様らか……」
低くうめきながら、女は滴のしたたる全身を現した。
「許さん……者ども、やってしまえっ」
「ま、待て。ウンディーネだな?」
だがクラースの声は、そのときどこからか降ってきた巨大なイカやカニの大群に遮られてしまった。アーチェが歓声をあげる。
「いや～ん、海の幸～♪　クレス、取ってよ」
「いわれなくてもやってるよ!　少しは魔法を使って手伝えっ」
クレスはグーングニルを操り、攻撃してくるモンスターたちを串刺しにしながら、怒鳴った。
傍らではクラースがウンディーネと対峙していた。水の精が長い銀色の髪をはためかせて襲いかかる。
「くっ、シルフっ!　ノーム!」
クラースの召喚に応え、洞窟の中をつむじ風が駆けぬけた。
「おおうっ」

ウンディーネは飛ばされて岩場に落ちたが、次の瞬間、ノームの力で岩が粉々に飛び散った。
「イフリート！」
体勢を崩していたウンディーネは炎に焼かれ、とうとう降参した。
「も、もう許してたもれ……わらわ以外の四大精霊すべてと契約しているとは……して、望みはなんじゃ」
「もちろん。契約して貰いたい」
「アクアマリンをくれるか」
クラースは黙って革袋をふところから出して見せた。

「あー、死んだー」
数日後。なんとかアルヴァニスタの宿に戻った四人は、昼間からベッドに伸びていた。
「いよいよ明日はモーリア坑道か」
クラースが天井に向かってつぶやくのを聞いてクレスは驚き、
「明日だって？　せめて一日くらい休もうよ」
と泣き言を漏らす。

「人間、休息は大切ですよ、クラースさんだって……あれ？」
クラースは帽子を顔に乗せたまま、深い寝息をたてていた。
「本当はクラースさんがいちばん休みたいはずですよね」
ミントは優しくシーツをかけてやりながら、慈しむようにクレスとアーチェにも目を配り、法術を使った。
「ナース！」
「……あ、なんか楽になったよ」
アーチェはベッドに仰向いたまま、足をばたばたさせる。
「ありがと。未来の法術も捨てたもんじゃないね」
「ふふっ」
ミントはクレスと目を合わせると、鳶色の瞳をくるっと動かした。
「あれ？　なんか甘い匂いがする」
アーチェは起き上がると、クラースに近づいた。鼻をくんくんさせながら、「これだっ」とつまみあげたものは、小さな革袋。
「やめろよ、ひとのものを勝手に。それにその袋は指輪を入れてあったやつだろ」
クレスの非難もおかまいなしに、アーチェはさっさと袋の口を開けてしまった。

「は……なにこれ。カラカラになったパン、じゃないな……パイ？」
干からびてはいるが、それは確かに一片のパイのように見えた。
「クレスさん、もしかしてこれ」
「ああ。たぶん……ミラルドさんの」
チェリーパイ。ふたりがハモると、アーチェが頬をぷっと膨らませた。
「なによー、またまたふたりの世界？　あたしにはわからないお話のようですわね」
「袋を元通りにしたら話してやるよ」
クレスは苦笑し、クラースの顔からずり落ちた帽子をそっとサイドテーブルに置いた。
（旅立ちの日にミラルドさんが持たせてくれたパイのかけらを大切に持ってるなんて……きっと最高のお守りなんだな）
よけいなことに巻き込んでしまったのではという思いを、クレスは無理やり頭から追い払った。

翌日は気持ちのいい快晴だった。四人は宿から徒歩でモーリア坑道へと向かった。
「なんだか三日三晩寝たような爽快さだな」
満ち足りた様子でクラースが伸びをする。彼は結局夕食にも起きてこず、朝まで眠り

続けていたのだった。
坑道に着くと、中から見張りの衛兵が飛び出してきた。
「こらっ、お前たち。勝手に入ることは許さん！」
「はい、許可証」
クレスが出した許可証を、胡散臭そうにしげしげと眺めていた衛兵は、すぐにハッとなって頭を下げた。
「失礼しました。王宮からの連絡により、数日前に兵が調査に入ったのですが、土砂崩れによる坑道内の通行止めは未だ改善されておらず……」
「そうなのか。まあ、とりあえず行ってみるよ」
クラースが言うと衛兵は敬礼し、詰め所から小ぶりの松明を持ってきてくれた。クレスが受け取る。
「ドワーフ族って地下に住んでたんだって。もう絶滅しちゃったけどね」
「きっと暗闇で目がきいたんだろうなあ」
「そうだね。ここ、王国が管理してるくらいだから貴重な遺跡なんじゃない？」
クレスとアーチェは頷きあいながら、先に立って暗い坑道を降りて行った。
しばらくすると、夥しい土砂の堆積にぶつかった。地盤が緩んだために、道の両側か

ら崩れたようである。
「通行止めというのはこれのことでしょうか」
ミントがクラースを振り返る。
「ああ。きっとそうだ。みんな、少し下がっててくれ」
クラースはいつもの印を結ぶと、ぶつぶつと呪文を唱えた。
「……出でよ、ノーム！」
次の瞬間、クラースがさっと払った指先から、勢いよくノームの白い体が噴き出した。
地の精霊は、まるで膨らませている途中で手を離れてしまった風船のように坑道内を跳び、たちまち土砂をはねとばしてゆく。
「道ができたっ！　なんか土が自分から動いてたみたいに見えたよ」
クレスは思わず積み上がったばかりの土壁に手をやった。
(あれ、なにか光った……？)
それはまるで地層に埋もれる化石だった。そっと抜き出してみる。
「指輪！　もしかしてこれがルナの」
いや、と指輪を見たクラースは首を捻った。
「月の精霊と契約するための指輪は、奥の宝物庫に眠っているはずだとルーングロムに

聞いたが……とりあえずこれも持っていてくれ」
「わかりました」
頷いたクレスが松明をかざすと、指輪についている石が青い光を放った。
またしばらく進むと、急に道が広くなり、視界が開けた。
「なにか建っています。石碑、でしょうか」
「いや、字が書いてあるぞ」
ミントが発見したのは、複雑な文字が刻まれた石盤だった。クラースはクレスが差し出す松明の灯かりで文字を読もうと、石盤を覗き込む。
「……ダメだ。さっぱりわからん」
そのとき、アーチェがクラースの横から首を突っ込んだ。
「ちょっと見せてよ……えーと。死を暗示する方位には破壊を司るものを招くがよい……生命の息吹を感じたならそこは誕生を司るものの場所であり……逝く者に涙する乙女は死を左手に感ずる場に招かれよ。風は乙女と向かい時の流れのように等しくみなに吹き抜ける……だってさ」
「よ、読めるのか」
クラースは驚愕(きょうがく)の表情でアーチェを見つめた。

「プライマル・エルヴン・ロアー。これは古代エルフ族の言葉だよ……って、なによ、その驚きようは！　あたしは半分エルフなんだから読めてとーぜんなのっ。もしかしてあたしのことパーだと思ってたんじゃない？」
「い、いや……それで、どういう意味なんだ」
アーチェは振り上げていたほうきを降ろすとちょっと考え、
「地水火風の精霊をどこかに召喚しろってことかなあ」
と答えた。と、少し離れた暗がりでミントが叫んだ。
「みなさん、こちらへ来てみてください！」
クレスたちが行ってみると、地面に四つの魔法陣が描かれており、それぞれに古代文字でなにか書いてある。方位らしい。
「ここが北だってさ。魔術的に言って、北が死を意味することはあるよね。破壊をもたらすのは、火」
アーチェの頭には、一度読んだだけの石盤の文章がすっかり入っているようだった。
「でもって、乙女が火を左に感じて、向かいに風がくるんでしょ。できたじゃん」
「え、え、え？　わかんないぞ」
クレスはあちこちを指さしながら混乱していた。

「北がイフリート、西がウンディーネ、東がシルフ。残ったノームが南ですよ」
ミントがそっと耳打ちしてくれる。クラースはすでに四つの魔法陣の中央に立ち、印を結んでいた。
「ともあれ、先に四大精霊と契約しておいてよかったみたいですね」
ミントが微笑んだ。
「イフリート！　シルフ！　ノーム！　ウンディーネ！」
クラースが北から右回りに召喚した精霊たちがそれぞれの魔法陣の上に現れた。が、見る間にその姿は揺らぎ、透けてゆく。かわりにまばゆい光の球がクラースの頭上に浮かびあがった。
「マクスウェルか!?」
「そうじゃ。ぬしら、何用でわしを呼んだ」
マクスウェルは老人だった。真っ白なあごひげをしごきながら、宙に漂っている。
「ルナとの契約の指輪が欲しいのだ。宝物庫を見せてほしい」
クラースが言うと、マクスウェルはクレスをひたと指さした。
「宝物庫はぬしがしょっておる、お若いの」
「えっ!?」

びっくりして振り返ると、たしかにそこには岩壁の向こうへ続く、古びた扉があった。
(さっきまでここにはなにもなかったのに……いつの間に……)
クレスは扉に手をかけてみたが、押しても引いてもびくともしない。
「ほっほっほっ。ぬしたち、文武両道という言葉を知っとるかな。ぬしらはわしが統治するすべての精霊を召喚し、石盤の謎を見事解いてみせた。気に入ったぞ。なにかできることがあれば力になってしんぜよう」
「本当か。で、では、契約を」
クラースの声は微かに震えていた。
「よろしい。ターコイズの指輪を」
「これ、かな」
クレスが扉をいったんあきらめ、さっき見つけた指輪を出すと、マクスウェルは「うむ、それだ」と頷いた。
「よかった。ありがとう、おじいちゃん。大好きよっ」
「お、おじいちゃんとな……ほほっ」
マクスウェルはアーチェの投げキッスに白髪の眉の片方をぴくりとさせたが、そのまま目を閉じた。

クラースが契約の儀式を終えたとき、背後でカチリと硬い音がした。扉の鍵が開いたのだった。
「やったね」
クレスとミントが宝物庫へ飛び込む。庫内は想像していたより、こじんまりとしていた。
「ありゃまあ、だらしないおじいちゃんね」
宝物類が入っているらしい箱が雑然と置かれている様子に、あとから入ってきたアーチェが腰に手を当ててあきれた。
「……夢みたいだ……」
クラースがやってきたが、ひどくふらついている。ミントが声をあげる。
「どうしたんですか、クラースさん」
「いや、まさかマクスウェルまで召喚できるようになるとは思っていなかったものだから」
アーチェがつかつかと寄ってきて、クラースの背中をバンと叩いた。
「しっかりしてよ。ダオスを倒すのが目的なんでしょ。精霊と契約しただけで夢見ごこち、ふらふらになっちゃうなんて」

「うるさい」
クラースは目の前で自分を見上げている真紅の瞳の少女を睨みつけた。
「生まれついての魔術師で、古代文字も苦にならないお前になにがわかる。俺はただの人間なんだっ」
「しょうがないじゃん、そんなの。誰も自分がどう生まれるかなんて選べないんだから」
「なにっ!?」
クラースがいまにもアーチェに摑みかかろうとしたときだった。ふたりのやりとりをひやひやしながら見ていたクレスが、手にしていた宝物箱の蓋を開けて叫んだ。
「あった！　指輪だっ」
「クレスさん」
ミントはうれしそうに箱を覗き込んだが、すぐに表情を曇らせた。
「……これ、ふたつに割れてしまっています……」
「そんな!?」
クラースが箱から指輪をひったくるようにつかみとる。
「ほかに指輪はないのか、クレス」
「これだけみたいです……」

クラースは手のひらにのっている壊れた指輪の、黒ずみ、ざらついた断面をじっと見つめてくちびるを噛んだ。
「これじゃ使いものにならない……」
坑道内の空気が、急にシンと冷えたように感じられる。
(せっかくここまできたのに……最強の精霊ルナと契約できなかったら、僕たちはダオスと戦うこともできないんだろうか)
クレスは拳をぎゅっと握りしめた。

第四章

「おお……。マクスウェルが召喚できるようになったというのに、ルナの指輪がこれでは……」
　モーリア坑道の宝物庫で壊れた指輪を見つけたクレスたちは、どうしていいかわからなかった。とりあえずルーングロムに相談しようということになり、アルヴァニスタ城へ戻ると、魔法研究所を訪ねたのだった。
(変わったものばかりだなぁ)
　研究所の中をそっと見回して、クレスは驚いていた。数十人の研究員がそれぞれの持ち場についている。ほとんどはエルフだったが、ハーフエルフや人間も混じっているようだ。
　いったいどんな研究が行われているのだろう、棚に並んだたくさんの薬品類、積み上げられた書物。床に何度も描いては消された形跡のある魔法陣は、モーリア坑道で見た

それよりも数段複雑な様相を呈していた。
「なんとか直す方法はないでしょうか」
ミントが身を乗り出すようにして、ルーングロムを見上げる。
「まあまあ、そんな深刻な顔をなさらずとも」
ルーングロムはほんの少しの間、宙に視線をさまよわせ、「うん、あやつがいいか」
と、すぐに頷いた。
「私の古い友で、我が国のよき助言者でもあるエドワードという魔術師がいる。彼は確か指輪の研究をしていたことがあったと思う」
「そっ、その方はいまどちらに？」
クラースのせきこんだ問いに、
「郊外に館を構えて住んでおるよ。どれ、手紙を書いてあげるから持っていくといい」
と、部下に紙とペンを持ってこさせた。
紹介状を受け取って、城を出る。
「かなり歩くことになるな」というクラースの言葉に、クレスが手にしていたグーングニルを歩きやすいようにひょいと肩に担いだ、そのとき。
キィ――――ン……。

耳鳴りかと彼はとっさに思った。が、続いて何者かの声が頭の中に響き渡る。
〝若き剣士よ！　分不相応なふるまいは許さんぞ！〟
（えっ!?）
思わず足を止めたクレスに気づき、アーチェが振り返った。
「どうしたの？」
「いや……空耳らしい」
（なんだったんだろう、今の）
クレスはあたりを見回しながら、無理に笑ってみせた。

魔術師エドワードの館は、都からは南西にあたる静かな場所にあった。緑に囲まれ、ひっそりとたたずんでいる。
クラースが呼び鈴を押すと、しばらくして女性がドアを開けてくれた。
「どちらさまでしょう」
「突然申し訳ない。私はクラース。エドワードという方に会いたいのだが……まずはこれを」
クラースはルーングロムが書いてくれた手紙を渡した。女性は、優しげな顔つきで封

筒をひっくり返してみていたが、ぱっと顔を輝かせた。
「まあ！　ルーングロム様のご紹介ですか。私はエドワードの妻、リリスと申します。実は、夫は留守にしておりまして……」
「どちらへ？　急ぎの用件なのですが」
ルーングロム様のご紹介でしたら安心ですからお話しますが、とリリスは前置きし、
「夫はきたる戦争にアルヴァニスタが参戦できないことを知り、つい先日ダオスを倒せる者を求めて旅に出たんです……確か、まずフレイランドへ行ってみると申しておりましたが」
と、すまなそうに紹介状を返した。
「すぐに追いかけよう。まだそこにいるかもしれない」
クレスの意見に頷いたクラースはリリスに礼を言い、
「奥さん。アルヴァニスタ参戦を阻む障害はすでに取り除かれました。どうかご心配なく」
と、つけ加えた。リリスはほっとしたようだった。
「あのう、ついでと言ってはなんですが……。夫に会ったらこちらはみんな元気だからと伝えていただけますか」

「もちろん！　必ずね」
アーチェはにこっと笑い、リリスに手を振った。
「フレイランドなら、前に行ったことがありますよね」
都に戻る途中で、ミントが言った。
「あの暑っちいとこでしょ」
アーチェはあの気候を思い出したのか、うんざり顔で服の襟元をつまみ、ぱふぱふとやっていたが、ふと言った。
「ねえ、さっきリリスさんは『みんな元気』って言ってたけど、子供がいるんだね、きっと」
「かもな」とクレスが軽く相づちを打つ。
「そういえばリリスさんって人間だったよねえ。ということは子供はハーフエルフかな。それともクォーターだったりして？」
「あり得るね。要はどんどんエルフの血が薄くなるってことだが」
クラースが視線を投げると、アーチェは複雑な表情で彼を見返した。
この子も人間の男と結婚して何代かしたら、瞳の色も真紅でなくなってしまうのだろ

う、と彼は考えた。
　東南の港で船に乗り込む際、船長とクラースの間にちょっとした口論があった。以前は四人分で三二〇ガルドだった船賃が、「物騒だから」という理由で、ひとり一一五ガルドに値上がりしていたからだ。決して折れようとしない船長に、クラースは結局四六〇ガルド支払ったが、クレスたちは、戦争が近いことをこんなところからも感じないわけにはいかなかった。

「あー、やっぱり暑っちぃ～」
　オリーブヴィレッジに着くなり、アーチェが悲鳴をあげる。
「宿屋で聞いてみよう。この暑さだ、エドワードも部屋をとってひと休みしているかもしれない」
　クラースの提案に、全員が賛成した。
　宿は港にほど近いところにあった。暑さ対策なのだろう、宿に限らず、近隣の建物はすべて高床式になっている。
　階段を上って宿へ入ると、受付にいた主人らしき男が一行を迎えてくれた。クラースが用件を言うと、

「エドワードさんなら確かに滞在してるよ。きょうは朝からバシリスクの鱗を持っている人を探すって出かけてるけど。あんたたちも参戦組かい？　だったらそっちだ」
と、喫茶室を兼ねているらしいロビーを示す。そこには十人ほどの男たちが思い思いのかっこうで椅子にかけていた。
「エドワードが集めた傭兵だな」
クラースは遥かに広がる砂漠を窓から見ていたと思うと、
「ちょっと出よう」
とクレスを促した。
「えー、なんでぇ？　ここで待ってれば確実に会えるじゃん」
暑いのが嫌いなアーチェが頬をふくらませる。
「おまえとミントはここにいるといい。女の子に陽焼けは大敵なんだろ」
「あら、クラースらしくもない優しいお言葉。ミラルドさんがそう言った？」
クラースは一瞬ぎょっとなったが、帽子で顔を隠すようにして黙って宿を出て行った。
あとに残されたふたりは手持ちぶさたに壁にかかった絵をながめたりしていたが、やがてアーチェが意味ありげな目をミントに向けた。

「ねえ、ずばり聞いちゃうけど」
「なんでしょう」
「クレスのことよ。ほんとのとこはどうなのよ」
「どうって……」
はああ、とアーチェがため息をつく。
「じゃ、あたしが貰っちゃってもいいってことだ。はい、この話はおしまいっ」
(貰うって……猫の仔じゃあるまいし、アーチェさんったら)
ミントはとまどいの表情のまま、クレスたちが出ていった窓の外の明るみに遠い目を向けた。

「どこまで行くんですか」
そのころ、クレスたちは焼けつく砂漠で太陽にじりじりと焦がされながら歩いていた。
「別に。目的があるわけじゃないさ。ただ、バシリスクが出てこないかと思って。前に出食わしたろ」
ああ、とクレスは熱い砂を踏んで頷いた。
「たしかイフリートのいた洞窟の入り口で」

「そうだ。バシリスクの鱗は傷の特効薬だからな。最近は入手困難らしいからエドワードが探しているというのもわかるよ」
「へえ……だけど」
たしかものすごく手強いんじゃなかったっけ、とクレスが思い出していると、
「いたぞ！　噂をすれば、だ」
クラースが叫んだ。
「やつは敵を石化させることができるんだ。石になりたくなきゃ油断するな！」
「えっ!?　そんなこと急に言われたって」
斜め前方からバシリスクが走ってくるのが見えた。
ギシャァアアアアア――――ッ！
爬虫類特有のうろこが鈍く光る。クレスはとっさに剣を抜き、すれ違いざまに振り下ろした。
「魔神剣！」
「クレス、剣じゃ石化光線を出されたとき危険だ。ちょっと下がっててくれ」
剣圧でひるんだモンスターの前で、クラースが呪文を唱え始める。
「マクスウェル！」

と、マクスウェルが宙空に現れた。その体から分かれ出た光の球体が熱い大気を裂いて飛び、バシリスクに激突した。
ギッ、ギシャァァア……。
はじめのうちはもがいていたバシリスクも、やがてぐったりと砂の上に横たわった。
「さすがだ。たいしたもんだなあ」
クラースは首を振りながらモンスターの屍骸に近づき、膝をついて用心深く鱗を探る。
「ダメだな……剝がせたのは五枚だけだ」
(たいしたもんだ？……エドワードという人のために鱗を探してたのかと思ったけど、もしかして精霊の力を試したのか……)
来る戦いのために、契約した精霊の力を知ることも必要なんだな、とクレスはクラースが手にした半透明の巨大な鱗に目をやりながら考えた。クラースは革袋に鱗をしまうと立ち上がった。
「さ、戻るぞ……ん？　なにがおかしいんだ」
「いや。ただ、クラースさんってなんでもその革袋にしまうんだなって思って」
「え」

クラースは袋を持ったまま、怪訝そうにクレスを見た。
「だからアーチェにもミラルドさんのことがバレちゃったんですよ。パイなんかしまっておくから」
「ばっ……!? 見たのか。こ、これは単なる非常食だっ!」
「はいはい、非常食ですね」
クレスがくすくす笑いながら宿へ戻ると、待ちくたびれたミントたちが出てきた。
「遅いよ。ジュース飲みすぎちゃったじゃん」
アーチェが飛び跳ね、おなかをチャプチャプいわせてみんなを呆れさせていると、
「ああ、あんたたち。ちょうどよかった。エドワードさんのお帰りだよ」
主人が知らせに来てくれた。クラースがさっと受付に歩いて行く。
「エドワードさん?」
「ああ。そうだが」
エドワードはがっちりした肩と強い光を放つ目を持った男だった。クラースが差し出した手紙を受け取り、
「グロムからの紹介? こんなところまでわざわざ来るなんてよほど訳ありのようだな。まあまあ、話は部屋で聞こうじゃないか」

と、陽焼けした頰を緩ませた。
ちょうどそこへクレスとミントがやって来た。ふたりはエドワードの顔をひと目見るなり、驚愕に表情をこわばらせた。
「あ、あ、あああああ――――っ？　モリスンさん……!?」
「ああ。私のファミリーネームはモリスンだが。なにをそんなに驚いているんだ」
「失礼だぞ」
クラースに睨まれても、ふたりはエドワードから目を離すことができないでいた。光の加減で赤く見える瞳の色を除けば、少し高目の頰骨から顎にかけてのシャープなラインといい、意志的な口もとといい、あのモリスンにうりふたつだったのだ。
（でも、モリスンさんは私たちの時代のあの地下墓地で……）
ミントはダオスと対峙したあの忌まわしい記憶が蘇ることに嫌悪感を覚えながら、みんなと一緒に二階へ続く階段を登った。
エドワードは手紙を読み終わるなり、愉快そうに笑った。
「そうか。レアード王子を助けたのは君たちだったのか。私も王子が正気を取り戻したことを知ったのは最近だがね。いや、話はだいたいわかった。その指輪を持ってユミルの森へ行ってみるといい。指輪はもともとドワーフ族とエルフの合作だからな。あそこ

なら修復の方法があるはずだ」
「エルフたちの森なんて……とても入れませんよ」
珍しくクラースが弱気な声をあげる。
「ルーングロムに頼めばなんとかしてくれるだろう」
「そうですか……あ、そうだ、これを」
クラースはとってきたばかりの鱗をエドワードに手渡した。
「バシリスクの鱗じゃないか。これはこれは、何よりの品だ！　きょうも探しに行ったんだが、空振りでね。集めた兵の傷薬くらい持っていないと無責任だからな」
と、エドワードは喜んだ。
「私はこれからもう少し兵を募り、ミッドガルズへ向かうつもりだ。本当は君たちのような優秀な若者にも同行してほしいところだが……ま、無理は言うまい」
クレスは、「まだ用事が残っているから」とせわしなく部屋を出て行く彼をじっと見つめていたが、決心したようにあとを追った。

「モリスンさん！」
宿を出たところで呼び止められたエドワードは振り返り、クレスを認めると「まだな

にか？」と訊ねた。
「先ほどは失礼しました。ちょっとこれを見てください」
クレスはかつて地下墓地でモリスンに貰った本を差し出した。
「これはまた、ずいぶん古びた本だね……え、モリスン……私のサインがなぜ？」
エドワードの顔がにわかに険しくなった。
「驚かないで。トリニクス・D・モリスン。この本を僕に託してくれた人の名です。つまり、あなたの子孫です」
「なんだって？」
「僕は未来の世界から来ました……どうぞこの歴史の本を読んでください。これからの戦いに、きっと役に立つと思います！」
エドワードはぽかんとしていたが、突然笑い出した。
「ふっはっはっ！　時空転移だと!?　冗談はよしてくれ。この私さえまだ研究中なのに」
「だから、きっと将来その研究が実ったんですよ」
「クレス君、だったね」
エドワードは笑いをおさめると、強い目の光を放ちながら言った。
「まずはくわしい話を聞こう。ただし私には時間がない。戦争の始まる前にミッドガル

ズ入りしなくてはならんのでね。手短かに頼む」
「わかりました」
クレスはこれまでのことを簡潔に話して聞かせた。
「……ふむ、そうか。仮に君の話が本当だとしても、やはり私は聞きたくないな」
「え」
「君は戦争の結果を知ってるんだろ……。私は、『負けた』と書いてあれば、あきらめてしまうかもしれない。『勝つ』とあればどこかで手を抜くだろう。私はすべてを知ることによって、そういうことをしたくないんだ」
「実は僕もこの本に書かれていること、ほんの少ししか知らないんです。戦争の勝敗も……」
なぜ、とエドワードが訊ねる。
「……わかりません。僕の目的はダオスを倒すことによって、いまお話した親友やエドワードさんの子孫……それに他の人々を助けることだけど、ここにくるまでいろんなことがあった。結局は自分で動いて自分で知ることを積み重ねるしかないような気がしているのかもしれない……」
「たぶんそれが正解だよ、クレス君。きみがどこから来たにしても、この時代を生きる

ということは、きみ自身にしかできないことなんだ」
エドワードはクレスに本を返すと、くちびるの端をちょっと持ち上げる独特の笑いを見せる。
「で、未来に帰るあてはあるのかい」
「……いいえ」
「よし。今度会うまでに私がなんとかしておこう。トリニクスなんて、今はまだ影も形もない子孫の奴にできて、この私にできないはずはないからな……ふふ、実は時空転移の研究はもうあきらめかけていたんだ。いいことを聞いた、励みになるよ」
そう言うと、エドワードは背を向けた。クレスは胸がいっぱいになり、思わず叫んでいた。
「エドワードさん！　待っててください。ミッドガルズできっと会いましょう！　僕たちも力になります！」
クレスの声が聞こえたのか彼はちょっと手をあげ、陽炎たつ熱気の中に消えて行った。
魔法研究所に戻ってルーングロムに事の成り行きを報告したクレスたちに王家のエン

ブレムが与えられたのは、オリーブヴィレッジでエドワードと別れた数日後のことだった。わざわざルーングロム自身が宿に届けてくれたのである。
「これを胸につけていくように。それと、前もって断っておくがハーフエルフは絶対森には入れんぞ。それだけは気をつけてくれ」
そう釘を刺して、ルーングロムは城に帰って行った。
「……じゃあ行ってくるから、ちゃんと待ってるんだぞ」
宿を出るクラースたちが、部屋のドアのところでアーチェを振り返った。
「わかったわよ。なーんか納得いかない気もするけど、それがしきたりならしょーがないじゃんね」
「悪いな」
クレスが言うと、ミントもすまなそうな顔をした。
アーチェは手をひらひらさせ、昼寝でもしてるからさ、と仲間を送り出した。
「……ふん、つまんないの。なんで同じエルフの血を引くあたしが行っちゃいけないのよ」
ひとりになると、とたんに退屈が彼女をイライラさせた。ベッドに上がり、大ぶりな羽根枕にパンチを食らわせてみる。何発か殴ったところで、

「そうだ！　あたしって天才じゃん？」
アーチェは笑みを浮かべながら、額を枕に埋めた。

クレスたちは都の東の橋を渡り、南西に位置する湖のほとりに辿り着いた。
「きれいなところですね」
ミントがほっとしたように目を細めた。
水は澄み渡り、さざ波が涼しげに湖面を走っている。岸との間には迷路のように橋が巡らされ、森はまるで湖に浮かぶ巨大な船のようにも見えるのだった。
と、クレスたちの姿を見つけたアルヴァニスタの衛兵がすごい勢いで駆けてきた。
「こら、お前たち！　ここから先はエルフ族以外立ち入り禁止だぞっ」
「許可は貰ってるよ」
「ウソをつけ。早々に立ち去らないと……」
衛兵の目が、クレスの胸に釘付けになる。
「こ、これは確かに我が王家の紋章！　し、失礼しましたっ」
彼はクレスたちを橋のたもとまで案内し、集落にいちばん近い道を教えてくれた。
「あれ？」

クラースが首を捻った。
「どうしました」と、ミントが訊ねる。
「いや、今そこの繁みの上になにか見えたような……」
「え、なにもいませんよ。鳥でも飛んでたんじゃないですか」
クレスが背伸びしながら言うと、クラースは「そうか、そうだな」と、あっさり引き下がった。
衛兵に教えられた通りの道を進んでいくと、今度はエルフがふたり、森の奥から走り出てきた。
「なんだ、お前たちは！　この先は」
「わかってるよ、エルフ以外立ち入り禁止だろ？　このエンブレムが目に入らないのか」
クラースはうんざりした口調でエルフを遮ると、クレスの胸をバンと叩いた。
「げふっ」
クレスは一瞬体のバランスを崩しそうになったが、手にしていたグーングニルで踏んばり、なんとか体勢を立て直す。
エルフたちは「あっ」と声をあげ、クラースに向かって一礼した。

「急ぎ族長に会いたい。よろしく頼む」
「お待たせしました。私が族長のブラムバルドです」
クレスたちがエルフに案内された小さな宿屋――外部からのエルフのために営まれている――で待っていると、明るい水色の髪を持った男が部屋に入ってきた。
「これはまたお若い族長だ。と言っても長寿のエルフ族に実際の年齢は聞かないほうがいいかもしれないが」
自己紹介をすませたクラースがそう言うと、ブラムバルドは「なに、生まれてからまだほんの百数十年しかたっていないですよ」と快活に笑った。クレスとミントは顔を見合わせてしまう。族長の端正な顔立ちは、せいぜい二十歳そこそこにしか見えなかったからだ。
「さっそくだが、これを見てほしいのです」
クラースが指輪を出すと、ブラムバルドは驚いた。
「これは、契約の指輪ではありませんか！　……でも、壊れてしまっていますね」
「修復の方法があると聞いたので、ここまでやって来たんです」
クレスが身を乗り出すと、族長は頷いた。

「なるほど……石盤の力が必要だな——。この村の北側はふつうトレントの森と呼ばれていますが、私たちにとっては聖域のヘイムダールという地でもあります。そこにある漆黒の石盤が問題を解決してくれるでしょう。しかし、ここに隠れ住むほとんどのエルフたちはその場所を知りませんし、私がご案内しましょうか」
「助かります！」
クレスは即座に椅子から立ち上がった。
ミントも席を立ちながらブラムバルドに言う。
「聖域があるなんて、大きな森なんですね」
「ええ、もっと奥へ行くとエルフではなく、忍者の隠れ里もあるんですよ」
「にんじゃ？」
クレスがオウム返しに訊ねた。
「ジャポン族の末裔でね。めったに姿を現さないが……忍びの者という意味です」
「へええ、忍びか」
どんな人たちなんだろうな、とクレスは思った。
ちょうどそのとき、ユミルの森の上空をほうきにまたがってふわふわ飛ぶ者があった。

アーチェだ。
「そろそろ動き出すかな、クレスたち」
ハーフエルフ絶対禁止の森に、彼女はこっそり空から侵入することを思い立ったのだった。顔を隠すために羽根枕のカバーでほおかむりをしていたが、それがどんなに目立つかはわかっていない。
空からだと、クレスたちが姿を消した建物のほかにも、エルフの住む家を点々と見ることができた。近くの広場では、男の子達が五、六人、年嵩のエルフについて魔法の修行に励んでいるようだ。元気な声が聞こえてきた。
アーチェは少し高度を下げた。が、枕カバーで視界が狭くなっていたために、そこに樹の枝が張り出しているのに気づかなかった。
「……うわっち!!」
枝にひっかかったアーチェは、そのままドシンと派手な音をたてて地面に落ちてしまった。
「いったぁ～い！」
したたか打った腰をさすりながら立ち上がろうとした彼女は、すぐそばの木立ちの間に誰かがいるのに気づいた。背中が見え隠れしている。

（え……ノゾキ？）

コホンと咳払いすると、ぎょっとした顔が振り向いた。

（なんだ、子供じゃん）

えんじ色の変わった服を着、背中に刀をさした少女の瞳が、まるで一瞬のうちにアーチェの素性を知ろうとするかのように、見つめ返してくる。だが、その視線からは何の感情も伝わってはこない。

「ねえ、何してんの？」

アーチェが訊ねると、少女は突然その場からフッとかき消すようにいなくなった。

「えっ!?」

あわててあちこち見回すと、樹々の枝から枝へ飛び移りながら森の奥へ去ってゆく姿が小さく目に映った。

「ほえ〜、なにあの子……新種のおさる？　んなわけないか。それにしても変わった服着てたよね……昔、お父さんから聞いたことが……たしかシャボンのまのび、じゃないし、しのぎ、じゃないし……なんだっけなぁ」

アーチェはぶつぶつ言いながら少女が覗いていた木立ちの間に顔をつっ込んだ。

「あれ。さっき上から見た……」

エルフの少年たちが魔法の修行をしている。
「ははーん、そういうことか。意中のカレがあの中にいるってわけね」
ひとりにやにやしたアーチェは、ふと足元に白い布が落ちているのに気づいた。拾い上げてみると、それは手ぬぐいだった。桜の花びら模様が染めぬかれている。
「かわいい。あの子が落としたのかな……」
そのとき、背後に速い足音がバラバラと近づいてきた。
「!?」
アーチェの真紅の瞳が、大きく見開かれた。

「これが漆黒の石盤ですか」
クレスが族長ブラムバルドの横で、その美しさに思わずため息を漏らす。
聖域ヘイムダールのほぼ中央に建っている石盤の黒は、夜の闇より濃いだろうと思われた。
「森の名でもあるユミルとは、根源をあらわす言葉なのです。この石盤にはすべての根源を司る精霊の王オリジンが眠っているといわれています」
「なるほど。それで物質再生の力があるわけだな」

クラースは族長に、ふたつに割れた指輪を渡した。
「では始めます」
ブラムバルドはクレスたちを後ろに下がらせ、石盤に向かって祈りを捧げる。ときおり漏れ聞こえる言葉は人間のそれではなかった。
これも古代エルフ族のものなのかな、とクレスは密かに考えた。
と、壊れた指輪が光を放ち始める。光は次第に強くなり、聖域じゅうにまばゆさが届くのではないかと思われたころ、ようやく収束した。
「終わったようですよ」
ブラムバルドは石盤の前に置いてあったふたつの指輪のかけらを拾い上げると、微笑みながらミントの手に乗せた。
「まあ。こんなに素敵な指輪だったんですね。それに、ふたつになっています」
ミントはクラースに向かって手を差し出してみせた。
「ふむ……もともと別々の指輪のかけらだったのかもしれないな」
彼は言い、片目をつぶって石を陽に透かして見る。
「ムーンストーンとトパーズだな。このどちらかでルナと契約できるといいんだが」
「でも、どこにいるかわかりませんよ」

クレスが言うと、ブラムバルドが記憶を探る目をしながら、
「それなら……『十二星座の塔』へ行ってみるといいでしょう。フレイランドとミッドガルズの間にあるんですが、精霊が棲んでいると聞いています。どんな精霊かはわかりませんが、契約できればかなりの戦力になるでしょう」
「わかりました。ありがとうございます」
クレスに礼を言われ、恐縮するブラムバルドをクラースはなぜか冷ややかな目で見ていたが、やがて口を開いた。
「かなりの戦力とおっしゃるが、族長。魔術を使えるこの森のエルフ族が参戦するなら、私が精霊を召喚するまでもない。あなたがたはダオスと戦わないのか」
「ええ……まあ、そういうことになりますね」
族長の口調は柔らかかったが、すでにその頬から笑みが消えている。
「……」
クラースもそれ以上は何も言わなかった。
(エルフは国王に保護されているはずなのに、なぜ力を貸さないんだろう)
クレスが疑問の視線を向けると、ミントも肩をすくめた。

一行が宿屋の近くまで戻ってみると、、エルフの集落ではちょっとした騒ぎが持ち上がっていた。ブラムバルドの姿を見つけるなり、男たちが走り寄る。
「族長！　怪しいハーフエルフの女を捕らえました！」
叫んだのは、集落の入り口でクレスたちを止めた男だった。
「なに、ハーフエルフだと⁉」
ブラムバルドが気色ばむ。そのとき、道の向こう側から妙に緊張感のない声が聞こえてきた。
「いや〜ん、お兄さんたら。ほどいてよおぉ」
「あ、あの声は⁉」
クレスはびっくりして声のするほうを見た。
「あっ、アーチェさん⁉」
ミントも口元に手を当てたまま、棒立ちになった。
荒縄でぐるぐる巻きに縛り上げられ、年老いたエルフに引っ立てられながら歩いて来るのはアーチェに違いない。
「待ってろと言ったのに」
クラースが舌打ちするのをブラムバルドが聞きとがめ、

「まさか、あなたのお連れですか？」と驚いた。
「あっ、クレス！　クラース！　ミントっ！　ねえ、早くほどいてもらってよ」
アーチェは仲間の姿を認めると、目を輝かせる。
「ちょっと油断してたら見つかっちゃってさあ、まったくツイてないったら……」
「気の毒だが」
年老いたエルフがアーチェを遮った。
「え？」
「気の毒だがね、ハーフエルフの不法侵入者は死刑と決まっておる」
「うそっ！」
それまでへらへらしていたアーチェの顔から、さっと血の気が引いた。
「族長！　いくら客人の連れだからといって、例外を認めていては他の者に示しがつきませんからな。即刻この娘を殺しましょう」
「ちょ、ちょっと、いくらなんでも……」
思わずクレスがアーチェをかばうように両手を広げたとき。
「待ってください！」
宿屋の裏口のドアから、ひとりの女が転がるように走り出てきて、族長の前にひれ伏

した。
「待って……どうか見逃してあげて。お願いしますっ。どしても殺すというなら、かわりにこの私を！」
全員が気圧されたように言葉を失った。
「……なぜ、そこまで？　もしかして……」
ブラムバルドのつぶやきに、女は顔を上げ、微かに首を振った。
「うむ……」
族長は女とアーチェをすばやく見比べて一瞬目を見張り、それから深い吐息を漏らした。
「……縄をほどいてあげなさい。これは族長命令だ」
年老いたエルフがしぶしぶ縄を解くと、アーチェは大きな伸びをひとつしてから、
「ありがと。助かっちゃった」
と女に礼を言った。ところが女はろくにアーチェの顔も見ようとせずに走り去ってゆく。そのくちびるからは「ごめんなさい」という微かな声がこぼれたが、誰の耳にも届くことはなかった。
（泣いてた……？）

「どうしたのかな、あの人……」
つぶやくアーチェに、族長の言葉が冷たく投げかけられる。
「あの人は宿の厨房で働いている、ただのエルフです。記憶にとどめる価値もない」
「……」
「さあ、もういいでしょう。あなたたちの目的は果たせたのだから、お帰りください」
突き放すような口調だった。クレスたちは後味の悪い別れを噛みしめながら、集落をあとにすることになった。
アーチェは黙りこくって歩いていたが、湖の橋にさしかかったとき、突然ビクンと体をこわばらせて振り返った。
「ああっ!?」
アーチェは森に向かって走り出したが、すぐに衛兵に取り押さえられてしまう。
「は、放してっ。お願い、さっきの女の人にもう一度会わせて！　わかったの。お母さんでしょ？　ねえ、聞こえる？　お母さんなんでしょ？　お願いだからっ！」
森はだが、アーチェの叫びを呑み込んだきり、シンと静まり返っている。
馬鹿な、と衛兵はうめくように言った。
「二度と入ってみろ。こんどこそ間違いなく死刑だぞ」

て、胸を突かれた。
クレスはミントの瞳に涙が盛りあがり、いまにもこぼれ落ちそうになっているのを見
「ええ……でも、この森でひっそり生きていたのかもしれませんね……会えなくても生きていてくれさえすれば、どんなにいいでしょう」

てもらった『十二星座の塔』を目指すことになった。
クレスたちは、アーチェを気遣いながらも、すぐにエルフの族長ブラムバルドに教え
誰もユミルの森で会ったあの女性のことを口にしなかった。仲間たちのさりげない気
遣いのおかげか、アーチェは次第にもとの明るさを取り戻したように見えた。
「『十二星座の塔』は、ミッドガルズの手前にあるんだろう？」
山道で小休止をとっているとき、クラースがクレスに訊ねた。
「うん。ブラムバルドさん、そう言ってましたね」
「それは好都合だな。もし契約に失敗しても、とりあえずエドワードを訪ねることがで

きる」
「クラースさん！　じゃあ、モリスンさんと一緒に戦ってくれるんですね!?」
クレスはうれしそうに顔を輝かせる。
「お前が勝手に約束してしまったんじゃないか」
クラースは苦笑し、「俺は嘘つきは嫌いなんだよ」と照れかくしのようにつけ加えた。
塔はすぐに見つかった。人里から離れ、荒れ果てた草地にぽつんと建っているので、遠くからでもひどく目立つのである。
クレスたちは入り口の扉に分厚く絡まっている蔦(つた)を剣で斬り、中へ入った。
「真っ暗だな。だいたいなんで十二星座なんだろ」
クレスがぶつぶつ言うと、アーチェが指先に光を灯す。ぽっ、とあたりが明るんだ。
「月の満ち欠け、星のめぐり。古代の人々はこの世に起こるすべてのできごとと夜空との相関関係を研究してたんだよ。この塔のてっぺんから天体観測でもしてたんじゃない？　あ、そこ、階段」
アーチェは身のこなしも軽く、トントンと螺旋階段を昇ってゆく。壁には一定の間隔で、大きな絵画の額がかかっていた。だが永い年月の流れの中で顔料が劣化し、剝げ落ちてしまったのだろう。何が描かれていたのかを知ることはできなかった。

「古くなりすぎてしまったんですね……」
ミントが白い指で埃(ほこり)の積もった額縁を撫で、残念そうに言う。
「一、二、三……」
クレスが階段を昇りながら数えてみると、絵は全部で十二枚あった。
「へえ、十二星座だからかな」
と、そのとき、微かな音楽が一行の耳に流れ込んできた。
しっ。アーチェが振り返り、ひとさし指を立てる。
「上から聞こえるみたい……」
「窓がないからよくわかんないけど、これだけ昇ればもう塔のてっぺん付近だろ。もしかしたら、ルナかもしれない」
それはクレスたちがいままで聴いたどんな音楽の調べとも違っていた。不思議な音色に誘われるように、階段を昇りきる。
「あ……」
闇に溶け込んだ階下とは対照的に、そこは穏やかに光り輝いていた。細く開いた扉の前で、背中に透明な羽根をつけた小さな男の子が竪琴を鳴らしている。妖精だな、とクラースは思った。

「あなたが弾いていたの。すてきね」
ミントが優しく微笑むと、
「ぼく、アルテミスっていうの。中へ入ってもいいよ」
男の子はそっと扉を開けてくれた。
クレスたちが足を踏み入れると、部屋の中央に光のしずくを纏った美しい精霊が姿を現した。ふたつの月ときらめく星をデザインした繊細で華奢な髪飾りをつけている。
「私はルナ。あなたがたが来ることはわかっていました」
ルナはそう言うと、微笑んだ。クラースは精霊の近くまで進み出る。
「ダオスを倒すためにあなたの力が必要なんだ、どうしても。もし力を示せというならここで存分に……」
「私は戦いは望みません」
ルナはきっぱりと首を振った。
「たとえ相手が魔物だとしても。けれど、時代は変わりました……いまのこの世界の状況では、戦わずに生きることは死を意味するのかもしれません。私でよければ、力になりましょう」
「本当か！」

クラースが喜びの声をあげる。
「アルテミス、聞いていますね？　私は行きます……この次ここへ戻るまで、この塔のことはおまえにまかせます。しっかりね」
ルナは宙に向かってそう言うと、クラースの差し出したふたつの指輪のうち、ムーンストーンの方を手に取った。
(よかった。役に立つ指輪で)
儀式を始めたクラースの後ろで、クレスたちはほっと胸をなでおろしたのだった。
ルナとの契約がすむと、クラースは扉のかげでうなだれているアルテミスを見つけてそばへ行き、
「悪いな、しばらくルナを借りて行く。なあに、俺は人間だから何百年も生きるわけじゃない。じきに死ねばルナは戻るから、心配するな」
と、ふっくらした頰をそっと撫でてやった。アルテミスは竪琴を抱きしめ、さみしそうに目を伏せたが、やがてこっくりと頷いた。
外へ出ると、すっかり夜の帳が下りていた。暗い空にふたつの月がかかっている。ミッドガルズに向かい荒れた草地を歩き始めたクレスたちは、風に運ばれてくる竪琴の調べを耳にした——。

交錯する低い峰と谷を越えれば、そこはもう大国ミッドガルズだった。都に入ったクレスたちは、想像以上に空気が緊迫していることに驚いた。
「ずいぶん殺伐としてるな」
人々はみな厳しい表情で足早に行き過ぎる。ひどくみすぼらしい格好をした少女が走ってきて、アーチェにドンとぶつかった。
「痛たっ」
「ねえ、なんかちょうだい。食べるもの、ちょうだいよぉ」
服を摑まれてアーチェがとまどっていると、道端にぼんやり座り込んでいた男が声をかけてきた。傭兵らしく、戦闘用のサーベルをさげている。
「ねえちゃんたち、それは孤児院の子だよ。今度の戦いの前哨戦で親を亡くした子供で、孤児院はぱんぱんに大繁盛さね。物資が足りないからろくろく食事もさせてもらってないんだ」
「ひどい……」
アーチェは顔を曇らせた。
「あんたがたもアルヴァニスタから来たんだろ。俺もさぁ。ああ、早く帰りたいもんだ

なあ」

ミントは少女の背中から、気づかれないようにそっと法術をかけた。

「ヒール！」

とたんに子供らしい笑みが少女の顔にあふれ、頬はバラ色に染まった。

「バイバイ」

と手を振り、走って行く。

「さあ、こんなところで油を売っている暇はない。行くぞ」

クラースが促した。

ミッドガルズ城の近くまで来たとき、今度は十人ほどのエルフ兵があわただしく駆けて行くのに出会った。揃いの鎧の胸にはアルヴァニスタの紋章があった。

(さっきの兵士といい、エルフたちといい……僕たちがレアード王子を救ったんで、アルヴァニスタの人たちがずいぶん参戦しているんだな)

クレスは城の門の前で、衛兵にエンブレムを示しながら考えた。

「エドワード・D・モリスン殿に会いたい」

クラースが告げると、一行はすぐに城の軍事会議室へ通された。

「物々しい雰囲気だわね」
会議室のテーブルに置かれている、びっしり書き込みされた世界地図や武器の見本の数々を見回して、アーチェはため息をついた。
やがてドアが開いて、恰幅のいい男が入ってきた。幅の広い深いグリーンのマントをまとっており、太い眉が印象的な顔だちだ。
「お待たせした。私はこの国の騎士団長、ライゼンという者だ。貴公らの活躍はモリスン殿から聞いている。まだお若いのに一騎当千の強者にも劣らぬ勇士とか」
ライゼンが大声で誉めちぎると、クレスは「へへ、それほどでも」と思わず頭を掻いた。
「やあ！　本当に来てくれたんだな！」
「モリスンさん！」
戸口から大股で歩いてきたモリスンは、クレスの手をがっちりと握りしめる。彼はすっかりミッドガルズ軍の重要な参謀となっているようだった。
「遅くなってすみません。僕たちにもお手伝いさせてください。力を合わせてダオスの野望を阻止しましょう」
モリスンが頷くのと同時に、アーチェが「はあ？」とすっとんきょうな声をあげた。

「野望……？　なによ、ダオスにそんな、大いなる野望なんかあるの？」
「なにを言っているのかね」
ライゼンが太い眉を寄せた。
「ダオスはこの世界を滅ぼそうとしているのだぞ！」
「うっそー……ホントに？　まじで？」
アーチェはあんぐりと口を開け、驚きをあらわした。
「変ですよ、アーチェさん。どうしたんですか」
ミントが心配そうにアーチェの顔を覗き込む。
「へ……へぇ～……ま、いっか」
「も、申し訳ない。何か、考えすぎてしまったようで」
クラースがあわてて取り繕った。
(考えすぎたんじゃなくて、なんにも考えてないんじゃないか？)
アーチェの態度に、クレスは密かに苛立った。
「とりあえず、そのお嬢さんが落ち着いたら貴公らは謁見の間へ。国王がお待ちだ」
ライゼンとモリスンは先に会議室を出て行った。
「おい。だいじょうぶか」

クラースが声をかけたが、アーチェは黙りこくったままなにかをじっと考えているようだった。

謁見の間で待っていたミッドガルズ王は、クレスたちの参加を心から喜んでいるようだった。

「我が国はエルフとの交流もなく、こと魔術に関しては疎い。ダオスは魔術でしか傷つかぬというのに、だ。クラース、クレス、ミントにアーチェか。そなたらのような者たちが戦列に加わってくれれば心強いことこの上ない」

王は疲労のにじんだ頬に笑みを浮かべた。

「恐れ入ります。で、アルヴァニスタからエルフの援軍は」

クラースの問いに、王が苦々しい表情で答える。

「先ほど魔法部隊が到着したが、いかんせん人数が少ないのだ」

さっき会ったエルフたちのことだな、とクレスは思った。

「かわりといってはなんだが、我が国では今回の戦争の切り札となる研究を進めている。じきに完成するが、その時には魔科学地下研究所へ案内させよう」

「それはどんな研究なのですか」

ミントが訊ねると、ライゼンは胸を張って言った。
「対ダオス用の究極の兵器だ。それが完成すれば最終的には人間でも魔術が使えるようになる」
「なんだって⁉　それはいったいどういう……人間が魔術を……夢みたいだ。すごいぞ」
信じられないといった表情で、クラースがつぶやく。エルフに劣等感を抱きながら厳しい研究の日々を重ねてきた彼にとって、それは文字通り夢に違いなかった。
ライゼンが咳払いをする。
「それでは、現在の状況を説明しよう。北方の山脈に魔物の軍隊が集結しているとの情報が入っている」
「魔物の？」
クレスたちの間に、さっと緊張が走った。
「さよう。戦は近い。貴公らにはこの都で待機を願いたい」
「かしこまりました」
クラースは胸に手を当てて一礼した。

モリスンに見送られて城門を出たとたん、
「あたしは納得してないからね！」
アーチェが吐き捨てるように言った。
「え」
クレスがなにごとかと目を見はると、
「だから、ダオスの目的のことだって。確かにあいつは町を襲った。人を殺めたし、魔物を操ってる。でもね、あいつがベネツィアやユークリッドを襲ったことって、ある？アルヴァニスタだって、やろうと思えばできたのに、王子を人質にとって動けなくしただけでしょ」
と、息まいた。
「なにが言いたいんだ」
クラースが渋面を作ると、
「んもう、みんなあったま悪いんじゃない？　ダオスが直接ちょっかい出したのって、ミッドガルズだけじゃん。なのにそれを、〝世界を滅亡させようとしてる〟って受けとるのはおかしいよ」
と詰め寄った。

「でも……リアさんがいたハーメルの町も襲われたじゃありませんか」
ミントの言葉に、アーチェは「そこなのよねえ」と頭を抱える。
「うーん。あたしの考えすぎかなあ。ミッドガルズと、ハーメルまたはリアの両親。なにか共通点があるはずなんだけど……他の町は無事だったんだからさぁ……あ、そうだ！」
「今度はなんだ」
クラースがため息をつく。
「これからあたしの家に行ってみない？　お父さんがなにか知ってるかもしれない」
それに文句も言いたいし、とアーチェは口のなかでつぶやいた。
「ダメだよ、ここに待機って言われたばっかりだろ」
「じゃ、クレスは待ってれば？　パパッと行ってくるからさ、パパッと」
「おいおい」
「しゅっぱーつっ！」
アーチェの勢いを止めることは、もう誰にもできそうになかった。
ようやくローンヴァレイの家に到着すると、アーチェはまずドアの外で深呼吸した。

それから、はずれてしまうのではないかと思われるほどの勢いでドアを乱暴に開け、中に飛び込んだ。
「ア、アーチェ!?」
「お父さんのウソつきっ！　お母さん、死んでないじゃん！」
驚いて台所から出てきたバートに向かって叫ぶ。
「なっ、ななな……」
バートはしばらく絶句していたが、やがてがっくりと肩を落とした。
「そうか、会ってしまったのか……ユミルの森でか？」
「うん。どうしてお母さん出ていっちゃったの？　なんで浮気なんか」
「か、勝手に決めるなっ」
バートは顔を真っ赤にして怒った。
「エルフは種族として団結する道を選んだ。たしかそうだったな」
クラースが言うと、バートはくちびるを噛みしめた。
「そうだ。十数年前まではエルフと人間は共存していたんだ、かつての私たちのように。なのにあるとき突然彼らは人間を嫌い、エルフの血が人間と交わることを拒んで、ユミルの森に移り住んだ……。もちろん、ルーチェ……おまえのお母さんは好きで出ていっ

たわけではなかった」

「じゃあ、他のエルフに無理やり？」

アーチェは母親そっくりの真紅の瞳で、バートをじっと見つめた。

「ああ、そうだよ。人間と共に暮らしたいと思っているエルフだって数多くいたのさ。あの日——ルーチェは突然やってきたエルフの男たちに連れて行かれた。引き裂かれたんだよ、私と彼女は」

バートは「火を止めてくる」と言って台所に入り、すぐに鼻をすすりながら戻ってきた。

「私はエルフを問い詰めた。どうしてこんなことになったのか、とね。あいつらの言葉は今でもはっきり覚えているよ……『お前たち人間が悪いのだ。今までしたこと、これからしようとしていることの愚かさを知るがいい。それができないうちは、我々はいかなる人間にも力を貸すことはないだろう』。そう言ったのさ」

（人間がしようとしていることの愚かさ……）

いったいなんだろう、とクレスは考えてみたが、答えは見つからない。

「私にはなんのことかまったくわからんよ。ルーチェは、自分を死んだことにしてくれと私に頼んだんだ」

アーチェはため息をひとつつくと顔をあげた。
「わかったよ、もう。でもお父さん。もし、いつかお母さんが帰ってきたら、許してあげてね。お母さん……泣いてた」
「許すもなにも、私は一度たりとも彼女をうらんだりしたことはないよ」
バートは充血した目でクレスたちを眺め、それから思い出したように食事をすすめた。
「いつかの馬に働いてもらって畑を作ったら、トウモロコシがとれたんだ。これが意外にうまくてね」
「さっきからいい匂いがしていたのはそれだったんですね。私、お手伝いします」
ミントがいそいそと台所に入って行った。
「それはそうと、こちらも聞きたいことがあるんだが、いいかな」
クラースが椅子にかけながら、バートに訊ねた。
「もちろん」
「そうそう、リアの両親のことなの。あの人たち、なんか悪いことでもしてたの？」
「はあ？」
「スカーレット夫妻とミッドガルズの間になにか関係があるかどうか、知りたいんだ」
娘とクラースの問いに、バートは面食らったようだった。

「関係といわれても、そんなに親しかったわけでなし……。数年前にミッドガルズから引っ越してきたっていうくらいしか思い当たらんな。なんでも夫妻は城で未知の力に関する研究をしていたと聞いたが……それがなにか？」

「未知の力……クラースさん、もしかして魔科学のことではありませんか？」

台所から湯気の立つコーンスープの皿を運んできたミントが言った。

「うん……魔科学とダオス……関係あるんだろうか」

そのとき、クレスのお腹がせつない音をたてた。

「いただきます、バートさん」

コーンの甘い香りに、たまらずスプーンを取る。クラースもアーチェも、自分がひどく空腹だったのを思い出した。

おいしい、とアーチェが湯気の中で微笑んだ。ミントも幸せそうに目を細める。束の間の、至福のひとときだった。

「うーん、ぷちぷちって粒が口の中ではじけるぅ！　馬って役に立つんだねえ、お父さん。餌はなにをやってるの？」

「なにって、だからトウモロコシさ。まだ餌用の畑しか作ってないからな」

「げっ、じゃあこれって馬の餌？」

アーチェは大げさにのけぞってみせながらも、父親との別れのときが迫っているのを感じていた。
ミッドガルズへ戻ったクレスたちが城門前までやって来ると、そこには人垣ができていた。
「なんだ？　騒がしいな」
クラースが眉をひそめたとき、彼の姿を見つけた衛兵がすっ飛んできて叫んだ。
「大変です！　ダ、ダオス勢の魔物が子供を人質にとって……モリスン殿が説得していますが、とてもとても……」
「どけ！」
クラースが人垣を掻き分け、前へ出る。クレスたちも続いた。
「くそっ。戻るのがひと足遅かったか……」
クラースが舌打ちする。頭に角を持つ魔物が、ひとりの少女をがっちりと腕に抱え込み、剣を突きつけていた。ミントが「あっ、あの女の子」と小さな声をあげる。囚われているのは先日出会った孤児院の少女に違いなかった。極度の恐怖のためだろう、ぐったりとしてしまっている。

「エドワードさん！　これはいったい」
クレスが声をかけると、こちらに背を向け、魔物と対峙していたモリスンが振り返った。
「来るな！　君たちはこれから大切な役目を果たさねばならない。来てはいけない！　こいつはダオスの手下、ジェストーナ。手強いぞ」
ジェストーナは耳まで裂けた真っ赤な口を開け、
「ふふ、やっと役者が揃ったか。偵察に来たついでに貴様らの命を絶ってやる。ダオス様もお喜びになろうというもの。このガキの命が惜しければ、全員ただちに自害するんだな」
と笑った。
「バカ言ってんじゃないわよっ！」
アーチェが怒鳴った、そのとき。モリスンの姿が消えた。
「あっ!?」
クレスは自分の目を疑ったが、次の瞬間、彼はジェストーナの後ろに現れた。
「見たか、クレス君！　これをもっと拡大すれば時空転移を引き起こすことも可能になるはず……」

「こしゃくなっ！」
ジェストーナは少女を放り出すと、振り向きざま、モリスンに斬りつける。
「ぐわぁぁぁぁっ！」
モリスンの胸と腕から鮮血が噴き出す。
「ああっ、エドワードさんっ！」
「来るな……」
肩で息をしながら彼はものすごい形相で、助けに走ろうとしているクレスを拒絶した。
そのままジェストーナにしがみつく。
「うぉ⁉　な、なにをする……」
バアアアァァァ————ンッ！
閃光が走り、耳をつんざく爆音が響き渡る。数秒後、ふたりは鼻をつく焼け焦げのにおいの中、剣と服の切れ端だけを残し、消滅していた。
「きゃああっ！」
ミントが激しくいやいやをした。人垣がさーっと解けて散る。
自爆魔法だ、とクラースがつぶやいた。
「アーチェ、よく見ろ。これでもまだダオスのこと、疑問に思うっていうのか……」

震える指で、クレスがアーチェの肩を掴んだ。
「……ごめん、もう疑ったり、しないよ」
「クレスさん。私たちは二度もモリスンさんに助けられたことになりますね……でも、これで歴史が変わってしまいました。彼がこの先も生き続けたからこそ、私たちが今ここにいるというのに……これから先いったいどうすれば……」
ミントのくちびるは蒼白だった。
クレスの手がアーチェの肩から滑り落ちる。そして、すぐにぐっと握られた。
「もうたくさんだ！　僕たちで奴を倒す。そしてすべてに——決着をつけよう！」
涙で滲んだ視界の中に、城から飛び出してくるライゼン騎士団長の姿がぼやけて映った。

「まずは、ここで緊急の報せがある！　北の山脈に集結している、ダオスの魔物軍団だが……」
ライゼンが声を張る。
ミッドガルズ城の軍事会議室で行われている極秘作戦会議の席に、クレスたちはいた。
出席者は重臣をはじめ、各部隊の責任者など、総勢百名は下らないだろう。ライゼンの

表情も、先日とはくらべものにならないほど厳しいものだった。
大陸地図が広げられた。
「したがって、我々との衝突地点はここ、ヴァルハラ平原と思われる」
（なんだって⁉）
クレスはハッとして隣に座っているミントを見た。彼女も驚きに目を見張っている。
「ヴァルハラって、あの有名なヴァルハラ戦役の……」
「ええ。アセリア暦四二〇二年……人類が生き残りをかけて戦ったと母に習いましたが」
ふたりはひそひそと囁きあった。
ライゼンは力強い口調で説明を続けていたが、やがてクラースに起立を求めた。軍人たちの好奇の目がいっせいに注がれる。
「クラース・F・レスター殿。貴公を第四特殊部隊長に任命する」
おおっ、というどよめきが起こった。ごつい甲冑に身を包んだ男が、軍人たちを代表するように拳を振り上げる。
「ライゼン殿！　こんな奇怪な風体の傭兵なんぞに、重大な任務をまかせるというのですか⁉」

「黙れ！　これはモリスン殿が生前に決めておられたこと。私とて異存のあろうはずがない。クラース殿、任務についてはこれからご説明申し上げる。受けてくださいますな？」

「……よろしいでしょう」

ライゼンの射抜くような視線から目を逸らすことなく、クラースはしっかりと頷いた。

（アセリア暦四二〇二年、ヴァルハラ戦役……。歴史を塗りかえるのは僕たちなんだ。なんとしてもダオスを倒し、すべての破滅から遥かな未来を救わなくては――チェスター、待っててくれよ！）

クラース、ミント、アーチェ。怒号渦巻く会議室で、クレスは仲間の顔をひとりひとり見つめた。

（下巻へつづく）

あとがき

　子供のころから小説、映画に限らず、とにかくタイムトラベルものが大好きでした。まあ、SF・ファンタジーはなんでも好きだったんですが。もし今誰かに「タイムマシンをあげるから、未来でも過去でも好きな時代に行ってきていいよ」といわれたら、どうするかなあ。そういえば、婚約中に「彼と私がちゃんと幸せになってるかどうか（未来に行って）見てきたい！」と言っていた友人もいましたが……。
　やっぱり最初に思いつきそうなのは、月並みだけど自分の子供時代と未来ってところでしょうか？　でも、どちらに行ってもなーんか不満が残るんじゃないかという気がします。結局、知るのが怖くて二の足を踏んでしまうかも。せいぜい一か月後の未来に行って、自分が書き上げた原稿をコピーして帰ってくるというようなズル行為（でも名案）くらいしか現実味がないです。
　この『テイルズオブファンタジア上』でも、クレスとミントが時空を超えて過去の世界に行くわけですが、なにがスゴイといって、行くとは知らずに行ってしまうほどスゴイことはないでしょう。ひとこと言ってほしいよね（このへん、のちのちちょっと事情

が違ってきますが)。クレスたちを時空転移させたモリスン。私は彼のファンだったりします。ゲームのオープニングムービーに出てくるモリスンさんなんか、もう最高っ。彼にならと突然時空転移させられても文句は言えない。

渋いし大人だし、実は最初けっこう年がいっているのかなあと思ってたんですよ。でも設定では、トリニクス・D・モリスンはクラースより七歳上の三十六歳なの。老成してますよねぇ……クレスたちを助けるためとはいえ、死んでしまって悲しい限りです。

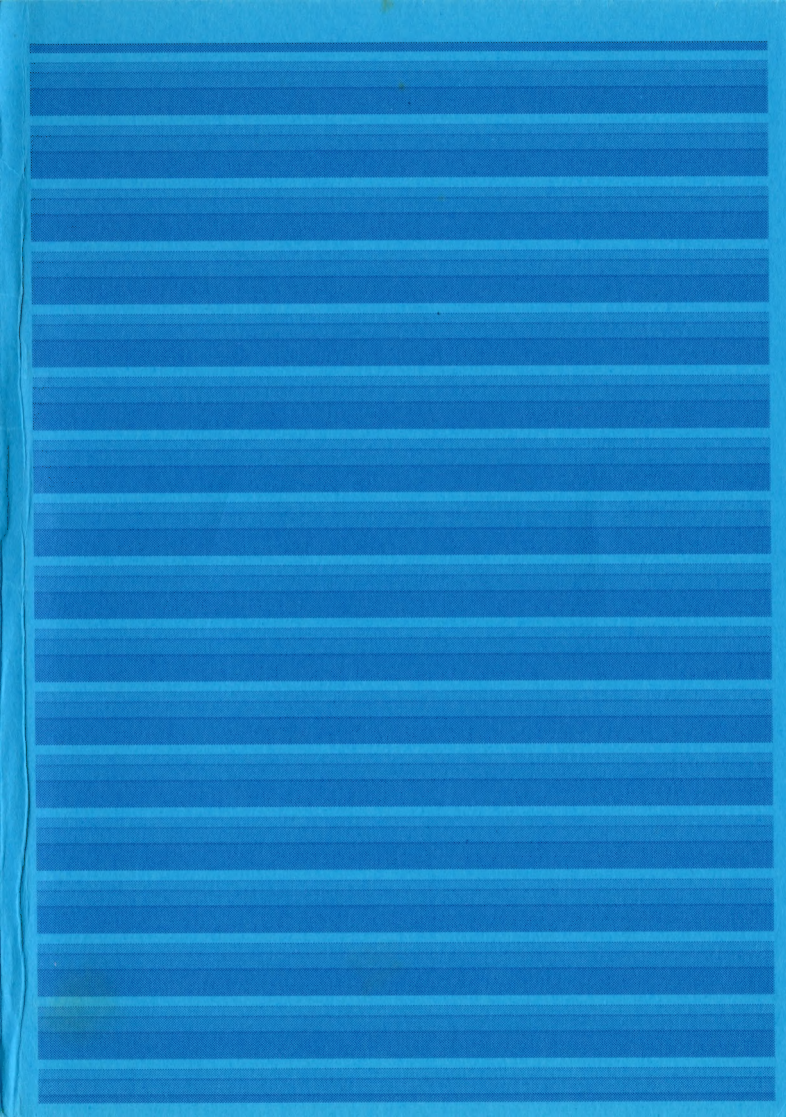
さて、クレスたちのお話はこのあと下巻へと続きます。

ヴァルハラ戦役の勝敗は？　ダオスの正体とは？

クレスは誰とハッピーエンドになるのでしょうか？　なるとしたら、ですけど。ミントがおとなしいからアーチェが狙ってたりして、これはわかりませんよ～、ふふふっ。

舞台も現時点の過去から未来へと移ります。ぐんぐん力をつけ、成長めざましいクレスの活躍を、どうぞ楽しみに待っていてくださいね。そして、ご感想など聞かせていただけたら、うれしいです。ではまた。

矢島さら

一九九八年十一月

矢島さらの著作リスト

テイルズ オブ デスティニー
運命(とき)をつぐもの 上 下

テイルズ オブ デスティニー
青の記憶

テイルズ オブ ファンタジア
はるかなる時空(とき) 上

ISBN4-7572-0272-5
C0176 ¥640E

定価 本体640円 +税

発行○アスキー
発売○アスペクト

主人公・クレスの家は代々続くアルベイン流剣術の師範だ。クレス一家が住むここトーティス村では娯楽らしい娯楽がほとんどないことも手伝い、道場はなかなかの盛況をみせていた。ある日、クレスが親友のチェスターと森に狩りに出た際、村に異変が起きる。警鐘に気づき踵を返したクリスを待ち受けたのは、謎の集団の手にかかった両親の死。母の最期の言葉にうながされたクレスは都へと旅立つ。